
ドリーム×リアリティ ファントムな君

タカヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリーム×リアリティ ファントムな君

【Nコード】

N6347C

【作者名】

タカヤ

【あらすじ】

その朝、少年は長らく見ることのなかった夢を見た。過去に失ったものへの追憶――に呑気に浸る暇もなく彼の慌しい日常は幕を開ける。それは、ただの夢か、現実か、それとも幻か。信じるかどうかは、あなた次第。

プロローグ

ああ……。これは——いつか見た夢だ。いつ以来だろう、夢を見るのは。ぼんやりと、思考が浮遊するような不思議な感覚。ずいぶん懐かしいようで、それでいて、心許ない。

実体のない感覚。真っ白な世界。どこから、声が聞こえる。

ずいぶんはっきりと、ずいぶん鮮明に。まるで、心に直接語りかけられてでもいるように、その声は俺の中に入り込む。

——あなたは、そこにいますか？

優しい声が、俺の心に染み渡る。なんだろう。この声を俺はどこかで聞いたことがある。そう感じた瞬間、なぜか目から涙が溢れ出していた。

——あなたは、そこにいますか？

なぜ、悲しいのだろう。なぜ、切ないのだろう。なぜ、愛しいのだろう。そして、なぜ、こんなにも心苦しいのだろう。

涙で思考が溺れる。そして、世界が揺らぐ。夢が終わろうとしている。その只中でもなお、その声は優しく俺に語りかける。

——あなたは、そこにいますか？

応えなければいけない。でも、応えることができない。

ああ……。きっと、この声はそうだ。

世界が目の前から消える瞬間。その間際に聞こえたあいつの声。

——あなたは、そこにいますか？

悪夢にしては、その声は優しすぎた——……。。

一話「朝」

意識の端で目覚ましの音がピリリリリと単調かつやかましい音を奏でていた。朝っぱらから、手荒な歓迎で迎えてくれる戦友。早速、俺は半ばキレつつ、朝の挨拶代わりに親友の顔面にストレートパンチをぶち込むノリで、目覚まし時計をわしづかみ、壁に投げつけてやった。

あえなく、黙り込む戦友。もちろん、本気でやると壊れてしまうのである程度の手加減はしている。

「キレても加減は忘れない」

それは、長年の修行（寝起き）で編み出した俺の極意であり、こゝと闘争に関してもこの極意は発揮される。まあ、朝起きる度にいちいち目覚まし時計壊してたら、家計が大変なことになるからな。と、そんなことはどうでもいい。

しばらくベッドの中でまどろんでいると、なにやら、階下からドタドタとやかましい足音が近づいてきた。まあ、いつものことだ。

「一輝^{かずき}いー！」

慌しくドアを開け、やかましい怒鳴り声で俺の名前を叫んだ主が、空中に舞い無防備にベッドに寝ている俺にボディプレスをかましてきた。しかし、偶然にも寝返りを打ちざま、仰向けに転がった俺は、これまた偶然にも右ひざを立てていた。

うっすらと目を開ける俺。そして、俺目がけて降下してくるそいつ。そして、目が合った俺たちは「「あ」」と揃って声を漏らした。

一瞬だけ、時間が止まったような気がしたが、もちろんそれは気のせいだ。そいつはあえなく俺の膝の上に腹から激突すると「ピギエ！」と蛙が踏み潰された時に出すようななんとも情けない悲鳴を上げ、地面をのた打ち回ることとなった。

何とか、膝を折り曲げようとしたが間に合わなかった。つーか、奴の反射神経を持ってして、受身も取れていない時点で、俺の反射などではどうがんばってもどうにもならない。

俺の部屋で、呼吸困難にあえぎながら床をのた打ち回っているそいつ。自業自得とはいえ、その苦しみ方はまるで女を捨てたがごとく強烈だったので、ちよっと、良心が痛む。つーか、俺の部屋でゲロ吐くな。後で、ちゃんと掃除しとけよ。

——紹介が遅れたが、未だにゲロを撒き散らしている、汚いことこの上ないこの女は認知したくないが、真正銘俺の実の姉だ。名前は、綾瀬みう。年は十八。それ以上の情報は自主規制しておく。恥だから。

やがて、朝っぱらから胃の中の内容物をすべて吐き出した姉貴は、ゆらりと顔をうつむけつつ起き上がった。

うん。背後にぼんやりと見える謎のオーラは恐らく殺気というものらしいな。間違いなく命の危機なのだが、パジャマに撒き散ったゲロを見て、お前制服に着替える前でよかったな、などと呑気なことを考えている俺はある意味すごいのではないだろうか。

女を捨てた阿修羅が俺に襲い掛かってきたのは、それから数秒後のことだった。

気がつくと、床に寝そべって眠っていた。ゆっくりと目を開けると、一番に目に入ったのは、床に転がった目覚まし時計。どうやら、時刻は平時より十五分ほど先を先行しているようだった。

体を起こすと、まるで全身打撲に陥ったような――というか、これは全身打撲だな。どういうことだ？

てっきり、先行した時間を二度寝のためと踏んでいたのだが、なぜかゲロにまみれ異臭漂う自分の部屋の有様を目の当たりにして、すべてを思い出した。

フラッシュバックのように蘇る、女を捨てた阿修羅が俺に襲い掛かってくる光景。そういえば、散々暴行を加えられた後、仕上げにスリーパーホールで落とされたんだったな。つか、あいつ俺を起こしに来たんだよな？ ゲロ掃除してねえのが、なんか無茶苦茶テンション下がるし。

とにかく、動かす度にいちいちぎしぎしと骨が軋む体を引きずり階下に下りる。

リビングに入ると、制服に着替えた姉貴がソファにふんぞり返りながら、呑気に朝のニュースを眺めていた。つか、お前俺の部屋掃除しとけ。

ばれないように背後に立って睨みを利かせていると、不意にぐりつと首を回して、姉貴が目を細めて俺を睨み返してきた。

「なんか言いたげな目してるわね」

「……別に」

減量の只中で、感覚が研ぎ澄まされたボクサーかお前は。つーか、てめえのゲロはてめえで始末しろ、ボケ。

「まったく、あんたのせいで朝からえらい目にあったわよ」

その台詞、そっくりそのままお返しします、ゲロ女。

「――誰が、ゲロ女だって？」

「は？」

「あんた、さっきから思ってること口に出てるわよ」

「マジで!？」

思わずその声を上げた直後、顔面にテレビのリモコンが飛んできた。無論、避ける間もなく顎にクリーンヒットしたテレビのリモコンは、見事俺の平衡感覚を奪いカーペットの上に着地を決めた。

「さっさと朝食の支度しなさいよ。遅刻しちゃうでしょ」

「……りょーかい」

畜生。どうやら、まだ寝起きで脳が起きていないらしい。まあ、暴行を受けた後遺症も含まれているのだろうが……。

「よお、アスカ。おはよ……」

「おはよう……」

キッチンのテーブルの前にちょこんと座り、朝食を待っているアスカに声をかける。姉貴にいびられる俺を見てもまったく動じず、心配のしの字の素振りも見せないこの女の子は、小学四年生の妹、綾瀬アスカだ。

同世代の子供たちに比べても、かなり体格の小さなこのロリっ子は、究極の無口であり、下手をすれば一日の発言単語は「おはよう」と「おやすみ」で済まされてしまいかねない。おまけに、感情をあまり表に出さないものだから、兄の俺もこいつがなにを考えているのかは把握しかねる。

ちなみに、うちの両親は只今海外出張という名目のバカンスに出ている、かれこれ一年ほど音信不通だ。よって、このうちの家事全般はなぜか、女性陣を差し置いて、男の俺がすべてを担わされている。

しかし、アスカはともかく、お前は朝飯ぐらい用意しとけボケ姉。

「お腹空いた……」

まるで独り言のごとく、ぼそりと小声で呟くアスカ。珍しく自分から話かけてきたと思ったら、メシの催促かよ。敬愛する兄をいた

わろうって気はないのか、アホ妹。

「はいはい。今作るよ」

「はいは一回……」

「……」

こいつ、何気にSの気があるな。ってか、この姉にしてこの妹ありってか。もちろん、血を分けていても、断じて俺だけはまともだとこの場を借りて断言しておく。

「ったくう。あんたのせいで、アスカがお腹すかせてるじゃない。かわいいそうにねー」

キッチンに立つ俺の背後で、ダイニングに入ってきた姉貴が嫌味つたらしくアスカに声をかけている。

「まったく、この出来損ないのメイド首にして新しいのでも雇おうかしらね」

「一輝……くび……」

よし。今日のメニューは練りカラシまるまる一本ぶち込んだ、一輝特性「死ねや弧羅」スペシャル玉子焼きのフルコースで決まりだな。

とりあえず、その朝俺は朝食をとらず、マッハで身支度を整え家を出た。

二話「登校」

寝起きから慌しいことこの上ない朝だったが、いつものことだからもう慣れた。しかし、家にいるよりも、登校するこの瞬間に安息を感じる俺の生活環境というものは、疑う余地もなく異常だ。あいつら、姉妹。特に上の奴。頼むから、消えてくれ。

と、今更嘆いてみたところで、悲しいかな人はどんなことにもやがては慣れ、それが日常となるものだ。しかし、体は順応しちまっても、心まで差し出す気はない。不満が消えること、すなわち、俺自身の存在意義の消失だ。

つてわけで、今日も特性料理の新メニューを考えながら、一人静かに通学路を歩く。なにを隠そう、俺はこういった何気ない時間の中に潜んでいる一人の時間が好きだ。そして、姉貴が悶え苦しむような特性料理を考えることも。

つて、これだけ言っていると、なんか俺陰気な根暗野郎みたいだな。断じて違うなんて言ったところで、一人で身内の悶え苦しむ術を考える時間が好きってカミングアウトした時点で、いいところ、サディストじゃねえか。

いや、違うから。虐げられてんの俺の方だから。

「いよーす！ 一輝、オッハー！」

「……」

朝の静寂を無遠慮に突き破る耳障りな声が、背後からフレンドリ

「俺の名を呼んできた。ような気がしたが、俺はさりげなくスルーした。すると、今度は耳元で囁かれた。

「か・ず・き。オッハペ」

あまりにもウザかったので、挨拶代わりにストレートパンチを顔面にぶち込む。つか、オッハーって、なに時代の人間だお前。って、そこまで古くはないか。

「うほほう……。今日はまた、ずいぶんとご機嫌の悪いことで……」

朝っぱらから、鼻血を垂れ流しているこいつの名は、ウザ田ウザ男——もとい、木村重雄^{きむらしげお}。自称俺の親友こと、究極の変態だ。

校則を完全無視した金髪に、ウルフヘア。俺よりも頭ひとつ高い長身に、女受けする甘いマスクを兼ね備え、さらにそこに世の男の百人分の下心を詰め込めば、こいつという人間が出来上がる。

「まったく、近頃の若いもんは」という中高年の方々のお決まりの嘆きの日本代表、とでも言えば、分かりやすいか。趣味が合コンという名の女漁りという時点で、すぐにでも友人の縁をぜひ切りたいのだが、なぜか、こいつはいつも俺に馴れ馴れしくくつついてくる。

小学校の頃から続く腐れ縁というものは、なかなか切れづらいということだ。

「——で？ 今日またなにがあつたのかな、一輝君？」

楽しげな声を出しながら、俺の前を後ろ歩きで付きまってくる重雄。とにかく、ウザい。

すれ違う女という女すべてをチェックして点数をつけるところも、赤シャツの上のカッターシャツの裾をだらしなく出してるくせに、ハンカチとティッシュをきちんと持ち歩いているところも、地味な名前のくせにチャラけてるところも、とにかく、存在自体がウザイ。

「確か、この前は寝起きに四の字固めだろ？　そんで、その前はコブラツイスト、アイアンクロスラム、アックスギロチンドライブー、アトミックドロップー」

「俺に忌まわしい過去を思い出させるんじゃない」

またしても重雄の顔面にストレートパンチを見舞ったのだが、今度はスウェーでかわされた。が、その拍子に背後の電信柱にしこたま頭をぶつけたので、よしとしよう。今度からは、ちゃんと前見て歩け。

「ぬうう……！　一輝い、図ったな！」

数秒その場にうずくまり、頭を抱えていた重雄だったが、すぐに復活して後を追ってきた。今更だが、ほんとタフだなお前。

「ち……」

「なに、その舌打ち！　標的をやり損なった殺し屋のような、その冷酷な舌打ち！？」

誰が殺し屋だ。つか、そこまで俺の心情分かるなら、いい加減俺に付きまとうのはやめろ。もしかして嫌がらせかお前。

「朝っぱらから、うるさいな……。学校行くときぐらい一人にさせ
てくれ」

「お！ いいねえ。孤高の一匹狼気取りってか。青春だねえ、この
桃色——」

ボディブロー三発で重雄を黙らせ、足早にその場を離れる。と、
背後で通りすがりの女子高生が「大丈夫ですか」と優しく重雄にハ
ンカチなどを差し出していた。

重雄が「グッジョブ」と口パクしながら、俺に親指を立てる。こ
の場で即止めをさしてやりたい衝動に駆られたが、事情の知らない
純粹無垢な女子高生が、今にも噛み付いてきそうな、それでいて、
涙をためた目で俺を懸命ににらんでいたので、そうするわけにもい
かない。

悪者として、悠然とその場を離れる俺。そして、背後で早速ナン
パに勤しむ重雄。

女って奴は、みんなあんな奴がいいのだろうか。って、この場合、
どう正論かましても
ひがみにしか聞こえないな、畜生。

「……ウザ」

……まあ、一人になれたからよしとするか。重雄の奴は学校で会
ったら二、三発食らわ
しところ。

「あ、一輝。おはよう」

「……おはよ」

やっとこさ一人になれたと思った矢先、またもや背後から声をかけられた。しかし、その声の主は常識をわきまえ、かつ、人間的にも問題のない奴だったので、普通に挨拶を交わしておく。

声の主は、そっと俺の隣に立ち、そして同じ方向を歩く。

柊夏美。^{ひいらぎなつみ}重雄同様、小学校の頃からの付き合いの幼馴染だ。まあ、身内と親友のせいで女性不信に陥っている俺の中での、夏美のポイント（好感度とでも思ってくれ）はかなり高い。

なぜかって、答えは簡単。夏美は、ヤツ（みう。俺の実姉）のように気に入らないことがあるとにかくプロレス技を仕掛けてくるような野蛮性はカケラも持ち合わせてはいない。

それでいて、ヤツ（重雄。別名ウザ男）の誘惑にほいほい乗せられる女共で溢れかえっている昨今、夏美だけはそんなヤツの誘いを一笑に付して、セクハラだといわんばかりにビンタを返すおおらかさまで兼ね備えている。

おまけに、常識をわきまえ、他人の意思を尊重することも忘れないう。俺の異常な日常の中、これだけハイスペック、かつ、まともな友人がいることは、まさに奇跡としか言いようがないだろう。

と、ここまで夏美をベタ褒めしたわけだが、別に夏美は俺の彼女でもなんでもない。ってか、あの面子の後では大抵の人間がお釈迦様のように思えてしまうのは不可抗力というものだ。

「珍しいね。今日はキー君と一緒にじゃないんだ」

そう言って、体を少し前に倒し、覗き込むように俺の顔を見てる夏美。

背中まで届く長い黒髪が、天から降り注いでくる朝日に照らされて眩しい。さらには、大和撫子を思わせる柔和な表情。最近は女子高生も化粧をするのは常識だと重雄のヤツが言っていたが、夏美がそんなことをしたところなど一度も見ることがない。

もっとも、健康的かつ、柔らかなもち肌を持つ夏美に、そんなものはいらないのだろう。

幼馴染。長い付き合いの俺から見ても、ひいき目抜きで夏美は可愛い。重雄いわく、一番のチャームポイントは程よく垂れた「たれ目」らしい。そこはまあ、同感だ。

とりあえず、夏美の言葉を見無視するカタチで先を歩く。すると、夏美は小さく笑ってから「なんてね」と声を出した。

「ここに来る途中、キー君に会った。鼻血出しながら女の子ナンパしてたけど、あれ、一輝の仕業でしょ？」

「……とりあえず、顔面に一発とボディに三発入れといた」

ちなみに、キー君とは重雄のことだ。自分の名前を受け入れない本人が、他人にそう呼ぶように強制している。木村の苗字の頭をとって、キー君だ。まあ、俺は普通に重雄、もしくはウザ男と呼んでいるが。

「朝っぱらから、ウザかったもんで」

「確かに、朝からキー君のテンションに合わせるのはちょっとしんどいかも」

「というか、四六時中ウザイ」

俺の台詞に、夏美はおかしそうに笑う。

「ほんと、キー君と一輝って、仲いいんだか悪いんだか分かんないね」

「いや、あいつと仲良くなった覚えはないぞ、俺は」

「でも、ほんとに嫌いだったら、一輝は口も利かないでしょ？」

「……少なくともストレス解消にはなるからな」

まあ、同等にウザイので帳消しだが。

俺の台詞に、夏美は苦笑しながらも、それ以上はツッコんでこなかった。両手で持った鞆を後ろ手に、気持ちよさそうに息を吸い、大きく吐き出す夏美。

穏やかな朝。学校に向かうときぐらいは、一人で行くに限るが、隣に夏美がいるのも悪くない。

「あ、そうだ」

不意に思いついたように声を出す夏美。

「キー君がナンパしてた女の子だけど。真面目そうな子だったから、私がちゃんとフォローしといたよ」

「フォロー？」

「うん。彼女の振りしてキー君と腕組んだら、その子、キー君にビシタしてその場から去っていきました」

「グッジョブ」

そう言って、俺は夏美の肩を軽くポンと叩いた。夏美はイタズラ

っぽく、ふふ、と笑ってから「キー君には悪いことしちゃったけどね」と声を返す。

とまあ、その後も雑談を交わしつつ、俺たちは高校の門をくぐった。

三話「教室」

「一輝いい！ お前、一人にさせるとか一匹狼気取りつつ、ちゃっかり夏美と仲良くご登校ってどういうことだこらああ！ それと、夏美いい！ お前、なにやってくれてんだこらあ！ もうちよつとで、あの女落とせるとこだったのによおおお！」

「朝っぱらから、うすらやかましいわ」

夏美とともに教室に入った途端、重雄が教室になだれ込んできた。そして、俺と夏美を見つけると、血相を変えて怒鳴ってくる重雄。とにかく、やかましかったので顔面にエルボーを食らわせ、大人しくさせた。

——って、しまった。唐突な暴力に、居合わせたクラスメイト全員が少し引き気味な目で遠巻きに俺に目を向けている。重雄ではなく、あくまで俺に。

入学して四日。まだクラスメイトの顔と名前が一致しないこの時期に、あらぬ印象を植え付けてしまうのは非常にまずい。そう思っ
て、ここ三日間、学校ではとにかく湧き上がる暴力欲求を必死に抑えていたのだが……。

「女の子を、落とす、なんて言うような人にはいい薬でしょ」

俺のそばに立つ夏美が、そう言って、ぷいっと重雄から顔を逸らし自分の席に向かう。どうやら、重雄の発言が勘に触ったようだ。一方、顔面でエルボーを受けた重雄は口から血を流しつつ「おのれ、夏美い！」と夏美の後姿を恨めしそうに睨んでいた。

一瞬、教室の中はシンと静まり返ったものの、当の重雄がぴんぴんしているのも、また平時の状態に納まった。俺は内心でほっと息をつき、自分の席に向かう。

今後は、クラスメイトが慣れるまで、重雄へのツツコミはなるべくソフトにするよう気をつけないとな。

「いよーす、一輝！　せっかくお前が協力してくれたのに、夏美のせいで全部パアになっちった。め・ん・ご」

自分の席に座るや否や、背後から近づき、俺に肩組みしてくる重雄。に、振り向きもせず裏拳を顔面にぶち込む。って、言ってるそばから、しまった。

顔を抑え、その場にうずくまる重雄。そして、またもや静まり返る教室。

どうやら、長年体に染み付いた癖というものは、頭で意識するぐらいでは長くは抑えられないものらしい。この瞬間、おそらく俺の第一印象は「怖い人」と拭い難きレッテルを貼られてしまったことは間違いないだろう。ちくしょうが。

「うう……ほんと、今日は機嫌悪いな、カズ君」

「誰がカズ君だ。キモイ呼び方やめろ。あと、そう思うなら、少しは自粛しろ」

ちなみに、教室の席順は出席番号順に振り分けられている。そして、俺は出席番号1番、重雄は2番。入学式でクラス分けを見た瞬

間、俺のテンションが究極に下がったことは言うまでもない。一刻も早く席替えをしなければ、俺の神経マジ持たないから。

「でも、確かに今日の一輝、機嫌悪いよね。もしかして、何かあったの？」

夏美が廊下側の席から、窓際の俺たちの席へ歩み寄り、話しかけてくる。どうでもいいが、夏美は出席番号36番だ。

「夏美、貴様あ！　どの面下げて俺の前に――」

「別になんでもないよ」

「いや、待て、一輝！　俺、今、夏美に物申すところ――」

「でも、いつもよりツツコミがきついみたいだけど」

「夏美までえ！？」

後ろでやかましい重雄をなおも無視し、俺は言葉を発した。

「まあ、あえて言うなら、目覚ましにボディプレスをかましてきたバカが技に失敗して俺の部屋でゲロを撒き散らしながらのた打ち回った後、逆切れして俺に暴行を加え、仕上げにチョークスリーパーで俺を再び深い眠りに落とすただけのことだ」

「た、大変だね、一輝……」

慰めの言葉も思い浮かばず、ただ、感想を述べる夏美。どうやら、ゲロを撒き散らしながらのた打ち回る、の部分が少し生々しく引い

てしまったようだ。

それで「だはは。相変わらずお茶目だな、みうさん」と、普通に会話に参加してくる重雄。確かに、お前のタフさを持ってしてなら「お茶目」で済ませられるのかもしれないが、一言言わせろ。

この、マゾが。

「ちょっ！　なんだよ、一輝、その冷たい視線！？」

「……別に」

「――大丈夫？　一輝」

「ん？　ああ。俺にとっちゃ、もうそれが日常みたいなもんだからな。いやでも慣れるさ。気にすんな」

心配そうな瞳を俺に向けてくれる夏美に、そう言って返してやる。持つべきものはやはり友達だな、と素直に思える瞬間だ。

「そうだぞ、夏美！　ってか、逆にうらやますいー。みうさん、俺のお姉様になってくんねーかなあ」

こいつのせいで、すべてぶち壊したが。

「ちょっと、キー君」

夏美がしかめっ面をして、重雄を睨む。だが、それぐらいではこいつは止まらない。

「いいよなー、みうさん。（推定）バスト85、（推定）ウエスト65、（推定）ヒップ80のムッチムチのナイスバディー。さらには、その豊満な体を持ちつつも、男勝りなあの性格。ボーイッシュなあのナチュラルショートおとしこおんなの髪型もたまんねー。あれこそ、世の男の理想の男女像だっ！」

わけの分からん理想像を握りこぶしで語る重雄。若干数名の男子からなんか「おおー」という歓声が沸きあがった。そいつらも、バカだ。

「そんなみうさんにお前は毎朝、起こしてもらっているんだぞ！おまけに、あのナイスバディーと毎朝密着スキンシップをも……！くうう……！　なんて！　なんてうらやまし——」

ウザさが臨界点を超えたので、膝を顔面にぶち込み重雄を黙らせる。なんかうらやましそうに俺を見ていた男子数名も、俺が席を立って見せると、そそくさと教室の隅に逃げていった。

「まったく。そんなに欲しけりや、今すぐくれてやるよ」

そのほうが願ったり叶ったりだったの。

「もう。キー君のバカ……」

そうこうしているうちに、朝のチャイムが教室内に鳴り響いた。

四話「転入生」

「それでは、これから転入生を紹介します」

教室に入ってくるなり、表情を変えず爆弾発言をかます担任教師のせいで、教室の中は一瞬にして白けたというか、なんというか微妙な空気に支配されてしまった。

いや、いや、いや、転入生って。入学してまだ四日目のこの時期に転入生って。つか、そういうのはクラスの誰かが真っ先に聞きつけてきて、まずは生徒たちでバカ騒ぎ。その後、期待と不安に胸をドキドキさせながら「待ってましたー！」ってテンションで迎え入れるもんだだろうが。

と言いたげに、クラスメイトの大半が分かりやすい顔をして白けていた。まあ、俺もそうだが。

しかし、自己紹介の場で己の名前と年しか明かさなかった、見るからにやる気のカケラも見当たらないこの担任教師にとっては、そんなことはどうでもいいらしい。

ちなみに、この担任教師の名前は山田太郎（30）だ。もちろん、重雄が真っ先にその名前についてツツコミを入れたが、あえなくスルーされて自己紹介タイム終了。たった30秒で自己の紹介を終えるって、あんたの歩んできた30年は一体どうなってんだ、と誰もが心の中でツツコンだことは言うまでもない。

そんな調子だから、外見的特徴も特にはない。あえて言うなら、銀縁眼鏡かけて、細身で、常にスーツを着ている、ぐらいだろうか。

まあ、あまりフレンドリーな教師というのもうっとうしいが、これかどうかと俺は思う。

「あ、あの、先生。転入生ってどういうことですか？」

白けた空気の中、夏美が席を立ち質問を投げかける。言い忘れたが、入学三日目、つまり昨日、このクラスの女子の学級委員は夏美に決まった。責任感があり、真面目そうということで選出されたのだ。

しかし、学級委員として初の仕事がクラスメイトの心の声の代弁とは、このクラスの先が思いやられ、俺は夏美に同情した。男子の学級委員（名前なんてったか忘れた）にいたっては、知らん顔して読書なんかしてやがるしな。

「――知りません」

そして、夏美の質問に、答えになっていない答えを返す山田。いや、知らないってお前、教師ならなんか聞いてんだろ。説明するのが面倒くさいってその無気力な顔にあからさまに書いてあるぞ。

「はい、センサー！ 転入生は男の子ですか、女の子ですか！」

白けた空気に吞まれていた重雄が、復活し、俺の後ろの席でやかましい声を上げて立ち上がる。しかし、山田の口から返ってきた答えは――。

「知りません」

重雄、あえなく撃沈。

完璧、興味ナッシン。というか、余計な質問してくんなってか。つーか、お前なんで教壇の前に立ってんだ？

「なんでええー！」

重雄の抗議の雄たけびも完全無視。山田はおもむろに教室の入り口に向かい、ドアに手をかけた。そんな山田に、夏美が小さくため息をついて席に着くのを横目で見てから、俺は教室の入り口に視線を向けた。

とりあえず、こんな形ではあっても、クラスメイト全員が緊張しているのが伝わってくる。ちゃっかり、男子学級委員も本を読む振りしながら、教室の入り口のほうをうかがっている。

「どうぞ。入ってきてください」

そう言って山田が教室のドアを開ける。そして、転入生がおずおずと教室の中に入り、教壇の前に立った。

「う、うおおおおおー！ ビンゴォー！」

重雄がわけの分からん雄たけびを上げる。それに乗じて数人の男子が「おおおー！」と大げさな声を上げ、男子学級委員は持っていた本をポトリと落とした。

「転入生の……」

そこまで言って、黙り込む山田。いや、お前これから自分が受け

持つクラスの生徒の名前ぐらい頭に入れとけ。

しかし、そんな山田を見て、転入生は慌てて俺たちに向けぺこりと頭を下げた。

「井上です。よ、よろしくお願いします」

上気した顔を上げ、少し不安そうに教室内を見渡す転入生。その様子に、重雄だけでなく、数人の男子が更にテンションをあげてわけの分からない奇声を発している。そこまでバカだったんだな、お前ら。

「先生、先生ー！ 井上さんに質問してもいいですかー！」

「時間ないから駄目です」

重雄のハイテンション声を、一刀両断した後、山田はなぜか俺に視線を向けてきた。

「えっと、綾瀬君」

「え？」

突然の指名に、クラス中の視線が俺に向けられる。いや、なんだ一体。

「彼女の分の机がないので、体育館裏の倉庫まで行って、彼女の机を取ってきてください」

「いや、何で俺が――」

「彼女は女子の出席番号1番で、君は男子の出席番号1番だからです」

なんだそりゃ！ と突っかかってみたところで、この無気力教師にはなにを言っても無駄だ。そう諦めて無言で立ち上がると、背後で重雄が威勢良く声を上げた。

「先生！ その役――」

「駄目です」

「なんでええー！」

「……」

そして、恨めしそうに俺を睨んでくる重雄。

「おのれ、一輝……！」

「いや、俺のせいじゃないから」

そう言うってから、ふと教室の中を見回すと、クラスの男子のほとんどが重雄同様、敵意を込めたまなざしを俺にぶつけていた。男子学級委員まで、なんか、齒軋りして俺を睨んでやがる。

ってか、このクラスの男子バカばっかじゃねえか……。

「じゃあ、もうすぐチャイムなりますから、綾瀬君以外は通常通り授業を受けてください」

そう言って、出欠簿をつけた後、山田は転入生を取り残し、さっさと一人教室を出て行った。

なんとも言えない重苦しい空気が教室の中に漂っていた。とりあえず、俺はその重圧に耐え切れず、転入生の横を素通りし、一人で教室から逃げ出した。

「あ、あの。綾瀬君——だよね」

早足で廊下を歩いていると、控えめな声が後ろから聞こえてきた。どうやら、後を追ってきたらしい。振り返ると、さっきの転入生が俺の後ろに立っていた。

「あれ……。別に俺一人でもよかったんだけど」

「そ、そういうわけには……。私の分だし」

そう言って、困ったように顔を伏せる転入生、もとい、井上。その仕草に俺は柄にもなくドキッとしながら、不覚にも少しの間転入生に見惚れてしまった。

アイドル顔負けの恐ろしく整った顔立ち。ぱっと見、人を遠ざけるような風格さえ漂ってくる凛々しさを兼ね備えながら、恥ずかしげに目を伏せているその様は、見た目と性格のギャップを感じさせ、可愛いという他ない。

どちらかといえば、可愛いというより美人というタイプの女の子なのだが、本人はどうやら自分のその性能をよく知らないらしい。これだけ美人であれば、どこかしら性格もひん曲がってしまいそうなものだが、今日の前で目を伏せている女の子は、とてもそうは見えなかった。

——って、なにを見惚れてんだ。これじゃ、重雄たちのこと強く言えねえじゃねえか。

「あの、綾瀬君。私もついていって、いいかな」

上目遣いにそんなことを言われると、まるで、おねだりをされて

いるようだ。この状況で、世の男が断れるわけがない。ってか、断る理由もないのだが。

「別に……かまわないけど」

「よかった」

ほっと息をついて表情を和げ、少し首を傾げる井上。肩まで伸びた艶やかなストレートのショートヘアが少し嬉しそうに揺れて、踊るように戻る。

その仕草にいちいち緊張しながら、俺は井上から顔を逸らし、先を歩いた。

くそ。これじゃ、俺が女に免疫ないのがバレバレだな。ってか、先にカミングアウトしておくが、俺は過去女と付き合ったことは一度もない。もちろん、現在進行形だ。

個人的な理由から、今後も女と付き合う気はない。まあ、俺みたいな奴と付き合いたいという女がもしいるなら、その顔を拝んでみたいものだ。

「……」

「……」

それにしても、さつきから無言で黙々と歩く俺たち。始業のチャイムはとくに鳴った後なので、廊下は物音ひとつしない静寂に包まれている。このままでは気まずいことこの上なかったが、井上は俺の後ろについて歩いてきているので、話そうにも、何か話しかけ

づらい距離感だ。

しかし、このまま何も言わずにいるのは、さすがに無愛想すぎるかと思い、仕方なしに思いきって声をかける。

「あ、あのさ……」

「え……」

明らかに俺の声に戸惑いのリアクションを取る井上。出だしから話しかける気概を挫かれながらも、俺は何とか言葉を発した。

「なんていうか、この時期に転入って言うのも珍しいよな」

「う、うん……」

そして、またもや沈黙に陥る俺と井上。どうやら、質問の内容がまずかったらしい。よくよく考えてみれば、珍しいという時点でワケありなのは言うまでもなく、初対面の人間にそんなことを聞くのは、あまりにも無粋だった。といっても、それ以外に話題が思い浮かばないのだから仕方ないではないか。

「そ、そうだ、えっと――」

そうだ、とか口に出して言ってるし（一人ツツコミ）。

「――自己紹介の時、名前、苗字しか言ってなかっただろ。下の名前はなんていうんだ？」

「あ……緊張してて、つい言いそびれちゃった」

そう言って、井上は、しまった、というようなにはっとした顔を俺に向けた。目が合って、慌てて前に向き直る俺。そして、後ろから控えめに井上が自分の名前を口にした。

「私、綾だよ。井上……綾」

井上の言葉に思わず足が止まっていた。

一瞬だ。それは一瞬だけ心を鷲掴み、俺の息を詰まらせる。

遠い記憶。まだ、鮮明にそこに息づいている幼い少女。そして、途方もない罪悪感。

すべてが絡み合い、溶け合って俺の中に染み渡る。

ただの偶然に過ぎない。そんなことは分かっている。それなのに、たったこれだけのことで、自分が揺らいでしまう事実。こんなにも、俺は弱い人間だ。

「あの……どうかした？ 綾瀬君……」

不意に立ち止まり、動かない俺を、後ろから井上が心配そうな顔をして覗き込んでいた。我に返った俺は、慌てて笑顔を繕い井上に声を返す。

「わ、悪い。別に、なんでもないから……」

「でも——」

「……ただ、知り合いに同姓同名の奴がいたから、少しびっくりしただけだよ」

そう言って、俺は足早に廊下を歩いた。そのことに触れられたくないことを察してくれたのか、井上は何も追及してこずに、黙って後についてきてくれた。

——井上綾……。

世の中には、こういう偶然もおそらくあるものなのだろう。それでも、偶然では済ませられないことも、世の中には確かにある。

「……」

今は、とてもおしゃべりをする気にはなれなかった。

五話「夢×現実」

なんていうか——困った。うん。この状況はかなり困ったな。うん……。

山田の言いつけどおり、井上の机を体育館裏の倉庫に取りに来た俺と井上。だが、たどり着いたそこにはすでに数名の先客がいたのだ。

学校の体育館裏。そこから連想されるのは、呼び出し、告白——等、とにかく、密会が主なテーマなわけだが、その中でも究極の選択肢が今、体育館裏の倉庫の前で展開されていた。

倉庫の前で、うん○座りをしつつ円陣を組んでいる数名の人間。遠目からでも見える、モクモクと立ち昇っている煙は、言うまでもなく煙草をふかしているのだろう。うちの高校の制服はブレザーであるはずなのに、暑苦しい学ランをわざわざ着込んでいるのは、ポリシーというものだろうか。

とにかく、まあ。授業サボった不良共が、体育館裏の倉庫の前を陣取っているのだ。

ゆえに、俺と井上は体育館の影に隠れ、かれこれ五分ほど立ち往生しているというわけだ。

それにしても、困った。一体、どうすりゃいいんだよ、これ……。

「ど、どうしよう、綾瀬君……」

「……」

どうしようと言われても、どうしようもない。というか、不良共を駆除できるほどの甲斐性を俺に求められても困る。まあ、井上はそんなつもりで言っているのではないだろうが……。

しかし、一応俺も男だ。当然、女の子の前では格好をつけたいと思う。井上ほどの美人の前では尚更だ。が、それも時と場合による。格好をつけて自分の力量以上のことをやってみたところで、格好がつかないことになることは目に見えている。

「大丈夫！　俺が必ずお前の机取ってきてやるよ！」なんて言っているほどの正義感も、持ち合わせちゃいないしな。

それにしても、このままここでいつまでも立ち往生しているのも、非常にまずい。机一つ取ってくるのに、何十分もかかっているのは、あらぬ噂が立ってしまうのは目に見えている。そんなことになれば、俺はともかく井上がかわいそうだ。

「……井上。悪いけどちょっとここで待ってて」

俺の言葉に、井上が心配そうな顔をして俺を見つめる。かすかに涙のたまったその瞳は、繊細でいて、優しい。心細そうなその表情も加われば、男の心を鷲掴みにしてしまうこと受け合いだ。

って、なに言ってんだ俺。どうやら、これから不良の巢に飛び込むということだ、少々テンパっているようだ。そういうことにしといてくれ。

「わ、私も――」

「いや、俺一人でいいよ。井上と一緒にだと意味なくからまれそうだからさ」

「で、でも……」

「ま、なんとかなるだろ。とりあえず、逃げる準備だけはしといてくれ」

その強がりだが、俺に出来る精一杯のかっこつけた。そして、心配そうに俺を見送る井上を残し、俺は体育館の影から出た。

円陣を組んで座り込んだ不良たちは、おしゃべりに夢中でまだこちらに気づいていない。というか、案外あっさりスルーしてくれるのではないか。なんて甘い考えは、倉庫の前にたどり着いた時点で吹き飛ばされることとなった。

もしかしたら、自然かなーと思いつつ、不良たちの横を通り過ぎる際「ういっす」と頭を下げ、倉庫の前に立つ俺。しかし、倉庫の戸に手をかけた瞬間だった。

「おい、こら」

背後から、ドスの利いた、それはそれはたちの悪そうな醜悪な声が、俺の耳元に降りかかってきた。振り返らずとも、背後に不良たちが立ちはだかっているであろうことは、物騒な気配から容易に想像できた。振り返りたくはなかったが、無視する度胸もなかったのだ、なるべくゆっくり、そろっと振り返る。

予想通り、不良たちは雁首揃えて、息が吹きかかるほど間近な距

離で俺を取り囲んでいた。その数四人。しかし、その中に約一名、明らかにおかしい人間が混ざっていた。

「おうおう。てめえ、なんなんだよ」

「こら。ここは俺らの縄張りなんだよ」

「そうだよ、こら」

「ヘイ。フーアーユー」

一体、どうリアクションすればいいのだろう。あからさまに「喧嘩上等」を顔で訴えてくる、面々。その醜惡な面構えも、暑苦しい格好も、右から三番目までは至極まっとうな不良そのものなのだが。

「おい。なんなんだって聞いてんだよ！」

「何とか言えよ、おい！」

「そうだよ、こら。ぶっ殺されてえか！」

「ヘイヘイヘイ！ フー・アー・ユー！？」

——なんで、外人のツツパリがここにいるんだよ……。

心の中でツツコミを入れつつ、四人の中で明らかに異質な空気を撒き散らしているそいつに目を留める。

日本人とは明らかに異なる青く煌く双眼。高くそり立つ鼻が特徴的な、外人特有の顔つき。しかし、それよりもなによりも、一番の

インパクトは、頭の上で金色に輝いている丁髷だ。ちょんまげ

髷を結った外人が、学ラン着込んで俺にメンチをきっている。こいつは、一体なにを履き違えているのだろうか。これはこれで、相手を威圧するには十分だが、確実に何かを間違えている。

とにかく、このまま黙っていると殴りかかれそうだったので、俺は勇気を出して声を返すことにした。

「マ……マイネーム、イズ、カズキ・アヤセ」

「てめえ、なめてんのか、こらあ！」

気を遣って英語で名乗ると、不良たちは怒り出した。なんか、外人まで「ファック、ユー！」とか言って、怒り出した。

「い、いや、すいません。勘弁してください」

「ああ!？」

「その、机取りに來ただけなんです。すぐ消えますから」

「なんで、授業中にんなもん取りにきてんだ、てめえは！」

いや、お前ら人のこと言えないだろ。とは思いつながらももちろん口には出さない。

「実は、今日急遽転入生がウチのクラスに入ってきました」

「転入生だあ？　嘘つけ！　つーか、なんでてめえが転入生の机取

りにきてんだよ！ てめえのもんは、てめえで取りに来るのが筋つてもんじゃねえのか！ ああ！？」

「は、はあ……」

いや、お前らそういう台詞は自分を見つめ直してから吐け。

「とにかく、出直してこいや！ てめえのもんは、てめえで取りにこさせろってんだ！」

不良Aが叫ぶと、他三人も「そうだ、そうだ！ ブラボー！」と声をあげた。

さすが、不良。常識が通用しない上、わけの分からんことにこだわりを持っている。つか、何の罰ゲームだ、これ。

「んだあ？　なんか、文句でもあんのか？」

「……いえ、別に」

しょうがない。ここは大人らしく引き下がるしかないか。と諦めてこの場から退散しようとしたときだった。

「おい！　あそこに誰かいんぞ！」

体育館の方を指差しながら、唐突に不良Bが声を上げる。その声に不良たちも俺も体育館へ目を向けると、体育館の影からこちらを伺っていた井上が、慌てて体育館の影に引っ込む姿がばっちりとして取れた。

って、井上……。

「おい。もしかして今の、こいつの言ってた転入生じゃね？」

「つーか、なんであんなとこでこそこそしてんだよ」

「気に入らねえな。ちょっと、説教してやろうぜ」

「サンセーデース！ プリティーガール、デスネー！」

いや、お前この距離から、しかもほとんど一瞬でよく顔の良し悪しが分かったな。ってか、日本語できるのかよ。などと、心の中でツツコンでいると、不良たちがゆっくりと体育館のほうへ歩き出した。このままではまずい。そう思った俺は、仕方なく最後の手段に打って出ることにした。

「あああー！ あんなところに、ウルト○マンがいる！」

俺の叫び声と同時に、不良たちが揃って足を止め「なにい！」「ホワット！」と声を上げつつ振り返る――その隙に、俺は体育館目指して、全力でその場から駆け出した。

我ながら、こっ恥ずかしい浅い台詞ではあったが、振り返ってしまった不良たちは更にこっ恥ずかしいことだろう。案の定、すぐに騙されたことに気づいた不良たちは、雄たけびを上げながら、俺の後を追いかけてきた。

「あ、綾瀬く――」

「逃げるぞ、井上！」

体育館の影でオロオロとしている井上の手を取り、とにかく、この場から離脱する。背後から不良たちが追っては来るが、しばらく校内を走っていると、そのうち物騒な怒鳴り声も聞こえなくなってきた。毎日煙草吸ってるもんだから、急激な運動には体がついていかないらしい。今後も不良に絡まれるようなことがあれば、面倒くさいのでとにかく逃げることにするか。

「もう、大丈夫そうだな……」

体育館から、一番離れた校舎の裏まで来てから、さすがにもう大丈夫だろうと思いい足を止める。それにしても、朝からとんだ災難だったな。頭悪そうだったから大丈夫だろうが、もし顔を覚えられてたら、後が怖いな……。

「あの……綾瀬君……?」

近くから控えめな井上の声が聞こえ、俺はそちらに顔を向けた。なぜか顔を赤らめている井上が、俺と目を合わせて、さらに顔を赤くする。そして、井上は恐る恐るといった感じで、かすかに声を出した。

「手……離してくれないかな」

「え?」

ここで、ようやく俺は未だに井上の手をしっかりと握っていることに気がついた。それにしても今更「え?」なんて言うのはいかにも白々しいとは自分でも思うが、本当に言われるまで気がつかなかったのだからしょうがないではないか。

「わ、悪い……」

井上の手を離してやってから、すぐに謝る。井上は「ううん」とは言いながらも、俺に握られた手をグーにして、さらにその上に空いた手を添えて、胸に押し当てた。

恥ずかしそうに上気した顔は、やはり、たった今運動をこなしてきたせいばかりではなさそうだった。感情の高ぶりからか、かすかに涙のたまった瞳が行き場を失うように泳ぎながら、控えめに俺から逸れる。

かすかに乱れた息遣い。その度に上下する、控えめに膨らんだ井上の胸。見てはいけないとは思いながらも、今まで握っていた手がそこに置かれているので、意識せずにはいられない。同時に、忘れていた井上の手を握った感触がよみがえり、今更恥ずかしくなってくる。それなのに、井上から目が逸らせない。

驚くほど脆くて、驚くほど繊細な、儚さ。井上の仕草ひとつひとつから垣間見えるそれは、瞬きできないほど綺麗だった。

ばつが悪くなるよりもまず、井上に見惚れている自分が分からなかった。まるで、意識が二つに切り離されてしまってもいるような、妙な感覚。井上から目が離せない一方、俺は心のどこかで、そんな自分に疑問を投げかけている。

言葉が出てこない。長く続く沈黙の中、遠くから誰かの笑い声が流れてきた。そういえば、今はまだ授業中だった。

「……ねえ、綾瀬君」

やがて、井上は逸らしていた瞳をまっすぐ俺へ向けた。今にも泣き出しそうなその表情が、手を握ったことに対しての不快感であったならば、すぐにでも謝るべきだろう。でも、その表情のまま微笑まれては俺になす術はない。

「……ねえ、カズ君」

哀願するように、何かを求めるように、井上が俺を呼びかける。

体の中の血が脈打ち、静まりかけていた鼓動が、どくん、どくん、と音を鳴らす。初対面のはずだ。そんなはずはないのだ。あるわけがない。そう思っているのに、言い知れない予感と懐かしさは、俺の意思を屈服させて、溺れさせる。

一体、俺はなにを求めている……。

胸に置いた手をぎゅっと握り締めて、唇を噛む井上。ためらいながら、それでも井上は俺を見つめたまま、瞳を逸らさない。

「カズ君……」

かみ締めるように呟いた後、井上はそつと声を出した。

「——あなたは……そこにいますか？」

井上の口からもれ出てきた言葉が、俺の脳内で反響する。気が遠くなる。

俺の中で、何かが音を立てて崩れたような気がした。

六話「困惑」

結局、手ぶらで戻った俺と井上が教室に戻った頃には、一時間目の授業は終わっていた。教室に戻ると、待ってましたといわんばかりに重雄が俺の元に駆け寄ってきたが、奴が口を開く前に問答無用でボディブローをかまし、黙らせる。そして、重雄が悶絶している間に、俺は教室に入った。

俺の後から教室に入った井上は、足元で悶絶している重雄に「だ、大丈夫……？」などと優しく声をかけている。

そういえば、井上もまだこのやり取りが日常茶飯事であることを知らなかったのだ。だが、今の俺はそんなことに気を回している余裕はなかった。ちなみに、重雄はうめきながら俺に親指を立ててみせ、そんな重雄に井上は困り果てていた。

どうやら、一時間目担当の教師はすでに教室から出払った後らしかった。クラスメイトは一樣に、授業をサボって、手ぶらで帰ってきた俺たちに何らかの説明を求める視線を無言でよこしていた。が、俺はそんな視線を無視し、自分の席に向かった。

机のひっかけに掛けていた鞆を取り、教科書類を中に詰め込む。その間、シンと静まり返った教室の中に漂う険悪な空気が、ちりちりと焼け付くように俺の肌に突き刺さっていた。

荷物を詰め込め終わると、タイミングよく校内放送が鳴り響いた。山田の抑揚のない冷めた声が、俺に職員室に来るよう呼びかけていた。どうやら、授業に出ていなかったことが知れたらしい。それにしても、井上は呼ばずになぜ俺だけなのだ。責任はすべてお前にあ

るってか。あいつなら、あっさりそう言い切りそうだな、ちくしう。

とにかく、早く一人になりたかった。今は、何もかもがどうでもいい気分だ。頭を冷やさないとイケない。

いつの間にか悶絶していた重雄が、復活して井上を口説いていた。どうやら、井上には重雄菌（フェロモンとでも思ってくれ）が通じないらしい。困ったような顔をして俺のほうをチラチラと伺っていたので、教室を出るついでに重雄のわき腹にひじ打ちをかまし、大人しくさせておいた。後はまあ、夏美がなんとかしてくれるだろう。

しかし、教室を出てすぐに、やはり夏美が俺の後を追ってきた。背後から名前を呼ばれ、俺は仕方なく振り返った。

「どうしたの、一輝。ねえ。なにがあったの」

心配そうな顔をしてきている夏美を見て、こんなときに不謹慎だとは思いながらも笑みがこぼれる。そんな俺を見て、夏美は心配そうに細めていた目を少し丸くして、もう一度俺の名前を呟いた。

「俺今日はもう帰るから。なんか、井上に全部押し付けるみたいで悪いけど、フォローしといてくれな、学級委員」

「ちょ……待って。なにがあったのよ。変だよ、一輝」

「別に。ただ体育館倉庫に行ってみたはいいが、そこには不良が四人いて、しかも、その中の一人はちょんまげの外人で、なんだかなだ因縁をつけられ、最終的には結局そいつらと鬼ごっこするハメになって、机はとってこれなかったってだけだ。なんでもない」

「は、はあ……。それは……。大変だったね」

目を点にしてそう声を出す夏美を見て、俺は苦笑した。

「なあ、夏美」

「な、なに？」

「うん。井上な。綾っていうんだってさ」

「——え？」

「井上綾。——だってさ」

俺の言葉に、夏美は顔をこわばらせて俺を見つめた。少しの間無言で見つめあった後、夏美の表情が悲しそうに曇り、また俺の名前を呟く。なんだか、悪いことをしてしまったような気がして、俺は夏美に背を向けた。

「……悪い。あと、頼むな」

それ以上、夏美が俺を引き止めることはなかった。

家に帰ると、家には誰もいなかった。それもまあ、当然だ。今頃、姉貴とアスカは学校に行っているのだから。それにしても、ダイニングのテーブルの上に置かれた一枚の張り紙が、帰るなり俺を途端に現実に取り戻してくれた。

その張り紙にはでかでかとう書かれていた。

「帰ったら、コ・ロ・ス！ byお姉さま」

そういえば、今朝奴らに特性料理を仕込んでやったんだった。どうやら、そうとは知らずに口にしたらしい。相手に気づかれないとは、我ながら素晴らしい料理の腕だ――なんて、自画自賛してる場合じゃないな。今冷静に考えてみると、なんて無謀なことしてんだ、俺は。過去数度同じことをして、えらい目に遭わされた記憶が脳裏をよぎり、今頃背筋に冷たいものを感じてしまった。

それにしても、でかでかと書きなぐられた文字の端っこに、控えめにちよこんと書かれた文字。

「一輝 死ね」

これは、アスカだな。なんか、殺すって脅されるより死ねって罵られるほうが重い気がする。そんな人間の心理を読んでいたとしたら、本当に恐ろしいのはこいつのほうだ。しかし、まだ小4のお子様がまさか……うん。まさかな。しかし、釈然としないこの悪寒はなんだ……。

まあ、とりあえず今はそんなことはどうでもいい。——って、自分の命がかかっていることまで、どうでもいいと感じてしまうとは、かなりの重症だな。これだけ、ひどいのは、あの時以来か……。

途方もない虚脱感を持て余しながら、俺はダイニングを出た。洗面所に入り、そこで身に着けたものをすべて脱ぎ去り、バスルームに入りシャワーを浴びる。

壁に両手を着き、真上から降り注いでくるシャワーの冷水を頭からかぶる。そうすれば少しは気が楽になるような気がしていたのに、俺の身の内にまとわりついた悪夢が、この冷水に流されるようなこととはなかった。

やがて、バスルームにこもるシャワーの単一的な音が、だんだんと不快なものへと変わっていく。耳のやたら近くから入り込んでくるそれは、俺の記憶に触れ、悪夢をまた蘇えらせる。いや、そうしているのは他ならぬ自分自身であることは承知している。

シャワーの水を止め、壁に寄りかかる。タイルの硬く冷たい感触がヒタリと俺の背中に触れた。悪夢を振り払おうとすればするほど、浮かんでくるのは、あの時見た井上の泣きそうな表情だった。

——あなたは、そこにいますか？

俺の中でまだ息づいている悪夢の破片が、顔を出す。まとまらない思考が、ぐちゃぐちゃに混乱した意識が、混ざり合って俺を狂わせる。

オレハイッタイ、ナニヲノゾンデル……。

あの日以来見なくなった夢。今朝見た夢。あいつの声。井上綾……。

混濁した意識の中で、手を伸ばしている俺がいる。必死に伸ばしても、俺の手がそこに届くことはない。もうそれは、ずっと前になくなってしまったものだ。

そう。あいつはもう、死んでしまったのだから――。

あいつが、ここにいるはずはなかった。

七話「来訪」

あ……せく……。あや……くん……。あや……せ……くん……。

あやせくん……。

「――綾瀬君」

「……ん？」

気がつくと、ベッドの上で眠っていた。どうやら、部屋まで来て眠り込んでいたらしい。バスルームでシャワーを浴びたまでの記憶はあるのだが、その後の記憶は抜け落ちている。一体、俺はどうやって自分の部屋まで来たのだろうか。

それにしても、どれぐらい眠り込んでいたのだろう。頭が重い。ボーとする。まるで、意識に霞がかかったようだ。このまま、もう一度眠ってしまおうか。

部屋の中は、窓から差し込んでくる夕日の色に照らされていた。まばゆいオレンジが部屋の一端を照らし、静けさが陰鬱な部屋に影を落とす。そういえば、誰かが俺を呼んでいたような気がしたのだが、気のせいだろうか。そう思ってふと、仰向けに寝ていた顔を横に動かした途端、信じられないものが俺の目に飛び込んできた。

夕日の光を後ろから浴び、浮かび上がる人型のシルエット。目を凝らすと徐々にその人物があらわになっていく。

透けるような白のブラウスとチェックのスカート。ブラウスに負

けない繊細さを帯びた真っ白な肌。細く、頼りなげな肢体。そして、不安げな表情を浮かべた、その見惚れてしまいそうな綺麗な顔立ち。間違いない。そこに立っているのは、井上だった。

「な……い、いの……」

まさか、これは夢なのだろうか。そう疑ってしまうほど、その光景は唐突で、夕日をバックに立つ井上は、神秘的だった。が、どうやらこれは夢ではなかったらしい。なぜなら、その直後に激烈な痛みが俺に降りかかってきたからだ。文字通りに。

「飛びつきエルボー落としい！」

突如として井上の背後から声が聞こえたかと思うと、人影がベッドの横に置かれた勉強机を踏み台に、俺目掛けてわざわざ技名を叫びつつ落下してきた。その間、実に2秒。避ける暇などあるはずがない。

「うげえ！」

高所から、体を起こしかけていた俺の脳天に容赦のないエルボーが落ちる。まるで雷に打たれたような（実際に打たれたことはもちろんないが）衝撃の後、体全体に痺れるような、例えるなら体全体を満遍なく針で突つつかれたような、想像するだけで気の滅入る痛みが広がった。

あまりの痛みに、俺はベッドの上で四つんばいになり「ぐおおお……！」と情けないうめき声を漏らしつつ、頭を抱えた。井上の前でそんな無様な姿を晒さらしたくはなかったが、その痛みは羞恥心など軽く跳ね除けるほど、凄絶なものだったのだ。まさに、殺人的。

そして、こんなとんでもない技を平然と仕掛けてくるバカは、あいつしかない。

「ほーほっほ。どうかしら、一輝君？ 名づけてドッキリ大作戦！ 偶然尋ねてきたクラスメイトに起こしに行かせて、ドッキリしている最中にいきなり現実に叩き落してあ・げ・る（ハート）。スペシャルのお味は？」

案の定、姉貴が高笑いしながらわけ分からんこと言っている声が聞こえてきた。ちなみに、今の俺に顔を上げる余裕はない。痛みが臨界点を超え、逆に気持ちよくなってきているのだ。やばい。この心地よさに飲み込まれれば、途端に失神してしまう。それにしても、夢じゃないなら、なぜ井上がここにいるんだ。

「あら、あら。新感覚な痛みで、そのままイッちゃいそう？」

色っぽい声色を使い、俺の耳元で囁く姉貴。だが、次の台詞を吐き出す声は、感情を消した、恐ろしく冷徹なものだった。

「これに懲りたら、もう、あんななめた真似二度とするんじゃないわよ？ 言っとくけど、次は容赦しないからね？」

これで、手加減してるつもりかよ。

心の中でそうツツコミみつつ、意識が遠のいていく。

「あ、あの、綾瀬君大丈夫なんですか……？」

井上の動揺した声が、最後に聞こえたような気がした。

つまり、こういうことだ。今朝のことが気にかかり、学校帰りにわざわざ俺の家まで井上が訪問してきた。その後、姉貴が帰還し、井上と接触。部屋で俺が寝ていることを知った姉貴は、井上が俺のクラスメイトであることを知り、俺への制裁に利用した。

本人も言っていたが、いわゆるドッキリというやつだ。井上に眠っている俺を起こさせ、その間に姉貴は井上の背後に身を潜める。そして、目を覚ました俺が井上に気をとられているところへ、きつい一撃をかます。まさに手の込んだ、嫌がらせも嫌がらせのトンでもない悪質な手口だ。つか、普通に仕返しできないのか、お前は。

ちなみに、今俺はダイニングのテーブルの前に腰を下ろしていた。意識を回復し、階下に下りると、ダイニングのテーブルの前に座った姉貴が、話がある、と言い出したのだ。姉貴と向かい合って座っている井上は、そのとき、俺と目が合うと気まずそうに小さく頭を下げてから、すぐに俺から目を逸らした。

おそらく、俺のことを心配してくれて残ってくれていたのだろうが、正直そのほうが気まずかった。心配してくれるのはありがたいが、顔を合わせても、なにを話せばいいのか分からないのだ。つか、四つんばいになって、頭を抱え呻きつつそのまま気絶、なんて無様な姿晒してんだぞ。俺の心情汲んでくれよ、井上。どっちみち、明日学校で顔を合わせば同じことなのだが。

って感じで疲弊していると、姉貴の横にちよこんと座っているアスカと目が合った。俺と目が合うと表情を変えず、テーブルの上に置いていたノート（恐らく学校で使っているものだ）と黒のマジックペンを無造作に手に取り、なにやら文字を書き出した。

黙ってその様子を見守っていると、何か文字を書き終えたノートを俺に向けて見せるアスカ。

「死ね」

一言そう書きなぐられた文字を見て、俺のテンションは急降下した。表情には出さないが、まだ朝の出来事を相当根に持っているようだ。当分は口を利いてくれそうにないな、こりゃ……。

——と、まあ、脳に大ダメージを負ってはいるものの、そんなこんなで姉貴から事の経緯を聞き今に至る。しかし、説明を終え、最後に言い放った姉貴の言葉は、どうがんばってみても俺には理解不

能だった。

「じゃ、今日から綾ちゃん、家で一緒に住むことになったから、よろしくね。言っとくけど、いくら綾ちゃんがかわいいからって、襲っちゃ駄目よ（笑）？」

「ああ——……あ？」

一瞬、場の空気が凍りついた。様な気がした。

あまりにもぶっ飛んだ発言をさらっと言い放たれたものだから、思わずさらりと受け流してしまうところだった。俺は、固まってしまった表情そのままに「おい。今なんて言った？」と聞き返した。もちろん、この時点ですでに最悪のシナリオが俺の頭をよぎっている。

しかし、そんな俺をよそに、姉貴はダイニングから離れ、リビングのソファにふんぞり返り、テレビの電源をつけつつ、一言。

「そんなことより、お腹すいた」

いや、ふざけんな、こら。アホ、ボケ、カス、マヌケ、トンマ、アンポンタン、グズ、スカタン。などとは、思っけていてももちろん口には出さない。しかし、横に座る井上に直接事情を聞きだす勇気も出なかったので、俺は椅子から腰を上げ、姉貴に詰め寄った。

「お、おい。さっきの発言に対して、ちゃんと、順序を追って俺が納得いく説——」

「めんどい。それより、ご飯」

そして、あえなく却下された。

困り果てて、ダイニングの方へ目を向けると、アスカと目が合った。そして、アスカはノートにサラサラと文字を書き込むと、黙ってそれを俺に向ける。

「ヘッポコ」

「……」

それは、あれか。本人に直接説明を求めない俺を罵っているのか。そういうことか。しかし、アスカの無表情からその真意は読み取れない。

さらに、ページをめくりノートに文字を書き込むアスカ。

「スットコドッコイ」

「……」

「ヤブヘビ」

「……」

「オツカナビツクリ」

「……」

「ワイショウ」

「井上。ちょっと……」

無言のプレッシャーに敗れた俺は仕方なく、井上を呼び、リビングから抜け出した。リビングに続くドアを閉め、奴らの目の届かない玄関先まで井上を連れ出す。どうでもいいが、家は二階建ての結構大きな一軒家だ。両親も今は家を空けているので、一人ぐらい家に住み込めないことはないが――なに言ってんだ俺！？

一人ツツコミを心の中でかますほど動揺している俺の横で、井上が顔を伏せ俺が声をかけるのを待っている。あんまり距離が近かったので、俺は一步井上と距離をとってから、わざとらしく咳き込んでみせた。

「あの……どういふことか、説明してくれる？」

おずおずと顔を上げ、井上が声を出す。って、なんで、俺のほうが井上に対して罪悪感感じてんだよ。別に俺悪いことしてないよな？ うん。してない、してない。

「私……行くところがなくて……」

はい？

「いや、行くところがないって……どういふこと？」

「家には帰れないの……他に頼れる人も居なくて……」

「家には帰れないって、なんだよ、それ」

それぐらいの事情を知る権利はこっちにもあるだろう。が、井上は俺から目を逸らしてだんまりだ。ますます、わけが分からない。目の前に居るのが、図々しいとか、不良娘だとかなら、もう少し分かりやすいのだが、あいにく、井上はそんなタイプの人間にはとても見えない。申し訳なさそうに顔を伏せてるのがその証拠だ。が、そんな井上が非常識を承知で今この場に居るということは、それなりの事情があるのだろう。

いや、だからといって、はいそうですかと家に住まわす気はないが。

「綾瀬君のお姉さん……みうさんがね」

黙っていた井上が、ようやく口を開いた。

「事情を話したら、家に来てもいいって言うてくれたの。その代わり――」

「部屋で寝てる俺を起こしてくれって？」

すべてを察した俺が井上の代わりに声を出す。井上は、控えめにこくんと肯いた。

「あの野郎……」

正確には野郎ではないが、そんなことはどうでもいい。とにかく、困った。うん。さつきから、ダイニングに続くドアがうっすらと開かれ、その隙間から姉貴がこちらの様子をこっそり覗いてるしな。よく見ると、アスカまで覗いてやがる。お前ら、バカだろ？

「なあ、井上。今、うちの両親海外に飛んで、家にいないんだ。それで、家の実権はすべて姉貴が握ってて、逆らおうものなら、さっきみたいなひどい目に遭わされる。だから、俺は姉貴の決めたことに逆らうことはできないんだ。でも、ほんとならこんなこと言いたくないけど……いいか？」

「うん……」

「はっきり言って、迷惑だ」

俺の発言に、井上はビクッと肩を震わせてから、顔をうつむけた。今にも泣き出しそうなその表情で「うん……」と声を漏らす井上。その上「ごめんなさい」なんて謝られては、完璧俺悪者じゃねえか。

そんで――。

「なーにが迷惑じゃ、こらあ！」

その様子を盗み見ていた姉貴が、ダイニングから飛び出してきて、俺の即頭部にモロ、ドロップキックをぶち込んだ。

「ほげえ！」

あまりの衝撃に、俺は廊下にゾリゾリと頭をこすりつけながら、10メートルほど吹っ飛び、壁に激突した。ほんと、よく生きてられるな、俺。

「こんなかわいい娘捕まえて、なにほざいてんだ、コラア！ てめえ、一輝の分際で私の桃色ムフフ……生活邪魔しようってのか、ああ！？ もっかい、その脳天にきつい一発入れたらうか、おお！」

「？」

「……」

「ほんとにもー。ごめんね、綾ちゃん。こんな奴の言うことなんか気にしちゃ、だ・め・よ？」

可愛いこぶって無邪気（俺から見れば邪気だらけ）な笑顔を井上に向ける姉貴。

いや、いや……。井上見ろ、井上。ドン引きしてるじゃねえか。と思いつつ、ひっくり返った体勢を何とか立て直す俺。すると、姉貴は疾風のごとき素早さで俺の目の前まで来ると、しゃがみこんで俺を殺気立った目でギロリとにらみつけてきた。

その距離、ほぼゼロ距離射程。めっちゃくちゃ、怖え。実の姉なのに……。

「同居。認めるね？」

「は、い……」

ごくりとつばを飲み込み、うなづく俺。完璧、脅しじゃねえかこれ……。

「いよーし！ そうと決まれば、今日はパーティーよ、パーティー！ パーと寿司でも出前取るわよー！」

そう言って威勢良く立ち上がり、井上に駆け寄る姉貴。の背中に、俺は声をかけた。

「ちょ、ちょっと、待て。んなことしたら、今月の家計がえらいことになり――」

「あ？」

「いえ、別に……」

黙りこみその場で大きくため息をつく俺。井上は俺のほうへ駆け寄ろうとしていたが、姉貴に捕まり、あえなくリビングへと連れて行かれた。そこで、残るアスカは半分ほど開いた扉の間に立ち、俺と目が合うと、ノートにサラサラと文字を書き始めた。

「フンダリケツタリ」

「……うるせえよ」

八話「ためらい」

「つてわけで、一輝君ビール買ってきて〜（ハート）」

などと可愛い子ぶりながら、その実目が笑っていない姉貴の命により、外に締め出されることとなった俺。「飲酒、喫煙は二十歳になってから」なんて良識を奴に訴えたところで、猟奇的なプロレス技で返答されるのがオチなので、反論などできるはずもない。そんなことをすることを思えば、未成年でタバコ吸ってる不良の群れに「おい、君達い！」と突っ込んでいくほうがよほど気が楽だ。間違ってもそんなことはしないが。

それにしても、今時未成年に堂々とビールを売ってくれるスーパーやコンビニなどあるはずがない。堂々と中に入ってビールをレジに持っていく度胸も持ち合わせてはいないし、そうになると、残された道は自販機だけだ。最近は二十歳以上の人間にしか買えない自販機というものが流通しているらしいが、あいにくうちの近所にそんな気の利いた自販機は置かれてはいなかった。

というわけで、てきとうな自販機で缶ビールを十本ほど購入し、あらかじめ持ってきたスーパーの袋に詰め込んでから、家路を辿る。

「ず、ずいぶんたくさん買ったね」

俺と肩を並べて歩いている井上が、驚きと戸惑いの入り混じった顔を俺に向け声をかけてきた。ちなみに、俺が家から締め出される際、姉貴の制止をやりわりと振り切り、井上もついてきてくれていた。俺に気を遣っているというのもあるのだろうが、やはり、見知らぬ家に事情も告げず居候させてもらうとあって、居心地も悪いの

だろう。あの無神経女はそんなことには少しも気づいてはいないようだが。

「ああ。あいつの酒の強さは尋常じゃないからな。家にまだストックあるし、これで何とか足りるだろう」

井上の言葉に返事を返す。俺の言葉に井上は伺うように声を出した。

「えっと……綾瀬君のお姉さんって、まだ高校生だよな？」

「その辺の良識を持てれば、俺も苦勞しないんだけどな」

俺の言葉に、井上は返答に困って閉口した。まあ、無理もない。

家を出る頃にはすでに8時を回っていたので、外はもうすっかり暗くなっていた。月と星がまるで挿絵のように張り付いた夜空をバックに、俺たちは人通りの少ない夜道を歩く。井上が閉口してから、まるで言葉を失ったように、俺たちは黙々と歩いた。暗闇の中でぽつぽつと明かりを灯す家々が、無言で俺たちの行く道を仄かに照らす。

話題がないわけではなかったが、それを切り出す術が分からなかったので、口を開くことができなかった。きっと、井上もそうなのだろう。うつむき加減に歩く井上の横顔は、どこか寂しそうに見えた。

やがて、行く道の途中に小さな公園を見つけて、俺たちはそこに立ち寄った。このまま、まっすぐ家に帰ってはおそらく、パーティーだなんだと、落ち着いて話もできないだろう。姉貴に酒が入った

ときのタチの悪さは、そこら辺の不良100人が束になっても敵わないことを、俺は身に染みて知っている。そこにつまみ（可愛い女の子）が加われれば、もはや手のつけようがない。って、これだけ言っていると、まるで酔っ払いのオヤジみたいだな。一応、あいつは女だが、しかし、女としては壊れているのだ。色んな意味で。

まあ、今は姉貴のことなどどうでもいい。ここで胸のうちに張り付いたモヤモヤを何とかしなければ、今夜は寝つきが悪そうだ。パーティーと聞いた時点で、まともに眠れるとは思ってはいないが。

民家に挟まれるカタチで作られた公園は、ずいぶん小さかった。誰もがそこにあることに気づかずに通り過ぎてしまいくらいな存在感のなさは、立地条件の悪さだけではないようだ。そこに備え付けられた遊具は小さなブランコが並んで二つと、後は廃れたベンチだけ。まともに遊ぶような広さもない時点で、辿る運命は決まっている。

人間で言えば、一人さびしく老後を迎えたおじいちゃん（もしくは、おばあちゃん）の中に入った俺たちは（比喻が悪かったな……）、まっすぐベンチに向かい、微妙に距離を置いてそこに腰を下ろした。

ずいぶん長く使われていなかったのだろう。俺たちが腰を下ろすと、ベンチはまるで悲鳴を上げるように、ギチ！ と音を鳴らした。「ギャー！」という悲鳴が聞こえたような気がしたのは、気のせい
か。

「……」

「……」

やはりというか、なんというか、ここまで来ても沈黙を保つ俺と井上。しかし、いつまでも、胸のうちに溜まったものを留めておけるはずもない。そして、声を出そうとすると、意外にも井上の声が先に俺の耳に入ってきた。

「ごめんね、綾瀬君」

「え……」

井上の声に、戸惑いながらその横顔に目を留める。公園内を照らす、心許ない電灯の光が、井上の困ったような表情を照らしていた。

「こんなつもりで、綾瀬君の家まで来たんじゃないかったの。ただ、今朝のことが気になって……。なのに、いつの間にか、お姉さんと話してるうちに話がどんどん逸れていっちゃって」

それで、こんなことになってしまったということか。なるほど。確かに、姉貴が強引に同居を進め、その勢いに断りきれず頷いてしまふ井上の凶は、容易に想像できる。って、やっぱ、元凶はすべてあいつか……。

「悪い……」

事情を知って、俺はそう呟いた。

「え？」と声を漏らして井上が俺に顔を向ける。

「姉貴の代わりに謝っとく」

「綾瀬君が謝ることじゃないと思う」

そう言って、おかしそうに口元に笑みを浮かべる井上。その穏やかな微笑みに、俺もつられて笑っていた。

少しの間見つめあってから、井上がもう一度曖昧に微笑んで俺から目を逸らす。その横顔は、まるで、これから俺が発する言葉を予期しているかのように、涼しげでどこか悲しそうだった。井上の向ける視線の先で、二つのブランコが所在なげに佇んでいる。少しの間俺もそこに目を留めてから、俺はもう一度井上に視線を移した。

「今朝の、ことだけどさ」

俺の言葉を聞いても、井上の表情は動かなかった。

「井上、俺に言ったよな……」

胸が締め付けられるように痛んだ。何かが動き出す予感と不安が、俺の中で膨らんでいく。それは、俺の中に今も息づいている懐かしさに触れ、手がつけられないほど膨らみ続ける。

抑えることは、できなかった。

「――あなたは、そこにいますかって。井上、俺に言っただろ。あれ……ってさ――」

あの時は、動揺と困惑から、何も聞くことができなかった。

井上も自分からなにも話そうとはしてくれなかった。

でも――。

井上は、鍵を持っているはずだった。俺にはどうしても開けることのできない扉を、開けるための鍵を。そして、今朝のことに答えをつけるために、井上はここにいる。

乾いた風が、公園の中に流れた。それは、静寂の中を静かに通り過ぎ、井上の柔らかな髪を揺らした。そして、まるでそれが合図だったように、井上がベンチから腰を上げた。

ゆっくりと歩を進め、ブランコを支える鉄柱に手を当てて立ち止まる井上。俺は、その華奢な後姿にじっと目を留めた。

「もう少しだけ」

井上の声が、流れた。

「もう少しだけ、待って欲しいの」

スカートの裾をぎゅっと握り締めながら、井上は呟いた。その言葉は、誰かのために投げかけたものではなくて、自分に言い聞かせるためのもののような気がした。

そのためらいは、言葉にしなくても俺に伝わってきた。鍵を持ちながら、目の前の扉を開けることへのためらい。井上をためらわせるものの正体がなんなのかは分からなくても、今、井上が、どんな顔をしてそこに立っているのかだけは分かった。

触れてはいけないことのような気がした。暗闇の中、わずかな明かりだけに照らされた井上の姿が、まるで、幻のように頼りなく映る。触れてしまうと、途端に消えてしまう幻影のような儚さは、俺

の胸のうちの焦燥を、ゆっくりと鎮めていく。

「井上」

ベンチから腰を上げ、井上の背後に立つ。俺の声に振り返った井上は、想像通りの表情を携え、俺を見つめる。今の俺に、その目を見つめ返すことはできなかった。

「そろそろ、帰ろう。あんまり遅くなると、俺がひどい目に遭うから」

「……うん」

この予感と疑問に答えが返るには、まだ時間がかかりそうだった。きっと、そうしようと思えば、答えは出せるはずなのに、俺たちはそうしようとはしない。でも、いつまでもそうしていられないことも分かっている。

ただ、俺たちはためらっていた。

正体の分からない、それでいて、輪郭だけは浮かんでいる、つかみ所のないモノ。井上も、そんな何かにためらっている。

そんな気がした。

それから、一言も言葉を交わすことなく俺たちは家路を辿った。静かな夜だった。そして、家に着くと――。

「ビール買ってくるのに、何十分かかってんだ、こらあ！」

出迎えの飛びつきリアートが俺の喉に食い込むと同時に、静かな夜はぶち壊された。

九話「てんやわんや」

ゆさゆさと、控えめに体が揺さぶられる感覚で目が覚めた。珍しく、戦友（目覚まし時計）の手荒な歓迎でもなく、姉貴のプロレス技でもなく、それにしても、自然な覚醒ではない。

なおも、それはゆさゆさと俺の体を揺さぶり、俺を静かに覚醒へと導く。

意識だけが覚醒し、夢心地にふわふわと宙に浮いているような感覚。これは、夢だろうか？ 否。そういえば、夢を見ない体質だったことを思い出し、否定する。それにしても、世の高校生はみんなこんな平穏な目覚めを当たり前としているのだろうか、と、まどろみながらも軽く行き場のない怒りを器用に感じつつ、ゆっくりとまぶたを開ける。

ゆさゆさと俺の体を揺さぶっていた正体があらわになる。

制服に身を包み、その上からなぜかエプロンなどをつけている井上が、少しかがみこみながら、俺の肩をゆさゆさと揺らしているのだ。

「……」

その瞬間、思考が停止した。おそらく、呼吸さえ止まっていただろう。そして、巨大な疑問符が俺の脳天に落下直撃し、軽い眩暈に襲われた。

——えーと……なんだ、これ？

鈍い思考の中で、疑問符が文字に変わる。

制服の上にエプロンを身につけ、しかも、あつらえたようにその格好が似合う美少女（井上）が、俺を優しく起こしている。微妙に前かがみの状態から伸ばした両手の間から、形のいい、程よく膨らんだ胸が俺の顔の近くに迫っていた。少し視線を上げるだけで、キレイな顔がアップで俺の視界に映る。チュンチュン、と爽やかな朝の効果音までさりげなく耳の中に入り込んでくる。困った。俺は一体、なんてベタベタなシチュエーションの美少女ゲームの中に迷い込んでるんだ……。

俺と目が合うと「おはよう」と笑いかけてくる井上。とりあえず、最近のゲームはなんてリアルなんだ、と本気で驚きながら俺は「お、おはよ……」と声を返してみた。

朝の光を浴びた井上が、俺に微笑かけてから離れていく。近代ゲームのあまりのリアルさに言葉を失い驚愕した後、一分で思考回路を修復した俺は、自分の馬鹿さ加減に一人顔を赤くした。

自分がリビングの絨毯じゅうたんの上で眠っていた理由を、昨夜の記憶を辿り解決させる。頭が異常に重く、ガンガン痛む。これが二日酔いというものか。道理で、現実とゲームの見境がつかなくなるはずだ。

……と、言い訳ぐらいさせてくれ。

それにしても、昨夜はひどい目に遭った。どんな目に遭ったのかは、思い出すだけ気が滅入るので、勝手に想像してくれ。ちなみに、自分の部屋ではなくリビングで眠っている時点で、睡眠ではなくそれは、気絶だと言っておく。

体を起こし、リビングを見回すと、リビングのソファ（三人掛け）を一人で占領し、酔っ払いのオヤジ張りにだらしなく体を投げ出して、ぐーすか眠りこけている姉貴が目に入る。さすがの姉貴も、ビール缶13本も空ければダウンするらしい。今のうちにイタズラでもしてやろうかと思ったが、後が怖いのでやめておいた。しかし、額に手加減なしのデコピンを食らわすぐらいはいいだろう。食らわした後、その程度で少しすっきりしてしまう自分が、逆に虚しくなってしまうたが。

リビングに備え付けた時計を見ると、まだ、登校までは十分な時間があった。昨日唯一姉貴の被害を被っていないアスカは、まだ部屋で眠っているようだ。まあ、普段なら俺もまだ眠っている時間だから、無理もない。

そして、ダイニングに目をやると、キッチンに立っている井上の後姿が目に入った。エプロンをまとったその後姿に、思わず目が留まってしまう。白いブラウスに、チェックのスカートが無駄にいやらしく見えてしまうのは男の性というものか。もちろん、そこからはすぐに目を逸らしてから、俺はダイニングに入った。

「よう。早いな、井上」

「うん。なんだか、目が冴えちゃって」

そう言いながら、フライパンを火にかけ、油をひく井上。昨日のうちに、居候をさせてもらう代わりに、俺がすべてを受け持っている家事の手伝いを井上は申し出てくれたのだ。姉貴の奴は俺の意見を聞きもせず、そんなことはしなくてもいいなどと言っていたが、井上の性格上、やはり手伝ってくれるようだ。ありがたい。それに

しても、昨日井上も姉貴に無理やりビールを飲まされたはずだが、なんともなさそうだな。缶ビール一本分ぐらいは飲まされていたようだったが。つか、コップ一杯分程度のビールで二日酔いの俺って、どれだけアルコール弱いんだよ……。

「朝は、ハムエッグとトーストでよかったかな」

キッチンにある材料を見繕い、俺に声をかけてくる井上。俺は頭痛に頭を抑えながら「あー、うん」と生返事を返す。

「どうしたの、綾瀬君。気分悪そうだけど……」

「ああ。ちょっと、二日酔いっぽい。井上は平気？」

「う、うん。私は全然」

「そうか。酒強いんだな、井上」

「そ、そうかな。で、でも、私お酒飲んだのなんて初めてだよ」

まるで、イタズラをした子供が言い訳をするような顔をして、そう訴えてくる井上を不覚にも可愛いと思いつながら、俺は「分かっているよ」と声を返した。

「じゃ、悪いけど、朝飯は頼んだな。俺ちょっと、向こうで休んでるから」

「うん」

微笑を俺に向け、キッチンに向き直る井上。

やばい。なんか……いいな、こういうの。

朝から上がるテンションに胸を躍らせながら、リビングに戻り、地べたに座りテレビの電源を入れる。突然同居と言われた時は冗談じゃない、などと思っていたが、これは思わぬ収穫だったかもしれない。この調子で井上が家のことを手伝ってくれば、俺の負担もだいぶ減る。異性と同居するにあたる様々な問題を差し引いたとしても、これは十分なメリットだ——と、思ったのだが……。

「きゃああああ！」

まるで沈殿した溶液の底のような俺の頭を、突然の悲鳴が劈いた。それは、俺の頭の中で幾度も反響し、グワングワンと気の滅入る頭痛を誘発する。

慌てて悲鳴の元、つまりダイニングに向かってから、俺は文字通り言葉を失った。

火にかけたフライパンから、モクモクと立ち昇る焦げ臭い煙。その前で、立ち尽くし、涙目を俺に向けている井上。直後、ボンという音を立て、フライパンから炎が上がる。井上は短い悲鳴を上げてから、今にも泣き出しそうな顔をして、助けを求めるように俺の名前を呟いた。

換気扇も回していないキッチンが、たちまち焦げ臭い真っ黒な煙に包まれる。言葉を失っている場合じゃないことに気づいた俺は、ようやくアクションを起こした。

「む、向こう行ってる！」

思わず井上の腕を引き、ダイニングから追い出す。そして、俺は炎に包まれたフライパンの取っ手を、布巾越しに掴んでから、流しの上へ放り出して鎮火した。が、すでにキッチンの火気感知センサーが反応しビービーとやかましい警報音を鳴らしていた。

さっきまで感じていたのんびり感は一切どこへ行った？ 爽やかな朝は、けたたましい警報音にかき消され、焦げ臭い煙がダイニングの中に充満している。

ビービーやかましい音が二日酔いの頭にガンガン響く。充満する煙がウザイ。なんだ、これ、この状況。

とにかく、換気扇を回し煙で充満した部屋を喚起——しようとしたら、背後から、ものすごい衝撃が突然俺の後頭部を襲った。

「うごお！」

「朝っぱらから、なに騒いでんだ、こらあ！」

衝撃につんのめって、床に倒れこんだ俺は、起き上がることもできず後頭部を抱え呻いた。どうやら、ひじ打ちをねじ込まれたようだ。二日酔いの痛みと理不尽な衝撃の、残酷な二重奏。そして、尋常でない痛みに悶える俺の背後で、ビービーやかましい音のせいで目を覚ましたであろう姉貴が、寝起きの悪さを爆発させる。

「てめえ、一輝い！ つああ！ クソ！ 何でこんな頭痛いのよ、もおお！」

それはてめえの胸に聞け。

「ちょっと、何とかしなさいよ、この騒音！ 頭にガンガン響くのよお！ ムカツク！」

そう怒鳴りつつ、俺のケツを何度も蹴りつける姉貴。お前、痛めつければ俺が動けるようになってでも思ってるのか？ ってか、そうしてる間に自分で動けよ。

そうこうしていると、いつの間にか部屋から降りてきたアスカが、パジャマ姿で惨状を素通りし、リビングに入ってしまった。目が合っても逸らされた。助けようって気はさらさらないようだ。

「アンギャー！ うるせえし、くせえし、なんなのよおー！」

「ちょ……あね……」

井上はおろおろとするばかりで一向に助けに入ってはくれない。かといって、アスカも傍観を決め込む始末。

——五分後、ようやく動いてくれた井上の助けを借り、惨状は何とか収まった。そして、その直後「チン！」という間の抜けた音がダイニングに響き、俺と井上はそちらに顔を向けた。

トースターから、見事に黒焦げと化したトーストの残骸が、二つ仲良く顔を出していた。その滑稽な様子をテーブルに座り眺めていたアスカは、持って降りていたノートにペンを走らせ、俺たちに向けた。

「てんやわんや」

九歳児のツツコミに、何も言い返せない俺と井上。そして、俺はぼそりと井上に呟いた。

「とりあえず、今度から飯は俺が作る……」

「う、うん……」

十話「とばっちり相合傘」

これから、平穏な朝が続くと安堵してから、五分ほどでそれはただのぬか喜びであったことを思い知った今朝の俺のテンションは、今までにないほどどん底だった。

急降下したテンションが陰湿な感情へと転化して、油断していると、ものつすごく落ち込んで、さっきから一言もしゃべろうとしない井上の耳元で「なあ、ハムエッグ作って、どうやったらあんな大惨事になるの？ 超興味あるんだけど」などと、なじってしまいうさだった。

本人いわく、卵を固めるため仕上げにフライパンに水を入れ、蒸そうとしたところ、大量に水を入れすぎ、おまけにフライパンに落とすフタも見つからず、あたふたしていて悲鳴を上げたということらしい。姉貴のように「ドジねえ」の一言で笑って済ませられるほどの、ましてや「そんなところが可愛い」なんてアホなことを言っているほど、もちろん俺は寛大ではない。というか、誰が後片付けすると思ってんだ。

それにしても、使い勝手が分からなかったとはいえ、まさか、たった一度の料理でフライパンをおしゃかにしてしまうとは。その瞬間まで、優雅な朝食の光景を微塵も疑ってなかったというのに。

井上をキッチンに立たせると、どうやら謎の化学反応が起き、たちまちスパークしてしまいうらしい。その辺の実態調査に興味を惹かれないではないが、その代償を考えると寒気がしたので、井上は今後キッチンには近づけないでおこう。あの、制服にエプロン姿は捨てがた——あー、頭痛い。

にしても、姉貴の奴は二日酔いで学校休むから、連絡しといてく
れって言い残して、さっさと自室にこもっちゃうしな。連絡しろっ
て「すいません。姉は今日二日酔いで休みます」って言えってか。
嫌がらせでそうしてやろうかとも思ったが、姉貴の担任教師（声か
らして女性だった）の「まあ、二日酔いでサボりいー？」などと
教師らしからぬ台詞に、すべての気概を削がれた。もう、かける言
葉も思いつかず「すいません」って肯定しちまったじゃねえか。

担任は笑って「いえ、いえー」なんて返してきたが。それでいい
のか、あんた。

とにかく、明らかに二日酔いだけが原因でない頭痛を抱え、今俺
は井上と共に通学路を歩いている。それにしても、一人の時の静か
な時間は好きだが、誰かと一緒の時の沈黙となると話は別だ。さっ
きから、一言も言葉を発さない井上が俺の少し後ろについて歩いて
来ているのだが、気まずいことこの上ない。

が、とてもこちらから話しかけようという気にもなれない。口を
開けば、途端に今朝のことをなじりだしてしまいそうだしな。こん
な陰湿な一面が潜んでいたとは、自分でも驚きだ。

「いよーす！ かず——おおおう！ そこにいるのはもしかや井上さ
ん！」

「……」

また、ウザイのに捕まっちゃうし……。

「井上さん、オッハーってやって。はい、オッハー！」

合流して、早速、いつぞやテレビで見た、幼い子供しか喜んでやりそうにないポーズを井上に振り出す、重雄。相変わらず人の目も気にせず、朝っぱらから騒がしいことこの上ない。昨日今日知り合ったばかりの他人にそんなお茶目ポーズを惜しげもなく披露できる、図太い神経の持ち主は、お前ぐらいのもんだ。案の定、後ろを覗き見ると、井上はかなり困っていた。もちろん、ポーズなどってはいない。

「ほら、井上さん！ オッハー！ はい、オッハペ！」

「しつこい。ウザイ。消えろ」

重雄の横っ面に右フックをぶち込み、黙らせる。うまい具合に電信柱に張り付いた重雄を啞然として見ていた井上だったが、俺が無視して先を進むと、井上は早足で俺を追ってきた。

「あ、あの、綾——」

「あれぐらい、どうってことない」

思わず、不機嫌な声で返答してしまう。案の定、井上は顔を伏せて黙り込んでしまった。

「おのれ、一輝い！」

そして、十秒も待たず復活して来る重雄。

「お前、なに井上さんのこと、呼び捨てにしちゃったりしてんだよ、コラア！」

「……」

いや、そっちかよ。

別に、と気のない返事を返すと、ぎゃあぎゃあ騒ぎ出したので、ボディブロー五発で朝の静けさを取り戻す。が、やはりそれぐらいでは奴を仕留めることはできなかった。

「まったく、今日は一段と機嫌悪いなあ。で？　今朝はなにがあったわけ？　率直なご感想をどうぞ」

重雄の言葉に俺は足を止めて、井上を振り返った。井上は申し訳なさそうに、俺から目を逸らして顔を伏せる。

「……」

「ん？　どうかしたの、カズ君？」

その直後、手加減なしのアップパーカットが重雄の顎を貫いた。

頭痛い。率直な感想だ。というか、事態に対する感想が出てこない。今時小学生でもやりそうにない嫌がらせを目の当たりにして、俺にどうしろというのだ。ほんとに、もう、どうでもいいぐらいしんどい。頭痛い。

教室に着くなり、教壇の前の黒板にでかでかと書かれた落書き。これは、あれだ。確か相合傘というやつだ。白のチョークで大きく描かれた傘。ご丁寧に赤色のチョークで頭にハートの描かれた傘の中に仲良く並んで書かれた俺と井上の名前。LOVEという文字を背景に、なかなか、気の滅入る趣向をこらしている。

うん。確か、俺が小学生の頃は異性で仲のいいクラスメイトをからかって、よくこんなことをやる奴がいたな。高校生にもなって、こんなカビの生えた嫌がらせを恥ずかしげもなくやってのけるとは、別の意味で犯人の顔を拝んでみたい。

とりあえず、俺は無言で背後に立つ重雄の襟首を掴みあげてやった。

「ちょ……！　なんで、ここで怒りの矛先が真っ先に俺に向かう！」

「お前ぐらいしか、こんなしょうもないことやるような奴が思い浮

かばないんだよ」

一応、教室に居合わせながら、誰一人としてその落書きを消さなかったクラスメイトに向け「しょうもない」の部分強調して、重雄に声を返す。もし犯人が重雄でなければ、間違いなくこの中にそのしょうもない奴がいるはずだ。ちなみに、このやり取りは教室の入り口で行われているので、後ろにいる井上はまだ事態を把握していなかった。

「ば、馬鹿言ええい！」

やかましく、若干ウザイ声を上げて、重雄が俺の手を振り解き、教室の中に入る。ああ、井上が黒板の落書きを見ちまった。表情を曇らせるその様子を見て、なんで俺が罪悪感、感じてんだ。

「見ろ、一輝！」

重雄の声に、俺は井上に向けていた視線を教室の中に戻した。すると、なぜか手にチョークを持った重雄が「ふっふっふ」と涼しげな笑みを携えながら、きざっぱくポーズをきめ、黒板を指差していた。

「俺だったら、まずこうする！」

相合傘の中に刻まれていた俺の文字が消され、その代わりに重雄の名前が書き込まれていた。

「……」

時間が凍りついた。うん。あまりの馬鹿さ加減に、俺はもちろん、

井上も、居合わせたクラスメイトまで、固まったまま動けずに、リアクションに困り果てていた。これを仕出かした犯人も、みんなであらかってやろうぜ、程度の気持ちだったのだろうが、これでもう下手に触れられなくなったな。とにかく、アホらしい。関わりたくない。

「さっさと、消せ、アホ。井上が可愛そうすぎる」

「ちょ！　どういう意味それ！」

「本人に聞け」

そう言っ、教室の入り口で泣きそうな顔でうつむいている井上を顎で示す。さすがの重雄も、このリアクションには驚き戸惑うしかないようだ。

「ちょ……！　い、井上さん！？　え、な……俺？」

別に重雄がどうこうではないだろうが「違うよ」と慰めてやる義理もない。というか、面白かったので放置してやる。と、ちょうどいいタイミングで夏美が登校してきた。

後ろの入り口から教室に入ってきた夏美は、まず黒板に描かれた落書きを見てから、顔を強張らせた。根が優しく真面目なだけに、夏美はこういった誰かをネタにしたイタズラや中傷は昔から決して許しはしない。そして、普段の穏やかな夏美からはとても想像できないが、怒った夏美は相当怖い。しかも、怒りのきっかけになる事柄は、ほとんどが自分ではなく他人のためだから、文句も言えない。

無表情だが、明らかに怒っている様子の夏美が、自分の席に鞆を

置いてから、ゆっくり俺たちの元へ歩み寄ってくる。リアクションに困り果てていたクラスメイト全員が、ゴクリとつばを飲み込む音が聞こえた。我がクラスの頼れる学級委員のリアクションに、誰もが注目し、息を呑んでいる。って、真面目に解説するのもアホらしい。

「おはよう、井上さん。一輝」

優しい微笑を携えながら、俺たちに挨拶を交わす夏美。その微笑みは爽やかな朝にあつらえたように溶け込み、誰をも清々しい気分にならせてくれるだろう。

俺が「おはよ」と返すと、井上も戸惑いがちに「おはよう」と夏美に声を返した。満足そうにもう一度笑い、夏美は重雄に視線を移す。

あえて重雄だけに挨拶を交わさなかったのは、すでに重雄の手に握られているチョークの存在に気づいていたからだろう。この時点で、重雄はすでにターゲットロックされていた。

「よ、よう……。お、オッハー、夏美」

若干声を引きつらせ、白々しくも自然を装い両手を背中に回す重雄。そんな重雄に、夏美は俺たちに向けたものと同じ笑顔を作り、重雄に声を返した。

「おはよう、キー君」

「お、おお……」

「ところで、ひとつ聞いてもいいかな。この黒板の落書きはキー君の仕業？」

顔は笑顔だが、仕業、と言っている辺り、笑顔の裏に隠された怒りの大きさが伺える。もちろん、俺だけでなく、長年夏美と付き合ってきた重雄も、その漏れている怒りの断片に気づいている。

「あ、あのな。これは、違うんだよ。うん。っていうか」

「キー君の仕業？」

にっこりと笑って問い返す夏美。もはや、言い訳も許されない。

追い詰められた重雄が、視線をさ迷わせ、意味なく「はは」とか笑いながら、軽く後ずさる。さすがに、ちょっと哀れに思えてきたが、夏美のスイッチが入ってしまった以上、もはや助けようもない。

「あ、あの」

「イエスカノーで答えて」

究極の二択を迫られ、たじろぐ重雄。そして、とうとうプレッシャーに耐え切れなくなった重雄が、開き直って、はっちゃけた。

「い……イエース！ アイ、ドゥー！」

スパアン！

その瞬間、乾いた音が教室の中に鳴り響いた。親指を立てて、最

高の笑顔を作った直後に横っ面を引っ叩かれた重雄が、間の抜けた笑顔のまま固まっている。なんて、哀れなんだ。

「キー君、サイッテェ！」

「へ……。い、いや、ちょ……」

「井上さんが泣きそうな顔してるの分かんないの！ キー君にはなんでもないことでも、それで傷つく人だっているんだよ！ もうちょっと人の気持ち考えたらどうなのよ！」

ま、マジギレだ……。

夏美の怒鳴り声に、教室中が静まり返り（もともと、みんな初めから固まっていたが）、気まずい沈黙が支配する。その中心で、馬鹿みたいに固まって、目を泳がせる男が一人。もはや、かける言葉もない。

やがて、重雄をすごい剣幕で睨みつけていた夏美は、キッと重雄から顔を背けると、黒板の落書きを消しにかかった。それから、落書きを消し終えると、教室の入り口に立ち尽くしている井上に、優しく声をかける夏美。

「井上さん、大丈夫？」

「あ……う、ん。あり、がとう……つこらめ柊さん」

「ううん。何か困ったことがあったらいつでも言ってね。私でよかったら力になるから」

「う、うん……」

嬉しいような困ったような、複雑な表情を浮かべ、声を返す井上。そんな井上を見て、夏美は満足そうに頷いて自分の席に戻っていた。

その後、タイミングよく朝のチャイムが鳴り響いたが、重雄は山田が来ても固まったまま動かなかった。誰もが、その悲しきとばかりに同情しながらも、慰めることはなかった。

十一話「新入生親睦会」

二日酔いの身の上で、ボヤ騒ぎ、カビの生えた嫌がらせと気の滅入るイベントをこなしたばかりの可愛い教え子に、それが担任教師が取る態度か。などという訴えは、教師としての良識と熱意を持った人間に吐くべきだということは理解している。だから、頭の中だけで訴えるに留めているのだ。

まあ、教え子といっても、未だに山田の授業には一度も出ていないから、何一つ教わってはいないが。というか、山田は何の科目を担当しているのだろうか。こいつが他人に物を教える図が想像できない。などということは、どうでもいい。

「は……?」

「ですから、綾瀬君にはそのリーダーを務めてもらいます」

面倒くさそうに、いちいち聞き返すなど言いたげな冷めた目を俺に向け、相も変わらず淡々と言葉を発する担任教師、山田。もちろん、俺は抵抗を試みる。

「いや、何で俺がリーダーなんですか。ってか、何ですでにメンバー入りしてんだ」

思わず、最後はタメ口になってしまった。それほど、今の俺はイラっとしているわけだ。が、山田はそんなことには気も留めず言い放った。

「君は昨日授業をサボりました。おまけに、その後私が呼び出した

にも関わらず無視して帰りました。その罰です」

「……」

こいつ、ストレートに罰とか言いやがった。

山田の鉄仮面の裏の、どす黒い本性を垣間見ってしまったような気がして、反論する気概を失くしてしまった俺。そんな俺を一瞥してから、山田は井上にも罰を与えたのだった。

「それから、井上さん。あなたも、昨日一時間目の授業をサボったので、罰として参加してもらいます」

「え……」

「ちょっと、待ってください先生！」

あまりの理不尽さに、夏美が席を立ち声を上げる。そもそも、昨日、俺たちが授業に出られなかったことがアクシデントによる不可抗力であったことは、井上の口から伝わっているはずだ。それを、夏美は訴えようとしてくれているのだろう。が、それもあえなくシヤットアウトされた。

「昨日のことは」

「それと、学級委員二名も強制参加です。残りの二人のメンバーは明日までに勝手に決めておいてください。以上。ホームルームを終わります」

無気力の裏に隠された、完璧なる独裁。もしかすると、こいつは

とんでもないクセ者なのではないか。誰もがその確信とも言える予感に息を呑み、教室を悠然と後にする無気力教師をただ黙って見送ることしかできなかった。

何でも、それは年に一度の一大イベント。当初は新入生が互いの親睦を深めるために催されたものであったが、回を重ねるにつれ、いつの間にかそれはひとりでにヒートアップ。今では、新入生同士が凌ぎを削り、その身を削りあうそのスリルが見物な、一種のサバイバルゲームと化したもの。

——だと、男子学級委員こと、佐藤が懇切丁寧に解説してくれた。昼休み。朝のショートホームルームからこっち、慌しくまともに

話し合う時間も取れなかった俺たちは、昼食を摂るついでに、今朝のことについて話し合うため、教室の片隅で、空いた机を四つほど並べ、集まっていた。その面子は当然、そのサバイバルゲームとやらのメンバーに強制入りさせられた、俺、井上、夏美、佐藤（男子学級委員）、それと、自ら立候補した重雄のバカに、もう一人はたった今初めてフルネームを聞かされたばかりの、クラスメイト、春日みひろ。その人間性は定かではないが、このわけの分からないイベントの参加に自ら名乗りを上げてくる時点で、どうやら一筋縄ではなさそうだ。ちなみに、名前から分かるだろうが、女子だ。

そもそも、ことの始まりは、今朝のホームルームで山田がなんの脈絡もなく話し出した、一つの学校行事からだった。それは、毎年、入学式の十日後に行われる、新入生の新入生による、新入生のための行事らしかった。

あらかじめ渡されていた行事予定表のプリントに、確かに入学式の十日後あたりに「新入生親睦会」という名目の行事が記載されているのを見たような覚えがあった。まあ、くだらないレクリエーションの集まりみたいなものかと思っていたのだが、突如山田が「メンバー」という単語を発した辺りから、なにやらきな臭い空気が漂い始めた。

案の定、最終的には「綾瀬君にはそのメンバーのリーダーを務めてもらいます」などとクソ面倒くさいことを言い出される始末だ。山田をぶん殴らなかった俺を誰か褒めてくれ。

「まあ、初めのうちは軽いお遊び程度のものだったらしいけど、回を重ねるごとに、徐々に過激になっていって、今じゃ怪我人なんて当たり前ってぐらい、危ないゲームに発展してるらしいね。今じゃ、ゲームに参加しない二年、三年のほうで、そのイベントを楽しみに

しているぐらいさ」

昼食時まで、本を片手に、机に置いた弁当をつまみながら、なおも解説を続ける男子学級委員、もとい、佐藤。駄目だ。佐藤なんてありがちな名前、この先覚える自信がない。というか、こいつはなぜに、これほどこの件に関して詳しいんだ。

「ゲームに参加しない方が盛り上がるって、どゆこと？」

男子学級委員の横で、焼きそばパンをほおぼりながら、素朴な疑問を投げかける重雄。ちなみに、俺たちは今、男子陣、女子陣が向かい合って机を挟み座っている。

その配列は窓際から俺、男子学級委員、重雄。向かい合うこと、窓際から、夏美、井上、春日だ。合コンの様相を呈しているが、もちろん、ただの話し合でしかない和一応言っておく。

それと、どうでもいいことだが、今朝の相合傘の落書きの件については、すでに誤解であったことは井上の口から夏美に伝わっていた。まあ、重雄は殴られ損だが、それも自業自得だ。

「それだけ面白い見世物だってことだよ。まあ、怖いもの見たさつてのも含まれてるようだけどね。どうやら、限界ギリギリまで教師も止めに入らないみたいだからな」

重雄の質問に、こともなげに淡々と言葉を発する男子学級委員。いろいろ、いわくありげな意味深発言をかましながら、落ち着き払って黒縁眼鏡の縁に手を当てている。

「怖いもの見たさって……そもそも、サバイバルゲームって、一体

「どんなことをやるの？」

男子学級委員の発言に、夏美が不安そうに声を出す。話の内容に思わず、箸の手も止まっている。そして、そんな夏美に男子学級委員は不気味に口元に笑みを浮かべながら、一言。

「文字通りの生き残り合戦さ」

男子学級委員の発言に、夏美と井上が引いている。重雄はノーリアクションで、二個目の焼きそばパンに取り掛かり、春日は「ふん」と強気に鼻を鳴らし、俺は傍観を決め込んでいた。

「――で、その生き残り合戦って、具体的にはどんなことやんの？」

言葉の威力がまったく通じない重雄が、こともなげにそう声を出す。まあ、こいつは殺したって死なないような奴だから無理もない。井上と夏美の取るリアクションが正しい反応だ。春日だけは未知数だが、どうやら、脅えてはいないみたいだ。

「まあ、はしよって言えばバッチの奪い合いだよ。ゲームに出場するのは、一クラス六人で一チームずつ。そのメンバーにはクラスごとに決まったバッチを全員に渡され、簡単な話がそのバッチを奪い合うゲームさ」

「ふうん。じゃ、そのバッチってのを全員が獲られたら負けってわけか？」

重雄の言葉に、男子学級委員は愉快そうに言葉を返す。

「いや。正確にはリーダーのバッチが獲られた時点でチームの負け

が決定するのさ。つまり、六人中五人のバッチが獲られていようと、残りの一人が相手チームのリーダーのバッチを奪うことができたなら、そのチームの勝利。ってわけだ」

男子学級委員の言葉に、五人の視線が一斉に俺へと向けられる。ああ、予想以上の面倒くささに、また頭痛がしてきたな。とりあえず、山田の奴（一応、教師）をぶん殴らなければ、この頭痛は収まりそうもない。

不安そうな視線を俺に向けてくる、井上と夏美。さも、愉快そうな重雄と、男子学級委員。そして、睨みつけるように、ってか俺を睨んでる春日。とにかく、頭痛い。

「えーと……。とりあえず、リーダーの変更を求める」

「それは、無理だね。メンバー登録は担任教師の了承の下行われる。その担任教師が君をリーダーに指名してるんだから、諦めるしかないよ。そもそも、身から出た錆だろう？」

「デメエ、可笑しそうに言ってんじゃねえよ、クソヤロウ」

って、しまった。つい、本音が口をついて出てしまった。俺の発言に、井上が怯えた目を――。夏美も若干驚いている。春日は、相変わらず俺を睨んでるな。お前なんか俺に恨みでもあるのか。

「まあまあ、落ち着けて一輝。物は考えようだぞ？ いいじゃん、リーダー。なぜなら、リーダーになれば一番目立てる！」

高らかとそう宣言する重雄に、俺は一言「死ね」と言ってやった。

「ひど！」

「ま、まあ、とにかく……。リーダーの変更は望めないだろうね。クラスの前であれだけ堂々と宣言されてるわけだから」

「なんでよ。頼み込めば、変えてくれるかもよ？　ってか、俺がな
ってやるって、リーダー」

「そもそも、このゲームの肝は、いかにして当日までチームのリーダーが誰であるのかを隠し通すか、なんだよ。徹底したクラスは、参加メンバーの六人さえ、クラスメイトにも明かさないうってほどだからね。でも、ウチのクラスは、堂々とクラスメイト全員の前でリーダーを宣言している。この意味が分かるかい？」

「も、もしかして……」

はっとしたような顔をして声を漏らしてから、夏美はいかにも恐る恐るといった感じで俺に視線を這わせた。その表情は、同情するような、哀れむような、なんとも言えないものだった。うん。嫌な予感ぷんぷんだ。

「そう」

そして、男子学級委員が締めくくる。

「このゲームの重要性を知っている一年生は少ない。隠さなければいけないと認識していないわけだから、友人同士の話のネタに、誰かがもう情報を漏らしている可能性は高い。つまり、もう、綾瀬君がこのクラスのリーダーであることは、他クラスに知れ渡っている
と考えるべきだろう。つまり、山田先生の言うとおり、これは綾瀬

君に与えられた罰なのさ」

「？ どゆこと？」

重雄のバカが分かりきったことを、間抜け面で聞き返す。いや、もういい。これ以上は聞きたくもない。てか、しゃべんな。

「だ、だから。つまり……」

無言で「もうお前黙れ」オーラを発散させる俺に男子学級委員は閉口した。が、今まで沈黙を守っていた春日が、意外にも初めて口を開いた。

「つまり、他のクラス全部が、一番手っ取り早く綾瀬を集中的に潰しに来るってことでしょ」

春日の発言に、重雄意外の全員が「いや、お前空気読めよ」と言いたげな顔を春日に向けた。が、そんなことにはひるみもせず、春日はまた俺を睨みつける。

「春日……お前さ。なんか、俺に恨みでもあるのか？」

たまらず、俺はストレートに疑問を本人にぶつけた。別に、今の発言に対してということではない。ただ、いい加減睨まれるのがうっとうしくなってきただけだ。

俺の発言に、春日は気の強そうな、少しつりあがった目をまたきつくして、俺にガンつけてくる。困った。これはケンカを売られているのだろうか。

あまりにも、睨みつけられるので、この際俺も春日に目を留め、観察してみることにした。

長い髪を後ろで一つにしばったポニーテールの髪型。背も高く、手足の長いスレンダータイプの、美人とも言えない顔立ち。もっとも、今は俺を睨みつけることで、その顔は般若面のごとき変貌を遂げているが、というのは言い過ぎか。

とにかく、男子をこうも睨みつけることができるあたり、随分勝負な性格みたいだな。体育会系か、こいつ。

「あんた自身に怨みはないよ」

やがて、随分長い沈黙を保った後、春日は変わらず俺を、まるで肉親の仇みたいな勢いで睨みつけたまま、声を出した。

「ただ、私はあんたの姉が許せないだけさ……！」

「は……？」

「あんた、綾瀬みうの弟だろ」

「あ、ああ」

なぜに、ここで姉貴が出てくるのだろうか。話の流れに他の五人は戸惑いつつ無言でいるが、一番戸惑っているのは他ならぬこの俺だ。

「えっと……。ウチの姉がお前になんかしたのか？」

あり得ない話じゃないだけに、弱腰になってしまう。そんな俺を

見て、春日は悔しそうに齒軋りした。つて、わけ分からん。

「お前の姉……綾瀬みうは……私の……私の……」

「わ、私の……？」

あんまり溜めるもんだから、俺を含め、この場にいる全員がごくりと息を吞んで春日を見つめている。そして、そんな中、春日は衝撃的な一言を言い放った。

「——私のお姉ちゃんの敵よっつ！
かたき」

いや、確かにこいつ俺のこと肉親の敵みたいな勢いで睨んでくるとは思っていたが。って、は？　今、こいつなんて言った？　敵？　……え？

[illegible]

あまりの爆弾発言に、俺はワンテンポ遅れてから、驚きの声を上げた。人前で、これだけ俺が取り乱すのは、非常に珍しいことだ。ってか、んな爆弾発言かまされて、さらっと受け流せるか。

「おま……！
な、ま、マジで！
マジでか！」

思わず身を乗り出して、春日の肩をがっしりと掴む。その様子に、教室に居合わせたクラスメイトが何事かと、こちらに注目していたが、今の俺にそんなことに気を回す余裕はない。

「ちよ、お、落ち着いて、一輝！」

夏美が慌てて制止に入るが、俺は構わず春日の両肩を掴んだまま、前後左右にブンブン揺さぶった。そして、続いて止めに入ってきた重雄には、顔面頭突きをかました後、ひるんだところにストレートパンチをさらに顔面にぶち込み、ノックアウトさせる。

井上が慌てて、床に倒れこんでピクピクしている重雄の下に駆け寄った。いつものことなので、夏美は重雄を無視して俺を春日から引き剥がす。男子学級委員は本を読むふりをして、見て見ぬふりだ。

やがて、春日は俺から離されると、少しひるんだ様子を見せながらも、両肩を抱いたいかにも「私犯されました」みたいな格好で、悔しそうに声を上げた。今までの流れを見てない奴がここだけ見たら、勘違いされんじゃないか、これ。

「そうよ……！ 二年前、私のお姉ちゃんもこの新入生親睦会に、クラスのリーダーとして参加した！ でも、あんたの姉に真っ先にバッジを奪われたお姉ちゃんは、全治二週間の大怪我を負わされ、そのプライドもずたずたに引き裂かれたのよおお！」

「――は？」

「あの時優勝できなかったお姉ちゃんは、その無念を私に託した……。だから……だから、私はお姉ちゃんの敵である憎き綾瀬みうの弟であるあんたとも、手を組むのよっ！ そして、今度こそ、私がお姉ちゃんの代わりに優勝して、お姉ちゃんの無念を晴らすのよおおお！」

「……」

あまりのアホらしい発言に、その場の空気が一気に白け、休み時

間の喧騒に包まれていた教室の中はシーンと静まり返った。誰もが、この人騒がせなシスコンにどうツツコンでやればいいのか困っている。そして、そんな中、男子学級委員が本に目を落としたまま、解説を入れた。

「そういえば、二年前の優勝チームは、過去前例のないたった一人だけで構成されたチームだったらしい。何でも、その人物の繰り出すプロレス技は受身不可能で、男子でさえも誰も手に負えなかったとか。その人物は今もキングと呼ばれ、この学校に君臨してるみたいだけど……」

苦し紛れに、俺は復活しかけて、井上の手を握ろうとしている雄の顔を踏みつけた。昼休み終了五分前の予鈴が、けたたましく教室の中に鳴り響いた。

十二話「距離」

昼休み終了後、俺は誰もいない教室の中で、窓際の机を椅子にして、一人物思いにふけていた。昼休みのあのドタバタの後、春日は叫ぶだけ叫んどいて教室を飛び出して行ってしまった。どうやら、本人は至って本気で「新入生親睦会」の優勝を狙っているらしい。その目には、キラキラと光るものが浮かんでいた。

とりあえず「いや、それいつの話だよ」と今度本人に会ったら面と向かってツツコンでやるつもりだ。しかし、おそらくあの意気込みからして説得は不可能だろう。そうになると、一応ウチの姉貴が原因なわけだから、むげにあしらうわけにもいかない。

全治二週間とか、そこだけしゃれにならないこと言ってたしな。今日帰ったら、姉貴に事の真意を問いただしておくか。

そんなこんなで、午後一番から体育など真面目に出てられるかってことで、授業をサボり一人教室で物思いにふけているというわけだ。それにしても、まだ入学五日目だというのに、もう一年は過ぎてきたみたいなの途方もない疲労感なんだ。姉貴と同じ高校に通う時点で、いくらかの覚悟はしていたつもりだが、どうやら俺の考えは相当に甘かったらしい。

この次々に巻き起こるハプニングに何者かの意図が絡んでいるような気がするのはいかのせいかな。

変人共が集まることにより、分泌される謎の化学物質。外気に触れ、それはスパークして他人に被害を与える、と考えるほうが現実的か。もはや、変人の寄り集まる不可思議な星の下に生まれた自分

の悲劇を嘆く他ない。とりあえず、悔し紛れに今度両親が帰ってきたら、二人ともぶん殴つとこうか。一切手加減抜きで。それが何年後になるかは図りかねるが。

「誰か、俺の立ち位置代わってくれ……」

ため息をつきつつ、無人の教室で一人ごちる。机にだらしく足を投げ出し、背中ごと頭を窓にもたげる。と、閉まっていた教室のドアがゆっくりと開くのが、視界の端に映りこんできた。まさか、まだ授業中のはずだと、ぼんやりと天井を眺めていた俺は、少し焦りながら、静かに教室に入ってきた人物に目を向ける。

そこには、イタズラっぽく微笑んでいる夏美が立っていた。

「な、夏美……どうした？」

思わず口から出てきた俺の言葉に、夏美は苦笑して「それはこっちの台詞」と声を返してきた。静かに教室の戸を閉めて、俺の元へ歩み寄ってくる夏美。俺は、まだ授業中であることを確認するため、教室に備え付けられた時計に目を向けた。確かに、授業終了にはまだ二十分ほどの時間が残っていた。

半そでの体操着に、ショートパンツ姿の夏美を見て、どうやら授業を抜け出してきたらしいことを、少し遅れて理解する。理解が遅れたのは、夏美が夏美たる由縁というやつだ。

「具合が悪い——ってわけでもなさそうだな」

俺の軽口に、夏美は小さくため息をついた。

「もう。昨日も授業サボって帰ったでしょ。あんまりサボっていると、単位落とすよ」

「まだ入学五日目で、もう単位の心配か」

「できの悪いクラスメイトの面倒見るのも、学級委員の仕事ですから」

「そりゃ、どうも」

目を合わせてから、俺たちは同時に吹き出した。

夏美が俺の座る机から机二つ分開いた席の机に腰を下ろす。投げ出されて振り子のようにぶらぶらと揺れる夏美の足に視線を落としている、夏美の声が流れてきた。

「鍵は週番が持つてるはずだけど、教室の鍵どうやって開けたの？」

視線を上げると、首をかしげて俺に目を留めている夏美と目が合った。俺はポケットから、紐につるした鍵の束を取り出してから、夏美に向けて放り投げた。

「わ」と声を漏らして、慌てて夏美が空中で鍵の束をキャッチする。ジャラン、と金属がぶつかって、擦れる音が教室の中に反響した。

「な、なにこれ」

「姉貴がこの学校の鍵のスペア全部取ってるんだ。その一部を拝借してきたってわけ」

「……呆れた。いつもこんな持ち歩いてるの」

言葉どおりの表情を作って俺を見る夏美に、苦笑を返す。もしかしたら、このままスペアキーを没収されてしまうかとも思ったが、案外あっさり、夏美は鍵の束を放り投げてきた。

「没収しなくていいのか？」

「そんなことしても、どうせ無駄なのは分かってるよ。何年一輝と付き合ってると思ってるの」

「まるで、恋人みたいな物言いだな、それ」

そう言って、鍵の束をポケットにしまう。別にカマをかけているわけでもなく、夏美も笑って返してくれる。昔から、夏美というこの距離感は俺を落ち着かせてくれる、唯一の静養剤だ。

「よかった。今日はいつも通りの一輝だね」

しばらく、取り留めのない会話を交わした後、突然、夏美がそんなことを言い出した。初めから夏美がそのためにここにいることは予感していたので、今更「なんのことだ」と聞き返す気にはならなかった。

ただ、俺を気遣ってくれる夏美の好意を、正面から受け取るほど、素直な性格もしていなかったので、とりあえず俺は夏美から目を逸らした。

「昨日、一輝ったら、死んだ魚みたいな目してたからさ」

「いや、誇張しすぎだろ、それ」

「そうかな」

「そうだよ。ってか、魚と一緒にするな」

そう言って、夏美にそっぽを向く。夏美のおかしそうな笑い声が、静かな教室の中に流れて消えた。夏見の笑い声の行方を追うと、いつの間にか、教室の中は静寂に包まれていた。その中で、俺は夏美にかけるべき言葉を思案する。

心配かけて悪かった。ありがとう。気にすんな。なんでもないよ。

本心を覆い隠すための言葉が、いくつも頭の中で浮かんでは消えた。そのどれもが、口にしても無駄なことは分かっていた。あるいは、夏美なら、気づかないふりをしてくれただろうか。少なくとも、夏美は本気で俺を心配してくれている。

「ねえ、一輝」

本心を隠すために立ち往生している俺に、夏美の声がそっと流れてくる。その声を聞いて、俺は夏美に投げかける言葉を放棄した。

「いつか、一輝、私に自分のこと話してくれたよね。あの日から、一度も夢を見なくなったって。——憶えてる？」

「——ああ」

「一輝はなんでもないって言ってたけど、私は、それって、すごく怖いことだと思ったの。普段、当たり前に見てた夢が、ある日を境

に突然なくなってる。私、想像してみたんだ。目をつぶって、気がついたら、いつの間にか朝が来てる。意識があるときも、ないときも、目をつぶると自分がいるのはいつも暗闇の中。一日の大半をなにもないところで過ごしてる毎日。それって、すごく怖いよ」

夏美の言葉に、何かが揺らいだような気がした。その、悲しくも優しい言葉が俺の心に触れて、それでも、俺はその行為にどう応えていいのか分からない。

「もう、慣れたよ。別に怖くもなんともない」

「じゃあ、それに慣れちゃうことが悲しいことだってこと、一輝は気づいてる？」

「……」

「今もずっと、一輝があの日に縛られたままだってこと……気づいてる？」

夏美が、そっと机から離れて、俺の元に歩み寄ってくる。一歩一歩、これまで築いてきた距離感が崩れていく。その距離感に、俺は眩暈を覚えて目をつぶる。少しの間そうして、目を開けたときには、夏美が手を伸ばせば届く距離まで近づいてきていた。

否定することも、肯定することもできなかった。ただ、このあまりに近い距離感に俺は戸惑っていた。きっと、夏美もそうなのだろう。

そっと手を伸ばした夏美の指先が、かすかに俺の頬に触れた。くすぐったい感触の後に、ひんやりとした夏美の指先がかすかに震え

ていることに気づく。視線を上げると、夏美は泣きそうな顔をして微笑んでいた。

「ねえ、一輝……。私……。どうすればいい……。？」

夏美の声が、鳴り響くチャイムの音にかき消された。

「……。え？」

チャイムの音の余韻が耳の奥で静まる。夏美の訴えようとした言葉を手繰り寄せようと声を漏らすと、夏美の表情が弱弱しく揺れたような気がした。その悲しそうな瞳から、夏美の気持ちだけを汲み取ってやれるほど、俺は大人じゃなかった。でも、それは夏美だっ
て同じことだった。

やがて、夏美は俯くと、俺の頬に触れていた指をそっと離れた。

「ねえ、一輝……。本当は、昨日……。井上さんとなにがあったの？」

「……」

柔らかな長い髪が、夏美の表情を覆い隠していた。目の前に立ち
尽くす夏美を前にして、気持ちを言葉にうまく代えることができない。

夏美に余計な心配をかけたくなかった。それを理由に真実に触れ
られることをただ恐れている自分がいる。こんな俺が、夏美にかけ
てやれる言葉なんてあるはずがなかった。

「別に……。なにもないよ」

「――そっか……」

かすれた声を出してから、夏美がくるっと俺に背を向けた。

一步、二步、三步。夏美が俺から遠ざかる。突き崩してまで、近づいてきた距離を取り直すように。やがて、夏美は立ち止まって振り返ると、いつもどおりの笑顔を俺に向けた。

その笑顔に、一瞬でも安心してしまった自分に、吐き気がするほどの嫌悪を覚えた。それでも、それは今の俺にはどうしても必要なものだった。

「ごめんね。変なこと聞いて」

「……夏美」

「それと、今後は授業サボらないこと。――いい？」

曖昧に頷いてみせると、夏美は「よし」と俺に笑いかけてから教室を出て行った。

机から離れて、床に降り立つと、足場が突然ガラガラと目の前から崩れ去ってしまったような、浮遊感が俺を襲った。それがただの眩暈による錯覚だったことに気づくまで、少しの間俺は目をつぶる。

行き場のない怒りと、途方もない自己嫌悪。はけ口の見つからないそれは、俺の中で溶け込んで、手がつけられないほど膨らんでいく。

やがて、授業を終え、着替えを済ましてきた男子たちが教室に戻ってきた。そして、俺を見つけて、開口一番やかましい声を上げてきた重雄。

「ああー！ やっぱ、サボってたな、一輝い！ いーけないんだ、いけないぼはあ！」

に、八つ当たりしておいた。

十三話「帰路」

「なあ、なあ、これからみんなで遊びにいかねえ!？」

授業終了後、ホームルームも終わり、クラスメイトが教室から出て行く中、重雄が例のメンバーを捕まえ、そう言い放った。例のメンバーとは、新入生親睦会の参加メンバーのことだ。

しかし、重雄の軽率な発言にメンバー全員の反応は、芳しくなかった。そんなメンバー達を見て、重雄は「い、いや、ほら! これから、一緒にチーム組むんだから、親睦を深めないと……ね! ね!」と食らいつくが――。

「悪いけど、僕はこれから塾があるから失礼させてもらうよ」と眼鏡に手を当て、冷静に言い放つ男子学級委員。

「私の目的はあくまで新入生親睦会で優勝することよ。個人的にあんならと仲良くする気はないわっ」とつつけんどんに突き放す春日。

「悪いけど、私これから部活の見学に行くから……」と言いつらそうに、夏美。

「断る」と一言、俺。

「みんなが行かないなら、私も……」と申し訳なさそうに、井上。
というわけで、多数決により重雄の提案は却下された。

「ちょ……待てよ! ってか、夏美! お前はせめて付き合え!」

「え！ な、なんで私だけ！？」

「今朝、俺の横っ面おもつきし引っ叩いたの、もう忘れたのかっ！」

「ご、ごめん！ でも、もう、何度も謝ったじゃない！ いい加減、許してよ（小声）」

「けー！ クラスメイト全員の前で恥じかかされたんだぜい！ そう簡単に許してもらえと思うなよってーのー！」

重雄が夏美に絡んでる間に、男子学級委員が「失礼するよ」と教室を出て行き、春日も「バカバカしい」と鼻を鳴らして、俺にガンつけた後、悠然と教室を出て行った。あ、そういやあいつ説得――面倒くさいからもういいか。

「ほら、ここ、ここ！ まだ、ちょっと腫れてるだろ！ この落とし前どうつぎゃ！」

「いい加減にしろ、うっとうしい」

夏美を窓際まで追い込み、引っ叩かれた方の頬をネチネチと見せ付けている重雄の頭を横から黒板に叩きつけてやる。重雄はグニャリと糸の切れた人形のように床に崩れ落ち、大人しくなった。

「あ、ありがと、一輝。でも、ちょっと、やりすぎかも……」

「心配すんな。こいつの不死身っぷりは筋金入りだ。俺が保証する」

「なにそれ」

俺の言葉に、夏美はおかしそうに笑ってから、俺と目が合うと、そっと目を逸らした。お互いにしか分からない、ほんの少しの気詰まりな沈黙。それでも、すぐに夏美はいつもどおりの表情で俺に笑いかけた。

「じゃあ、私行くね。バイバイ、一輝」

「……ああ」

「じゃあね、井上さん」

「あ、うん。さよなら……」

教室から出て行く夏美を見送ってから、俺は小さく息をついた。足元では、重雄が早くも、ぴくぴくと動き出し復活しようとしていた。

「井上。用事ないなら、重雄に絡まれる前に早く帰ったほうがいいぞ」

「あ……うん。綾瀬君は、どうするの？」

「俺？ あー、俺は買い物してから帰る。日課だからな」
フライパンも買い替えなきゃなんないしな。

「じゃ、じゃあ、私も――」

「井上、ちょっと」

そう言って、俺は井上を廊下に出るよう促した。教室に残っていた掃除当番は、ぴくぴくと不気味に蠢く重雄を見て「これ、何とかしていけよ」的な視線を俺に向けていた。が、さりげなく気づかないふりをしておいた。

人目を気にして、階段の踊り場まで井上を促す。人気がないことを確認してから、俺は息をついた。

「綾瀬君？」

どうしたのかと、疑問符を顔に浮かべている井上に向き直る。その顔を見ると、やはりため息をつかずにはいられない。

「井上さ。俺たちが同居してるってこと、学校の連中に知られたらいろいろまずいだろ。もし、一緒に買い物なんてしてるとこ誰かに見られたりしたら、それこそ、あつという間にあることないこと噂になるだろうし」

「……そっか。そう、だよな」

「うん。だから、極力一緒に帰ったりするのも止めたほうがいい。朝、登校するときも、少し時間ずらしたほうがいいかもな。それと……これ、渡しとくから」

そう言って、俺は井上に家のスペアキーを渡した。

「これ……」

「家のスペアキー。今日は姉貴が家にいるだろうけどな。誰もいな

いとき、それないと家に入れないだろ」

「あ、ありがとう。でも……いいのかな」

「え？」

「こんなに、甘えちゃって……」

そう言いつつ、もじもじしながら俺を見つめる井上。何うように少しうつむきながら、こんな無防備に上目遣いで見つめられて「迷惑だ」なんて返せる男が、この世界に一体何人いるのだろうか。それにしても、これが、女の武器というやつか。なるほど、これならそこら辺の魔王など一撃だ。

「……あのな。そう思うなら、初めから他あたってくれよ」

ため息混じりにそう言うのと、井上はしゅんとなってしまった。いや、軽い冗談だったのだが。

「いや、冗談だって。それに、ずっとってワケじゃないんだろ？」

「……う、ん。それは――」

「まあ、気兼ねするなってのは無理かもしれないけど、気にすんな。姉貴がもう、井上のこと気に入ってるみたいだしな」

俺の言葉を聞いて、困ったように微笑む井上。それが笑い事では済まされないことに、どうやら井上はまだ気づいていないらしい。

その辺のことをきちんと教えてやろうとも思ったが、ちらほらと、

生徒が階段を通りがかってくるようになったので、やめておくことにした。詳しいことは、今日帰ってからきちんと話しておくか。

「――じゃあ、俺先に行くから。井上も重雄に絡まれる前に早く帰れよ」

「うん」

井上をその場に残し、俺は昇降口に向かった。

姉貴のクソ馬鹿野郎には、ウチの家計が火の車であることをぜひ

理解して欲しいものだ。

てめえが、生活費の七割を懐に入れてる影で、誰が涙ぐましい努力で家計を支えてると思ってるんだ、とフライパン一つ買うのに一番安いものをいくつもの店を回って探し当てているこんなときにこそ、叫びたくなる。この心の声が表に漏れる日は一生来ないであろうことは置いていて。

ああ——それより、そろそろ近所のスーパーでタイムセールが始まる時間だ。今日は豚肉が半額だ——って、主婦か、俺は。

フライパン入った買い物袋提げつつ、タイムサービスの時間気にして走り出すって、身も心も主婦化してんじゃねえか。とは思いつつ、足が止まらない自分が悲しい。背に腹は変えられないのだ。

タイムサービスで、日頃の昼食代^{まかな}賄ってんだから。この機を逃すと、明日の昼飯が消えてなくなる。

「……ん？」

空き地の横を通り過ぎようとしたとき、ふと視界の端に気になるものが映り、俺は足を止めた。

空き地の真ん中あたりにちょこんと浮かんでいる赤いランドセル。いや、よく見るとそれはランドセルを背負った小学生らしかった。肩の先まで伸びた、三つ編みのおさげ髪。しゃがみこみ、ランドセルに隠れてしまおうかという小さな後姿。おそらく、というか、間違いないあれはアスカだ。

タイムセールの時間が迫っている。が、無視するわけにもいかず、

小学生らしからぬ、重厚な孤独オーラを発している実の妹をいぶかしみつつ、俺は空き地の中に足を踏み入れた。

まともに遊ぶ広さもない廃れた空き地。もちろん、遊具なんて気の利いたものが置かれているわけでもないこの場所で、アスカは一体なにをしているのだろうか。相変わらず、兄の俺にも読めない奴だな。などと思いつつ、俺はアスカの後ろに立ち、声をかけた。

「よお。何してんだ、アスカ」

俺の呼びかけに、アスカは顔だけチラッとこちらに向けると、すぐにまた前に向き直った。そして、しゃべっていたランドセルを地面に置き、中からノートとペンを取り出し、サラサラとノートに文字を書き出すアスカ。もちろん、その間ずっと無言だ。

【人違い】

向けられたノートに書かれた文字を見て、俺は即ツツコミを入れた。

「いや、さっき明らかに俺と目が合っただろ。つか、己の意思をノートとペンで表現するのはウチの妹ぐらいのもんだ」

すると、アスカはノートをめくり、また文字を書いて俺に向けた。

【セクハラ】

「おい」

【十ヘンタイ】

「……」

【Ⅱ一輝】

「どういう計算式だ、コラ！」

背後から思わずガツとアスカの肩を掴む。しかし、アスカは無反応でノートにペンを走らせ、俺に向けた。

【既成事実】

「……お前、意味分かってんのか？」

使い方は間違っではないが。つくづく、九歳児とは思えないな、こいつ。

それにしても、子供の発言（言葉は発してないが）にいちいち本気で怒っているのは大人気ない。そう思い、俺はアスカから手を離し改めて声をかけた。

「なあ、アスカ。お前、こんなとこでなにしてんだ？」

【えさ】

「餌？」

【あげようと思って】

アスカの言葉（しつこいようだが、しゃべってはいない）に、俺

はアスカの肩口からアスカの前を覗き込んだ。すると、アスカの前には小さなダンボールが置かれていた。……子犬入りの。

雑巾が一枚だけ敷かれた、古びたダンボールの中で、くるっとした愛らしい瞳を俺たちに向け、両手に収まってしまいそうなほど小さな体を縮込ませている子犬。何の品種かはよく分からないが、その愛くるしさは反則級だ。なるほど、小学生なら無条件で引き寄せられるだろうな。

それにしても、捨て犬に餌をあげようなんて、アスカにも可愛いとこあるじゃないか。なに考えてるか分からない奴だと思っていたが、なんだかんだでまだ子供なんだな。

おそらく給食で残したであろう、ナイロン袋に入ったパンをランドセルから取り出し、アスカは、それを小さくちぎり子犬にむけて差し出した。すると、子犬はなんの躊躇もなく、無邪気にアスカがつまんだパンの欠片を口に運ぶ。

しばらく、その微笑ましい光景を後ろから眺めていると、不意にアスカが俺のほうを振り向き、俺と目が合うと、ノートにペンを走らせた。

【いる？】

そして、パンをちぎり俺に差し出すアスカ。

「……いらん」

お前の中で俺は捨て犬と同列ってことか？

【名前、考えて】

「——ん？」

【名前付けてあげれば、この子のこと誰か拾ってくれるかもしれない】

「あ、ああ。そだな」

こういう場合、普通なら「飼いたい」ね！いいでしょ！？となりそうなものだが。いや、そうなら困るので都合だが、わがまま言われないうちのもの、なんかな。見透かされてる気がする……。

そんなことを思っている俺をよそに、アスカは子犬の名前を考えることに苦心していた。そこで、俺も気を取り直して子犬の名前を考えてみた。

「チビってのはどうだ？」

俺の言葉に、振り向きもせず無反応なアスカ。論外ということか……？

「じゃ、じゃあ。ポチってのは？」

——その後、幾度となく「じゃあ」を繰り返したが、一度としてアスカが反応することはなかった。そして、そんな俺にアスカは一言。

【センス0】

だんだん、兄としての威厳が失われているような気がして、俺は閉口した。というか、そんなもの、元からあったのだろうか。

「……だったら、お前考えたの聞かせろよ」

俺の言葉に、アスカはチラッと俺を振り返った後、ノートにペンを走らせた。

【えんま大王】

「うおおい！」

思わず妹の背中に「なんでやねん」風に、ツツコミを入れてしまった。

「それが子犬につける名前か」

【世界最強】

「名前だけな。ってか、子犬に世界最強の名前をつけてどうする」

【飼わないとさばきが下りそうだから】

確かに……。だが、まずは愛くるしい名前で人々を惹きつけようと考えろ。子供として。と思っていると、アスカはまるで俺の心を読み取ったがごとく、ノートに書いた文字を俺に向けた。

【脅すほうが早い】

「……」

可愛いところがあるじゃないか。なんて思った俺が間違っていた……。

その後、ダンボールの正面にマジックペンで「えんま大王」と銘打たれた子犬は、アスカの思惑通り、通りすがりの気の弱そうな少年に拾われることとなった。

もちろん、そんなこんなで俺がタイムセールに間に合わなかったことは言うまでもない。が、珍しく買物にアスカが同行し、帰りにアスカはノートにペンを走らせ、それを俺に向けた。

【ありがとう】

「――あのな。そういうことはきちんと自分の口で言え」

俺と目が合うと、アスカは珍しく無表情な顔にかすかな表情を携え、俺から目を逸らした。それから、早足で先を歩いていく小さな後姿を見て、俺はまた考えを改める。

どうやら、あいつにも可愛いところはあるみたいだった。

十四話「ルール」

アスカとともに家に帰ると、なぜか家に姉貴と井上の姿が見当たらなかった。その代わりに、ダイニングのテーブルの上に置かれた書置きを見て、俺は今日何度目かのため息をついた。

【ちょっと、綾ちゃんとお買い物してくるわね。七時までには帰るから、その間に二階の空き部屋掃除しといてね。愛しい綾ちゃんのた・め・に（ハート） b yお姉さま】

まるで水を得た魚のように、井上との同居環境を着々と進めていく姉貴。この書置きをご機嫌で書く姉貴の横で、井上がなす術もなく立ち尽くしている光景が目につく。にしても、二階の空き部屋って、当然、今は物置と化しているあの開かずの間のことだよな……。

リビングの時計に目をやると、時刻はすでに六時になろうとしていた。猶予はあと一時間程度しかないということだ。

書置きの最後に書かれたハートマークは、どんな物騒な脅し文句も上回る威力を兼ね備えていた。おそらく、二人が帰ってくるまでに掃除を済ましていなければ、俺の命の灯火は阿修羅によりあっさり吹き消されることだろう。

足取り重く、俺は掃除機片手に、二階の開かずの間へ向かった。

長年放置されたままの開かずの間のドアを開けた途端、俺の戦意はあっさりと挫かれた。なんていえないか。分かりやすく言い換えれば、ケンカの相手にボブサツ○（古いか）を用意されたみたいな心境だ。

ある程度入れていた気合も、ドアを開けた途端すっ飛んだ。

にしても、家の中にこれだけ荒んだ空間が存在しているとは夢にも思わなかった。

整理整頓という言葉など入り込む余地のない、乱雑に詰め込まれたモノ。そのモノを分類すればかなりの数になるのだろうが、やるだけ気が滅入るだけなので止めておく。使われなくなったベッドやら本棚やら勉強机やらが目に入ってきた気がしたが、とりあえず気づかないふりをする。

足の踏み場もないほどとっ散らかった、もはやゴミにしか見えない物体の数々は、ほこりをかぶり、ただのゴミからワンランク上の何かに変貌を遂げている。仄かに香るかび臭さも、なんとも言いえない味を染み出している。人間も部屋も、長くほったらかされていると、腐ってしまうということか。

それにしても、この部屋を一時間以内に、たった一人で、人が住

めるように掃除しろと？

ああ、手に持つ近代兵器の掃除機がただの竹箒たけぼうきに見える。戦車に竹やりで突っ込む気分とはまさにこのことか。とにかく、今は姉貴の横っ面を一発張ってやりたい。

ここまでひどいと、下手に手をつけないほうがいいのではないか。そもそも、ここからモノ引き出したら、今度はどこに収納するんだって話だ。捨てるにしても、このご時世タダでポイってワケにもいかない。

などと理由をつけたところで、無駄なことは分かっている。あの阿修羅に俺の日本語は通じない。あいつの中で井上は間違いなく俺よりも置かれる階級は上なのだから。

とにかく、少しでも努力の跡を残しておかないと、本気で殺されてしまいかねない。俺はため息をつきつつ、開かずの間へ足を踏み入れた。

それから、きっかり一時間後「たっだいまゝ」とご機嫌な姉貴の声が家中に響き渡った。もちろん、そのすぐ後に「ほげえ！」という俺の情けない声が家中に響き渡ったことは言うまでもない。

「ところでさあ、これから綾ちゃんが同居する上で私考えたんだけどさ」

夕食後、そんなクソミソに縁起の悪いことを唐突に言い放った姉貴の言葉を、聞こえないふりをしてやり過ごし、俺は黙々とキッチンでの流しの前で洗い物の片付けを続けた。隣で、洗い物の片づけを手伝ってくれている井上が、俺の様子を伺ってくる。が、断じて俺は何も聞いてはいない。

すると、数秒後「無視すんな」という言葉とともに、何かが俺の後頭部に直撃し、俺は思わず頭を抱えその場にうずくまった。同時に、鈍い音を立ててテレビのリモコンが床に落っこちた。

「だ、大丈夫、綾瀬君」

すかさず井上が濡れていた手を、流しに供えられたタオルで拭いてから、しゃがみこみつっ俺の身を案じる。大丈夫、と返しはしたものの、しばらく立ち上がることはできなかった。

「で、私考えたんだけどさ」

ようやく俺が立ち上がると、リビングのソファで寛ぎつつテレビなんぞ見ている姉貴が、何事もなかったように言葉を発した。できるなら、テレビのリモコンを投げ返してやりたかったが、もちろん、俺がそんな暴挙に及ぶことはない。

同じくリビングのソファに座り、姉貴の横でテレビを眺めていたアスカは、チラッと俺のほうを見てから、心配のしの字の素振りも見せず、何事もなかったようにテレビに視線を戻した。

タイムセール棒に振ってまで「えんま大王」の飼い主探しに付き合ってたこともう忘れたのか、お前。って、この文面だけ見るとなんかものすごいな。えんま大王の飼い主探し。

「――考えたって、なにを」

洗い物をすべて乾燥機に収め一段落ついてから、俺はダイニングのテーブルの前に腰を下ろしつつ、声を返した。

阿修羅の考えⅡとばかりⅡ俺、という理不尽極まりない構図が完成しているだけに、できるならば聞きたくはなかったが。しかし、俺の心情など微塵も気にせず、姉貴は俺の向かいに腰を下ろす井上に笑いかけながら、声を返す。

「これから綾ちゃんが家で同居するに当たって、我が家のルールを改めて決めようと思ったんだけど、どう？ その方が、綾ちゃんも何かと気を遣わないで済むでしょ？」

いや、我が家にルールなんて気の利いたものがあるなら、是非とも今すぐ俺の基本的人権の尊重を主張する。ってか、我が家はお前の独裁だろうが。なに抜け抜けとルールなんてほざいてやがる。

「思っていると「なに。なんか文句でもあんの？」と詰め寄せられたので「ありません」と返すしかない。」

リビングからダイニングに入ってきた姉貴は、俺に睨みを利かせた後、井上の隣に腰掛けた。そして「どう、綾ちゃん？」などと俺に向けた顔とは百八十度違う優しい笑顔で井上に笑いかけている。

「は、はあ……」

「で、ルールって具体的にはどんなことだよ」

井上が返答に困っていたので、俺が代わりに聞き返す。すると、姉貴はあっさり一言言い放った。

「面倒なことはすべて一輝へ」

「お前、ルールって言葉知ってるか」

思わず本音がポロツと口から漏れた途端、至近距離からテーブルの上に置き直したテレビのリモコンが飛んできた。額にそれを浴び、痛みにうめく俺をよそに、姉貴は井上に笑いかける。

「ってわけで、綾ちゃん。あなたは、なーんにもなくていいからね」

「ちょ、ちょっと待ってください。お世話になるんですから、そういうわけにはいきません」

「えー、いいのよお。可愛いから」

いや、よくねえ。その発言の一パーセントでもいいから、俺にいたわりを向けろ。

テーブルに突つ伏し、下からアホみたいに潤んだ瞳で井上を見上げてゐる姉貴。そんなアホを相手に井上は生真面目にも居住まいを正し、言葉を返す。

「居候させてもらいますから、私にも何か手伝わせてください。それに、少しでも生活費も入れるつもりですから」

「えええ。必要ないってば」

「いや、そうしてもらえらなら——」

言いかけたところで、姉貴はすかさずテーブルの脇にそろえて置かれた調味料のビンの中から、一味唐辛子の入った小瓶のキャップを取り、それを俺の口の中に大量にひっかけた。

[illegible]

たまらず、椅子からひっくり返り、床の上を転げ回る俺。すぐにも水が欲しかったが、驚くほど体が言うことを利かず、のた打ち回るしかなかった。そして、その横で何事もないように井上に懐く姉貴。

「ねっ。綾ちゃんはなーんにも気にしないでいいんだから」

「あ、綾瀬く——。大変つ。すぐ、水を——」

「あ！ そうだ。これから、一緒にお風呂入らない？ ね？ そうしょ。きつまり」

[illegible]

「ま、待ってください。綾瀬く——」

「れっつ、入浴タ〜イム」

「カツカツカツカツカア~~~~!!」

井上を姉貴に連れて行かれ、どうしようもなくジッタンバツタンしている、リビングのソファでテレビを見ていたアスカが、そつと俺の前に立ち、ノートにペンを走らせ俺に向けた。

【救急車、呼ぶ？】

「み、み、み、み、み、ず、ずう……！」

【ミニズ？】

「ち、ち、ちが……！ み、水うう……！」

喉を掻き毟りながら必死に訴えると、アスカはようやくテクテクとキッチンの流れしへ向かった。そして、大鍋いっぱい水を注いだ。アスカは、躊躇なくそれを俺の顔面にぶちまけた。

「ぶはあ……！
ばはあ……！
か、から〜！」

何とか体の機能を取り戻し、流しに駆け出す俺。十分ほど浴びる

ように口の中を水で流していると、ようやく少しだけ落ち着いた。

それにしても、今回はマジで死ぬかと思った……。

「ん……？」

振り返ると、アスカがしゃがみこんでじっと俺のことは見つめていた。どうしたのかと問いかけようにも、いまだ口の中の感覚が麻痺してうまく声が出せない。

しばらく見つめ合う俺とアスカ。そして、アスカは抱いていたノートを手に持ち、無言でペンを走らせ俺に向けた。

【テレビより、こっち見てるほうが笑える】

いや、お前クスリとも笑ってねえだろ！？

——と、俺は心の中でツッコんだ。

十五話「おやすみ」

これ以上とばかりを受けするのはごめんだったので、水浸しになったダイニングの床を雑巾でふき取ってから、姉貴たちが風呂に入っている間に、俺はすぐに自分の部屋へ避難した。そういえば、井上が同居することになってから、のんびりと部屋で休む暇なんてなかったな、と思いつつ、部屋の明かりをつける。

一番に目に飛び込んでくる、放置されたままのゲロ模様のじゅうたん。そういえば、あれ以来掃除するのをすっかり忘れていた。

もはや、絨毯に染み付いたいびつな水玉模様は、一つのアートとして完成を見ている。仕方なく、俺はカラカラに干からびている固形物だけを取り除き、絨毯にこれでもかというほど消臭スプレーを振りかけておいた。

ベッドに倒れこむと、安物のパイプベッドがギシつといやな音を立てて軋んだ。最近布団のシーツを取り替える暇もなかったので、十何日か分の汚れをまとったシーツが肌に気持ち悪い。それなのに、目をつぶってみると最高級羽毛に包まれているような感覚の中で、心地いい眠気が俺を誘ってくる。

ああ。相当疲れてるな、これ……。

静かな部屋の中で、しばらくそのままどろんでいると、昨日からの一連の出来事がまるで走馬灯のように浮かんできた。そのどれもが、思い出ただけで気が滅入るようなものばかりだったのに、俺の心はまるで感情が切り離されてでもいるように少しも揺らぎはしなかった。

遠くから、記憶を垣間見ている感覚。まるで、普段テレビを眺めるみたいに、映像が頭の中に浮かんでくる。

もう、俺は眠ってしまったのだろうか。夢か現実かも分からない境界の中で、井上が泣きそうな顔をして、笑っている。

——あなたは、そこにいますか？

ためらいながら、それでも何かを求めて呟かれた声が、さまよう。その中に、あいつの幻影を映し出している自分がいる。

夢なら、醒めないで欲しい。現実なら、いつそのこと手を伸ばしてしまいたい。

そんなことをしても、あの日届かなかった俺の手に、求めたものが触れることは二度とはない——……。

映像が途切れ、俺の意識は暗闇に閉ざされた。

どうやら、そのまま眠り込んでいたらしい。気がつくと、明かりのついたままの部屋の中で、目覚まし時計はちょうど日付が変わって三分後を指し示していた。

目を瞬かせながら、体を起こす。汗でベタついた肌が気持ち悪かった。そういえば、まだ風呂に入っていなかったことを思い出し、着替えを手にして部屋を出る。

階下に下りると、電気を落として陰鬱としたリビングの中に人影を見つけて足を止めた。足音が聞こえたのだろう。俺がダイニングに入ると、その人物はゆっくりこちらを振り返った。

「……井上？」

暗がりの中、慣れてきた視界の中に映った人影は井上だった。暗がりの中で俺と目が合うと、井上は小さく俺の名前を呟いた。俺は、部屋の明かりのスイッチを探り、電気をつけた。

薄ピンク色を基調にした、無地のパジャマを身に着けた井上がまぶしように目を細めた。制服姿しか見たことのない井上がパジャマ姿で目の前に立っている光景に、何か現実味を感じないのは寝起き

のせいだろうか。

決まり悪そうに俺から目を逸らす井上を見て、まじまじと井上のパジャマ姿を眺めていた自分に気づく。似合うよ、なんて間抜けな台詞はセクハラにしかならないだろう。

「どうかしたのか？」

気を取り直して声を出すと、井上は逸らしていた視線をそっと俺に戻した。

「いや、電気もつけずになにしてるのかなと」

「……綾瀬君は？」

曖昧な微笑みを返し、俺の言葉を受け流す井上。それを見て、井上に今の質問に答える気がないことを察した俺は、とりあえず頭の中だけで、暗がりの中、リビングに突っ立ってなにをしていたのかを、勝手に頭の中で想像だけしておくことにした。そして、手に持っていた着替えを軽く上げてみせる。

「今から風呂入ろうと思って。部屋に戻ってから、すぐ寝ちゃったからな」

「そっか。あの、あれから大丈夫だった？」

「まだ、かすかに舌痺れてる」

そう言って顔をしかめると、井上はクスッと笑った。

「あのな。笑い事じゃないぞ。こっちは本気で生死の境をさ迷ったんだ。ってか、調味料で殺されてたまるか」

「ごめん。でも、そういうの、いいなって思っ」

「……は？」

「綾瀬君にとって日常に過ぎないことでも、私にとってはそうじゃないから。羨ましい……なんて言ったら、綾瀬君は怒るかな」

そう言いながら俺から目を逸らして、井上は笑った。

気のせいだろうか。そう思ってしまうほど、井上が寂しそうに微笑んだのはほんの少しの間だけだった。もう一度俺に目を戻した井上の瞳に、垣間見た感情を探す。でも、そこには照れくさそうに笑う井上しかいなかった。

「ごめんね。変なこと言っ」

「……いや、別に」

暗闇に閉ざされる前に見た映像が、俺の頭をよぎっていた。それでも、それはまるで何事もなかったかのように通り過ぎて、幻のようになくなっていく。

あの日見た夢と、今見ている現実。曖昧になっていく距離感。その媒体がなんであるのかは、もう自分でもとくに気づいている。でも、口に出すにはそれはあまりにも馬鹿げていた。

「じゃあ、私、そろそろ部屋に戻るね」

そう言って、井上は俺の横を通り過ぎた。

フワリと、俺の鼻先をシャンプーの甘い香りがくすぐった。甘い残り香を残して、井上が俺から離れていく。体中が、声にならない悲鳴を上げて、井上を引き止めたがる。

そう。馬鹿げている。でも、あの日から埋まることのない虚脱感と罪悪感は、そんな言葉だけでは止まらなかった。

階段を上がる井上をいつの間にか呼び止めていた。井上が階段の途中で足を止めて、後ろを振り返る。目が合って、俺は搾り出すように声を出した。

「……おやすみ」

俺の声に、井上は目を丸くしてから、控えめに微笑んだ。

「——おやすみ」

十六話「対面」

来る新入生親睦会前日のこの日、学校終わりに重雄が放った一言により、事態はクソ面倒くさい方向に流れた。

「明日に向けてみんなで作戦会議しねえ!？」

前回同様、その発言も却下されるだろうとタカをくくっていたのだが、メンバーの反応は意外にも意外なものだった。

「そうだね。ちょうど僕も今日そうしようと思っていたんだ」と言いつつ、眼鏡のブリッジ（レンズとレンズをつなぐ部分）を持ち上げ、眼鏡のズレを直しながら不敵に笑う男子学級委員。

「……まあ、そういうことなら付き合ったげるわっ」としぶしぶながらも同意する春日。

「私も今日部活ないから平気だけど」と俺のほうを伺いつつ返事する夏美。

「みんなが参加するなら……」と同じく俺を伺いつつ呟く井上。

「……」↑流れから「断る」と切り出せなくなり黙りこむ俺。

「よっし、決まりい! んじゃ、これからみんなで作戦会議しようぜえ! 場所は一輝ん家提供するぜ!」

——ってわけで、只今俺の部屋に上記のメンバーが勢揃いしているというわけだ。当然、その場で重雄を張り倒したことは言うまで

もない。

しかし、学校から俺の家が一番近く「ふざけんな」と抵抗を試みたところ春日にかみつかれた（もちろん、実際に噛まれたわけではないが）ので、しぶしぶ俺の家で作戦会議を行うことが強制的に決定された。

なぜに春日があればほどまで俺の家でと言い張ったのかは、その悲壮な顔を見れば容易に想像できたが、ツッコむのもいい加減面倒くさかったので、俺のほうから折れた。

下手をすれば井上と同居していることが知れてしまう危険性があることは承知しているが、重雄&春日のタッグは予想以上にウザかったのだ。悪ふざけ&悪気なき生真面目のミスマッチを俺にどう料理しろってんだ。第一、春日は女の子なので、張り倒すわけにもいかない。

とりあえず、人数分の座布団を用意したはいいが、さつきから「作戦会議」の言いだしっぺは部屋をうろうろしながら他人の部屋をくまなく漁っているし、春日は居住まいを正し正座しつつ、体中から殺気オーラを撒き散らしながら、明らかに姉貴が帰ってくるのを今か今かと待ちわびているし（姉貴は只今不在）、男子学級委員は相変わらずカバーかけた文庫本に目を落としているし、お前らやる気ないなら即帰れ、この野郎共。

ベッドに腰掛、やる気のまったくない三人を睨みつけていると「ね、ねえ。そろそろ明日のことについて話し合おうよ」と俺の心中にいち早く気づいた夏美が、作戦会議を始めるよう促した。

その発言に、井上も「そ、そうだね」と頷いて見せるが、春日と

男子学級委員は無反応。重雄に至っては俺の勉強机の引き出しからアルバムを引っ張り出し「うおおお！ 一輝のラブ&メモリーズ（アルバム）発見！」とか叫ぶ始末だ。

「はいはいはい、みんな注目！ 注目！」と全員の前でアルバムを開く重雄。の顔面に真空とび膝蹴りをぶち込みそれを阻止する。いい加減にしとけよ、お前。

とりあえず、重雄の死体の置き場所がなかったので、ベッドに転がしておく。がしかし、部屋の真ん中に放り出されたアルバムを目にした夏美が「うわあ、懐かしい」とアルバムのページをめくり、井上も控えめにその横でアルバムを覗いている。

ああ、この瞬間この場にいる全員が、本来の目的を忘れてしまったというわけだ。お前ら、みんなとつとと帰れ。

アルバムをめくり、あれやこれやと井上にいらん解説をいれる夏美。その度に控えめに反応を返す井上。アルバムに収められた思い出のほとんどを共有しているだけに、夏美の思いつき出話が止まることはない。そして、そうこうしているうちに、またクソ面倒くさい予感が、威勢良く俺の耳に響いてきた。

「たっただいまー」

階下から響いてくる姉貴の声。その声に、俺はついつと春日に視線を向けた。

って、うわあ……。

血走った眼をくわ^{まなこ}っと見開いた春日が、背後に見たことのないお

ぞましい幻獣（殺気で作られたイメージ）を纏まといながらゆらりと立ち上がっていた。

「お、おい。春日……」

俺の呼びかけに春日は無反応でゆらゆらと音もなく不気味に歩き出し、俺の前を素通りした。そして、おしゃべりに夢中になっていた夏美と井上も尋常でない春日の様子に気づき、啞然としながら春日に道を開ける。男子学級委員は未だに文庫本に目を落とし、春日の異変に気づいていない。重雄は姉貴の声に、白目をむきながらもピクリと反応を示していた。

黙って部屋から出て行く春日を、黙って見送る俺たち。今止めに入りでもしたら、こっちにとぼっちりが来るのは目に見えている。夏美と井上が困惑した顔で俺を見ていたが、俺は堂々と気づかないふりをしつつ、部屋の窓を開けた。

誰も、部屋のドアを開ける勇氣も好奇心も持つものはいなかった。

沈黙に包まれた部屋の中で聞き耳を立てていると、トントントンと姉貴が階段を上がってくる音が聞こえてきた。そして、その数秒後「あら。もしかして一輝の友達？」とドア一枚隔てた向こう側から、にこやかな姉貴の声が流れてくる。

どうやら、玄関に並ぶ複数の靴から察していたようだ。その声に、普段の独裁振りは微塵もうかがえない。見事な猫かぶりだ。しかし、背後に物騒な幻獣飼ってるそいつが俺の友達に見えるのか、お前？

「綾瀬君の……お姉さんですか？」

抑揚のない春日の声が流れてくる。まさに今、ターゲットロックがなされているのだろう。が、今お前の前にいる女は、ターゲットにしている種的女では決してない。

「ええ。初めまして。一輝の姉の綾瀬みうです。よろしくね」

おそらく、穏やかな微笑を携え、春日に手を差し出し握手を求めているのだろう。が、次の瞬間、春日の怒鳴り声が部屋の中の空気をまでびりびりと振動させた。

「ここで会ったが百年目ええええ!!」

「——と、止めなくていいの、一輝？」

重い空気を押し破って、夏美が声を出す。部屋の外ではドッタンバツタンと人が争う騒音が響き「覚悟お!」とか「おのれ!」とか、終いには「いやあああ!」とあくまで春日だけの悲鳴が上がっていた。

「お前も姉貴の性格知ってるだろ」

俺の言葉に、夏美は閉口する。そして、しばらくして部屋の外の騒音はピタリと止んだ。

——が……。

「……あ……あん……」

「……」

「……あ……い、いやあ……あん」

代わりに、なにやら悩ましげな春日の声が流れてきた。

「ちょ……や、やめ……ひあ……そこ……や……だめ……え……あ……」

あの春日からはとても想像のつかない甘美なあえぎ声に、部屋の中はとてつもない気まずさに包まれた。部屋の外でなにが起こっているのかは想像に難くないが、あまりの気まずさに誰も口を開くものはいない。そして、なおも流れてくる春日のあえぎ声に、ちゃっかり男子学級委員も文庫本を読む振りしながら、耳を赤くしていた。

だんだん、こいつのキャラがつかめてきたな。そして、さっきからピクピクと反応を示していた重雄がついに復活して、起き上がった。

「おおおう！ パラダイス！ ファンタスティック！ ラブリー！」

わけ分からんことを口走りながら、重雄が慌しく部屋を出て行く。アホかお前、と今更ツツこむのもアホらしい。が、こいつのおかげで何とか気まずい沈黙から抜け出せたので、いいか。

しかし、ドアの向こう側で展開されていた光景に、またもや俺たちは言葉を失うことになった。

春日を後ろから羽交い絞めにした姉貴が、器用に両手を春日の体に這わせ、春日の体を堪能しているのだ。こんなプロレス技があるのかどうかは知らないが、複雑に背後から関節を絡めとり、相手の

動きを封じつつ、自由の利く両手で春日の胸を揉んでいる姉貴。

春日の耳元で卑猥な言葉を呟きながら、その首筋に舌を這わせ、右手は胸に添えたまま、左手がスカートの中に――これ以上はとも解説不能だ。

二人とも制服姿で、着ているブラウスは下着が見えるギリギリの線までだけいていた。春日は悔しそうに歯軋りしながらも、姉貴が責めるたびに、女の顔になりあえぎ声を発する。って、やばいやばいやばい、これマジ洒落しゃれにならないから。

「み、見ちゃ駄目え！」

その光景に言葉を失って見入っていた夏美が四人の中で一番早く我に返り、赤い顔を俺と男子学級委員に向けて睨んでくる。俺は慌ててそこから目を逸らし、手から文庫本を取りこぼしつつその光景を凝視していた男子学級委員は「ぼ、僕は別に……」と滝のように汗を流しながら、無関心を取り繕った。

そして、真っ先に部屋を飛び出した重雄はというと、二人のすぐ脇にしゃがみこみ、ニタニタと下卑た顔でその光景の観客になっていた。が。

「キー君のバカ！」

部屋の脇に置かれた鞆（教科書入り）を振り回し、それを見事重雄の後頭部にぶち込む夏美。重雄はその衝撃に「ぐへえ！」と言いつつも、しめたといわんばかりに、衝撃に押される反動に逆らってもせず、姉貴と春日に向かってそのままダイブを決めた。

「夢の桃色桃源ぎよ！」

が、夢の桃色桃源郷とやらにたどり着く前に、春日から技を解いた姉貴が重雄をバックドロップで迎撃。重雄は容赦なく床に頭を叩きつけられ、人柱となった。

「ったくう……。せつかくいいとこだったのに……」

「お、お久しぶりです……。お姉……。さ……。ま……」

それだけ言って、重雄は事切れた。当然、その声は姉貴の耳には届いていない。そして、体の自由を取り戻した春日はしくしくと泣きながら、夏美にすがり付いていた。やはり、止めてやるべきだったか……。

「うふ……。久しぶりねえ、夏美ちゃん」

そして、夏美の元に歩み寄り、意味ありげに口元に笑みを浮かべる姉貴。

「お、お久しぶりです……」

「んもう……。夏美ちゃんったら、ちっとも家に遊びに来てくれな
いんだからあ」

「は、はあ……」

いや、お前みたいな危険な生物がいたらハンターも近寄らんわ。
と俺は心の中で呟いた。

「それにしても、夏美ちゃん。あなた、また可愛くなったわねえ」

そう言って、かがみこみ夏美の頬をなでる姉貴。思わず夏美は春日を抱えたまま、後ずさりした。が、姉貴は夏美の頬を撫でた指をペロリと舐めながら「ふふ」と不気味に笑う。

「キレイなもち肌……。食べちゃいたいわ……」

完璧にイッちまった目で、夏美を見つめる姉貴。

その瞬間、確実に五度ほど部屋の気温が低下した。

別の意味の凄みに、誰一人としてその場から動ける者はいなかった。が、固まっている俺たちを見渡すと、姉貴は「ぷ」と吹き出してから、不意に一人で笑い出した。もちろん、この状況で笑えるような人間はこいつぐらいのものだ。

「やーねえ。冗談よ。じょ・う・だ・ん（ハート）」

いや、あんな光景見せられた後にそんなこと言われても——と誰もが心の中で思ったことだろう。が、悲しいかな、俺たちにはそれを冗談で済ますことしかなく術がなかった。許せ、春日……。

「で・も。続きがしたかったらいつでも歓迎するわよ」

夏美の胸にすがりつきながらしくしくと泣いている春日の耳元でそう囁く姉貴。その直後、春日は「う、うわああああん！」と泣きながら、自分の鞆を引っつかんで部屋から出て行ってしまった。

「——で？ あれは一体なんだったわけ？」

玄関を出て行く春日を一瞥しながら、姉貴が俺に目を向ける。困った。一体なんて説明したらいいんだ。ってか、俺たち明日の作戦会議するために集まってんだよね？

その後、男子学級委員の助けにより、姉貴にすべての事情が伝えられた。

ちなみに、事前に姉貴に聞いて確かめていることだが、二年前の新入生親睦会で、春日の姉を姉貴が病院送りにしたことは事実らしい。が、姉貴のその強さに惚れた春日の姉は今では忠実な姉貴の下僕になっているそうなの……。

なんだそりゃ、と俺が心の中でツツコんだことは言うまでもない。

十七話「作戦会議」

「ああ、新入生親睦会。そういえばあったわねえ、そんなのも」

ことの経緯を説明すると、姉貴は興味なさげにそう声を出し、リビングのソファに腰を下ろした。あのドタバタの後、春日を欠いた俺たちは、重雄を除き全員リビングに集まっていた。いい機会だから、新入生親睦会優勝経験をしている姉貴に、経験談でも聞かせてもらおうという話になったわけだ。

しかし、ようやく本来の目的に取り掛かったはいいが、すでにメンバーの二人は欠員している。普段なら、もう復活してきてもいい頃合いなのだが、重雄は未だ二階の床で人柱になっていた。……姉貴、恐るべし。

「で、あんたたちも参加するって？」

ソファの背に寄りかかりながら、絨毯の上に並んで腰を下ろす俺たちを見渡しながら声を出す姉貴。全員が地べたに座っている（座布団は敷いているが）というのに、一人だけ堂々となんの気兼ねもなくソファに座り込むあたり、猫かぶりも止めたらしい。まあ、こいつが猫を被るのは、相手が初対面の女性限定というわけだ。

「ああ。一応、ここにいるメンバーは全員強制参加だけだな」

姉貴の言葉に、俺は強制的部分を強調して返事を返す。

「ふうん。で、リーダーは誰？」

「……俺」

「駄目じゃん」

「ほっとけ」

こっちだって、好きでリーダーになったわけじゃねえんだよ。

「あの。二年前に新入生親睦会にクラスから単身で出場して優勝をさらった伝説の人物というのは、綾瀬君のお姉さんのことですよね」

俺の横で、男子学級委員が話の腰を戻すように声を出した。

「ん？ ああ。そだけど」

そして、こともなげに相槌を打つ姉貴。その返答の凄まじさを本人はまったく理解していない。

「どうやって優勝したのか、その辺のことを聞かせてもらえませんか」

「どうって、かかってくる奴みんなプロレス技で沈めただけよ。話してもあんたらの参考にはなんないでしょ」

「じゃあ、途中で教員は止めに入ったりはしましたか？」

「どうだろ。少なくとも私が止めに入られたことは一度もなかったけど」

……いや、そこがまずおかしいだろ。会の必要性自体も謎だが。

しかし、俺の疑問をよそに、男子学級委員は淡々と姉貴に新入生親睦会の様相を事細かに聞きだしていた。もちろん、そのあまりの内容に男子学級委員以外の面子が引いたことは言うまでもない。

そして、姉貴がソファから腰を上げる頃には、謎に包まれていた新入生親睦会というものの、真の姿が明らかになっていた。俺の中で担任教師に殺意が芽生えた瞬間でもある。

「まあ、あんたらが勝とうが負けようがどっちでもいいけど、男子共は盾になって綾ちゃんと夏美ちゃんを死んでも守りなさいよ。もし二人に傷一つでもついたら承知しないからね」

そう言い残し、姉貴はリビングから出ていった。

「ね、ねえ。なんだか、みうさん、井上さんのこと知ってるみたいじゃなかった？」

姉貴がリビングを出て行くのを見送った後、夏美が困惑気味な表情をして俺に声をかけてきた。その台詞に俺と井上はギクリとして目を見合わせた。

「だって、自己紹介もしてなかったのに、井上さんの名前――」

「あー！ それはあれだ、ほら！ 井上が転入してきた日に俺授業サボっただろ！ そのこと気にしてその日わざわざうちに来てくれたんだ井上は！ な、な！」

「え！ あ……そ、そう！ そのとき、綾瀬君のお姉さんと一度会ってて！」

「そうそう！　だから、ぜんぜんおかしくも怪しくもなんともないわけだ！」

お互い目配せをしつつ、そうまくし立てる俺と井上。そして、そんな俺たちを夏美は白い目で眺めながら一言。

「――……ふん」

――うわあ。無茶苦茶疑ってるし……。つか、とりあえず嘘はついてないのだが。

「そんなことより、そろそろ本題について話し合いたいんだけどいいかな」

俺たちのやり取りを冷めた目で見ていた男子学級委員が、眼鏡のブリッジを持ち上げ、抑揚のない声でそう切り出す。今まで散々文庫本読んでやる気無かったくせに、てめえこの野郎、と言ってやりたいところだったが、ここは話がうまく逸らせたので黙っておいてやるか。

「ああ、悪い……。で？　なんか、いい考えでもあるのか。棄権するとか」

「とりあえず、僕が把握していた新人生親睦会の内容と、たった今得たばかりの情報から、改めて僕たちが参加するこの会のシステムを見直してみようか」

いや、さらっと無視かこの野郎。

「まず、一つ。この新入生親睦会の根底、つまり、その目的は、新入生同士がクラス一丸となり、お互いの親睦を深めること――」

「いや、六人選抜して駆り出されてる時点でクラス一丸もクソもないだろ。ってか、学年で二泊三日ぐらいキャンプ張ったほうがよっぽど親睦深まるし、普通はどこもそんなもんだ」

「――と言うのは、表向きの看板文句に過ぎない」

とことん無視ってか。

そして、男子学級委員はここで一旦間を取ってから、厳かに「その新の目的は――」とまたもやために入った。

あまりに引っ張られるものだから、俺と井上、夏美はぐくりと息を呑み男子学級委員の言葉を待った。そんな俺たちを一瞥し、男子学級委員は愉快気に口元に笑みを浮かべ「その新の目的は」ともう一度繰り返す。

「そ、その新の……目的は――？」

「校長を楽しませること」

俺は何も言わず、とりあえず男子学級委員の襟首を掴みあげた。が、慌てて止めに入った夏美と井上に免じてその手を離してやる。しかし、男子学級委員はあくまで愉快気だ。

ってか、お前はそういうクソムカツクことを愉快気に語るな。

「そ、それって冗談だよな？」

男子学級委員の発言に、たまらずそう声を出す夏美。が、男子学級委員はクツクツと笑いながら「いや」と声を出す。だから、なにがおかしいんだ、お前。

「これは完全に校長の趣味そのものだよ。弱肉強食。それが、ウチの校長の座右の銘さ」

「……なんつー傍迷惑なモットーだ」

「弱肉強食。だからこそ、勝ったチームには特権を、そして負けたチームには罰を与える。しかし、それこそが生徒たちを熱狂させる理由なのさ」

「……特権？ ……罰？」

男子学級委員の言葉に、井上が不安そうに口を開く。

「そう。優勝チームは教室に備えられたエアコン、それに他の全ての移動教室のエアコンを自由に使える権限を与えられ、なおかつ掃除当番の一切を免除。逆に最下位のチームは、教室のエアコンはもちろん、他の移動教室でも一切エアコンは使用不能。しかも、優勝チームの掃除当番を一手に押し付けられるのさ。もちろん、順位により特権も罰も変わってくる」

「……マジかよ」

「マジさ。だからこそ、やるからには僕たちも勝ちに行く」

格好のいい台詞を吐きつつ、格好をつけて眼鏡のブリッジを持ち

上げる男子学級委員。眼鏡の奥からのぞく知的なやや切れ長のその目には、力強い確固たる自信が備わっていた。

「で、でも、この面子だぞ……？」

そう言っつて、俺は男子学級委員を伺いつつ、井上と夏美に目を向けた。

「確かに。この面子ではまともに行けばどんなにがんばっても優勝は難しい」

……いや「この面子」の中にはお前も入ってること忘れんなよ。と、俺は心の中で呟いた。

「――が、弱者である僕たちが強者に勝ちうる手立てが、たった一つだけあるのさ」

「な、なんだよ……それ」

俺が困惑気味に聞き返すと、男子学級委員は不敵に微笑みながら一言。

「それは……――策」

「さ、策？」

「そう。実力で叶わないなら、策略でねじ伏せる。すでに、僕の中では優勝への方程式が組みあがっている」

「……」

こいつのこの自信は一体どこから湧いてくるんだ。

「さて。じゃあ、そろそろ、新入生親睦会のシステムを見直してみようか。分かりやすいように、分かっていることをルールと考えて、一つ一つ上げていこう。」

1、クラスごとに一チーム六人（男女三人ずつ）を選抜しバッチを奪い合う（ただし、チームメンバーは最大六人であり、必ずしも六人揃える必要はない。言い換えれば、一人でも参加可能）。

2、バッチは奪われても三十秒以内に取り戻すことができればセーフ。

3、勝敗に関わるのは、チームリーダーの持つバッチのみ。ただし、バッチを奪われた者はその時点で失格となり、ゲームから外される。チームリーダーのバッチが奪われた時点で、チームメンバーは全員失格（メンバーに配布されるバッチは、全て同じものとする）。

4、サバイバル重視であるため、順位は最後まで残っていた順で決定される。奪ったバッチの数は順位の優劣に左右されない。

5、バッチをどう奪うかは各自の自由。その辺に制約はない。教師もまったく止めには入らない無法状態。

6、学校の敷地内全てを使って行われる。原則、校外に出た時点で失格となる。

7、時間無制限。全学年、その間授業免除。

8、参加しない生徒は、体育館に集合し、巨大スクリーンで観戦。
9、参加メンバーに現状が伝わるよう、校内放送で実況あり。カ
メラマンは、原則一チームにつき一人つく。

10、ドッキリあり。

——と、まあ、こんなところだね」

新入生親睦会の全容を明らかにした男子学級委員が、そこまで言
って息をつく。しかし、校長の趣味と言い切ったこの会をここまで
真面目に分析するのもバカバカしい。ってか、最後のドッキリって
なんだ。

「いや、最後のドッキリってのはなんだ」

「さあ。その情報は曖昧なんだ。ちなみに、前回のドッキリは教
員チームの飛び入り参加、だったらしいけどね」

「……アホか」

「そして、そのまま教員チームが優勝をかつさらい、大顰蹙だいひんしよくだった
そう。だから、今回はそれはないだろうね」

……なんだそりゃ。

「——さて。じゃあ、他クラスの参加メンバーについて話しておこ
うか。おそらく、どこも運動部のエースクラスを投入してくるだろ
うが、あいにくとウチにも一人、運動部のエースクラスは存在する」

そう言って、男子学級委員はついつと夏美に目を向けた。

「わ、私？」

「そう。柊^{ひいらぎ}さん。君は中学時代、薙刀部^{なぎなた}に在籍している。そして、全国優勝三連覇の偉業を果たし、ウチの薙刀部^{なぎなた}のホープとして活躍を期待されている」

「は、はあ……」

「この会は運動部の中でも、特に武道系に所属している者が絶対有利だ。調べたところ、運動部のエースクラスは、どこのクラスも多くて二人いるかいなか。」

柊さんの戦闘力。木村君の異常なタフネス。綾瀬君の人を人とも思わぬ暴虐性。それらを考慮すれば、ウチも何とか張り合えるだろう」

男子学級委員の発言に、夏美が「その言い方やめてよ」と言っ顔をしかめた。が、確かに男子学級委員の言い分にも一理ある。俺の暴虐性が重雄にしか向かわない役立たずなものであることは置いといて。

「――が、残念ながら新入生の中に変り種が三人いてね。三人とも違うクラスに別れているのがせめてもの救いだが、間違いなくその三人が所属している三クラスが優勝候補筆頭だ。まともにぶつかれば、僕たちに勝ち目はない」

男子学級委員がそう言って、また不敵に笑う。ああ、いい加減こいつのこの思わせぶりな態度にも飽きてきた。ってか、かなりウザ

イ。というわけで、俺はため息ひとつついてから「――で？」と声を出した。

「なにか策があるんだろ。聞かせろよ、優勝への方程式ってやつ」

俺の言葉に、男子学級委員がいちいちもったいぶって、口を開く。

――そして、俺たちの長い一日が幕を開けることとなった……。

十八話「開戦」

新入生親睦会当日、俺の心境を象徴するような生憎の雨模様な天気の中、もしかしてこのイベントは雨天中止になるのでは、なんて淡い期待は学校にたどり着いた時点で吹き飛ばされることとなった。

昨日までは用意されていなかったはずの「第23回新入生親睦会」と書かれた垂れ幕がいつの間にか、正門に直面する校舎の三階に堂々と吊るされているのを見て、まずは出鼻を挫かれた。その後、自分の教室にたどり着くまでの道筋で、いくつかお祭り騒ぎの教室を通過し、中止はないな、と悟りを開く。

廊下を歩いていると、すれ違い様知らない生徒に「よ、リーダー！」「といちいちはやし立てられる俺の身にもなってくれ。ぎやはは、なんて指差されて馬鹿笑いされた日には、マジで自分を抑える自信はない。何人か本気でぶん殴って、危うく乱闘騒ぎになりかけた。俺としては、そのまま乱闘↓失格処分にして欲しかったのだが、どうも現実はい通りにはいかないらしい。

そして、教室にたどり着くとクラスメイト全員の痛い視線が俺に集中した。あわや乱闘騒ぎを巻き起こした張本人の心境を察し、誰も俺に声をかけてくる者はいなかった。

「いよーす、一輝！」

いや、一人いた。バカが。

「やるねえ、一輝。いきなり乱闘巻き起こすなんてやる気満々じゃん。いよっ！ リーダー！」

「……」

受け答えるのも面倒くさかったので、俺は無言で自分の席に着いた。横では、先に学校に着いていた井上が（登校時間をずらしている）俺に心配そうな視線をよこしてきたが、心配ないと軽く笑ってみせる。

が、後ろでやかましい重雄の顔面に裏拳をぶち込みながらとあつては、あまり効果はなかったようだ。そして、井上の後ろの席でいつもの元気というか覇気を失くした春日が（春日は女子の出席番号2番なので席は井上の後ろ）、浮かない表情でうつむきがちに席についている姿が目に入る。

やはり、昨日の出来事が尾を引いているようだ。もしかしたら、今日は休むかとも思っていたのだが「新入生親睦会優勝」をあれだけ公言しているだけに、やはりそうもいかないらしい。しかし、それを成し得たとしても、春日の姉はすでに姉貴の下僕だ。どうして、そこまでして春日がこの新入生親睦会にこだわるのかが理解できない。

まさか、あのとき俺に訴えた台詞が本気だったということもあるまい。

ってか、今春日を説得できたら、俺が優勝目指して無理することもないんじゃないか。とも思ったが、春日を見ているととてもそんな気にはなれなかった。というか、なんて声かければいいかも分からない。しかし、こんな状態で春日は会に参加できるのか。

その後、しばらくしてホームルームの時間となり、山田が教室に

入ってきた。新入生親睦会の簡単なルールを説明した後、参加メンバーにバッチを配布し、参加メンバー以外の生徒に体育館に集合するように指示を出してから、さっさと教室を後にする山田。これでもかというほどガンつけてやったのだが、野郎一度も俺の方に見向きもしなかった。畜生。

「なんだか、何の変哲もないバッチだね」

配られたバッチを胸に着けつつ、夏美がそう声を出す。クラスメイトが出払い、閑散とした教室の中で、俺たち参加メンバーは教壇の前に集まっていた。どうやら、各チーム参加メンバーは開始時間まで教室で待たされ、そのまま教室からスタートするらしい。各クラス、開始時間が五分ずつずらされるらしく、俺たちのクラスは一番最後の出走権を獲得している（各担任のじゃんけんで順番を決めたらしい）。

当然、スタートが後になるほど狙い撃ちされやすいのでこれは絶対不利だ。あの、クソ担任め。

「しかし、この何の変哲もないバッチはいわゆる僕たちの命だ。左胸につけるよう義務付けられているのも、心臓を意識しているんだろう」

夏美の言葉に、男子学級委員が返事を返す。そして、俺は自分の左胸につけた「新入生親睦会参加メンバー」と文字の書かれた、半径五センチほどの円形バッチに手を添えた。心臓代わりというにはあまりにもチンケな代物だが、メンバー全員分の命運がこのバッチに懸かっている。なんて、気が重いんだ。今すぐ棄権したい。

ちらと春日のほうを伺うと、春日は相変わらず浮かない顔をして

黙り込んでいた。朝からまだ一度も話していなかったのも、とりあえず声をかけようとする、ピンポンパンとスピーカーから全校放送が教室の中に流れてきた。

「イヤッホ~~~~~!!」

いきなりのハイテンションな第一声が、静かな朝の空気を突き破る。それから、ツッコむ暇もなく、なぞの男の声が立て続けに響き渡った。

「皆さん、おはようございます！ 只今時刻は~~~~九時ジャスト！
うほう！ あと十分！ 十分後にはみんなが待ちに待った新入生親睦会始まるよっほっほっほい！ おおっとお！ 自己紹介が遅れました！ 私、これから実況兼解説を担当させてもらいます、放送部部长、だいせいびせい大声美声と申します！ ちなみに、苗字は大声だよ~~~~よろしく！ つほう！ さてさてさて！ 時間も刻一刻と迫ってきてまいりました！ 早速ですが、これから各クラスの参加メンバープロフィールを紹介しちゃうよっほい！ 耳いかっぽじつてよ~~~~ききやがれい！」

「——さて。じゃあ、僕たちも改めて最終打ち合わせを始めるとしようか。あと十分で開始といっても、僕たちがスタートするのは最後だから、実質まだ四十分時間はある」

冷静な男子学級委員に先手を取られ、ツッコむタイミングを逃してしまった俺は、仕方なく「ああ」と返事を返した。その間もやかましい放送は続いている。ってか、明らかな近所迷惑だろ、これ。いいのか。

「まずは一年A組！ このクラスこそ優勝候補大本命！ リーダー

を宣言して憚^{はば}らないその太い態度もご納得う！ なんとおお！ 二年前、单身、新入生親睦会に乗り込み優勝を搔^{かっさ}つ攫^らった、そう！あの、伝説のムテキングの弟がこのクラスからエントリイイイイイやつほうう！ リーダーとして参・戦だああああ！ やはり！ やはりやはりやはり、血は争えないということかあ！ おおとお！ ここで、急遽最新情報が入ってまいりましたあ！ なんと、その噂の弟が早くも今朝大乱闘！ 十人も生徒を血の海に沈め、なおも物足りない、この新入生親睦会にその飢えに飢えた危険な牙を突き立てる気満々だあああああ！ ブーブーブー！ デンジャーデンジャー！ 警告警告！ その男危険につき！ 命が惜しけりや身包み置いて逃げ出しなあああ！ その名もおお！ あ・や・せえええか・ず・きいいいいつやつはあ！ 今世紀最強のガキが今！ 満を持して他五人のメンバーを率いて登場だあああああああああああ！ こいつは、マジやばいぜええええええー！ えゴホッ！ ゲホッ！ ん、ん！ 失敬……」

「――さて、聞いてのとおり情報はかなり脚色されているが」

「いや、待たんかい、コラ」

あっさりスルーしようとする男子学級委員の肩をむんずと掴み引き止め、声を出す。引きつった声を出す俺に、井上と夏美が同情のまなざしを向けていた。

「今のくそふざけた放送は一体なんだ」

「そんなこと僕に言われても困るな。おそらく、会を盛り上げるため情報を誇張してるんだろうが、こっちにとっては、そのほうが有利じゃないか。これで相手が少しでも物怖じしてくればもうけものだ」

「そうだな。その代わり、今後俺は周りから危険人物扱いされ続けるわけだ」

「そう悲観することもないさ。人の噂も七十五日と言うしね」

このヤロウ、他人事だと思って抜け抜けと。が、男子学級委員を責めても何もらないの、俺は舌打ちしてから男子学級委員の肩から手を離れた。畜生。このやり場のない怒りは一体誰にぶつけばいいんだ。

「だはは！ まあ、元気出せカズギゃ！」

こいつにぶつけた。

「さて。いいかい、みんな」

校内放送を無視して、男子学級委員がメンバーに声をかける。リーダー気取りなその態度がなんかむかつく。

「昨日話した通り、僕たちはこれから二人一組で行動する」

「いやちょっと待て。昨日、春日いなかったからまだ話伝わってないだろ」

重雄も気絶していたが、まあ、こいつは知っても知らなくても同じだ。

「いや、昨日のうちに僕が春日さんの家まで行って話してある。抜かりはないさ」

「……お前には血も涙もないのか」

「冷血と言ってもらいたいね」

そう言っ、男子学級委員はにやりと笑った。なるほど、それがお前の狙ってるキャラ位置か。しかし、勝利への方程式とやらを聞いた今、お前のキャラはどんなにがんばってもむつつりスケベだ。

「さて。では話を戻すよ。再確認だ。昨日も言ったが、僕たちはこれから二人一組で行動する。六人全員で固まっていたんじゃ思うように動けないし、迅速な行動も取れないからね。ペアは、僕、柊さん。木村君、井上さん。綾瀬君、春日さんだ。男女で組むのはB組の如月きさらぎ一心対策。しつこく言うが、純粋な強さを取るなら、間違いなく彼が全クラス参加メンバー中最強だ。彼に出会ってしまったら、女子は躊躇しないでくれ。ちなみに、B組のリーダーも彼だろうね。C組のリーダーは、おそらく巫弥生かんなぎやよい。彼女も要注意だ。彼女の特殊能力については昨日話した通り。

D組のリーダーは、おそらく綾波妖奈あやなみ。彼女も要注意。以下同文。E、F、G組も一筋縄ではないが、B、C、D組の曲者三人ほどじゃない。さて、何か質問は？」

「夏美をそばにおいて己の身を守ろうという魂胆が見え隠れするのは俺の気のせいかな？」

俺の言葉に、男子学級委員はしれっと「気のせいだ」と言っ、けた。

「嘘つけ！ リーダーのバッチ奪われたらその時点で負けなんだから！ だったら、ボディガードは俺につけろ！」

「ちよ……その言い方止めてよ、一輝！」

俺の不用意な発言に、夏美が抗議の声を上げる。と、開始前からまとまらないそんな俺たちメンバーをよそに、いよいよ新入生親睦会開始の時間となったらしい。スピーカーから流れてくるやかましい実況が、ハイテンションで第一走者であるD組の出走を伝えていた。

とにかく、新入生親睦会の火蓋がいよいよきって落とされることとなった。

十九話「理由」

いよいよ、俺達のクラスの出走まで10分前と差し迫られたこの状況で、各々のメンバーはそれぞれ、思い思いにその時を待っていた。

井上と夏美は緊張した面持ちで大人しく席につき、男子学級委員はこの期に及んで落ち着き払い文庫本などを広げ、重雄は一人のことんはっちゃけ、相変わらず春日は元氣なく席に座り俯いている。この状況で、リーダーが取るべき行動はいかなるものか。とにかく、一人無駄にうつとうしい重雄の顔面に肘打ちをかまし、俺は春日の元へ歩み寄った。

説得……否。ここまで来たからには、このバカげたゲームに参加する「理由」が欲しいと思うだけ、俺は前向きでいる。そもそも、このままやる気のない春日を放置して、開始直後に潔くバッチを奪われても、誰も文句は言うまい。勝利についてくる餌に目の色を変えたクラスメイトの文句なども、受け付ける筋合いはこっちにはないのだ。

ただ、馬鹿みたいに先頭切ってこのイベントに燃やしていたこいつの情熱の真偽を知る権利は俺にはあると勝手に自負する。なんといっても、俺はリーダーだ。この後、集団リンチに遭う可能性も大ありだ。

とにかく、ネタはあがっているのだ。この命がけのイベントに参加する動機が、すでに二年も前に姉貴の下僕と化した実の姉の敵討ちなどと、バカげた話誰が信じる。

「……おい、春日。お前はいつまで、そうやって塞ぎ込んでる気だ」

春日の前の席に腰を下ろし、俺は春日の座る机の上に片腕を乗せ、言葉を発する。予想通り、顔を上げた春日は今にも噛みつかんばかりに俺を睨んでくるが、全く怖くも何ともない。

「まあ、昨日姉貴がお前にしでかしたことは悪かったと思うよ。でも、お前も今更これはないんじゃないか」

「……何よ」

「分かんないのか。無責任だって言ってるだよ。あんなだけ、敵討ちだなんだって騒いどいてよ」

「ち、ちょっと、一輝……」

不穏な空気に、すかさず夏美が俺を制止に来るが、俺は夏美を無視して続ける。

「お前の陰気な面見てたら腹立つんだよ。大体お前の姉貴は好きでウチのバカの下僕やってんだろ。無念を晴らすって、そもそも負けて本望なんじゃねえか。お前の言動意味不明だぞ、バカじゃねえの？」

「あんたなんか……分かるもんか……!」

腹の底にしまい込んでいたものを吐き出すように、苦渋の声が春日から漏れる。その表情は、良くも悪くも常に威勢のいい俺の知る春日にはとても似合わないものだった。だから、俺は言ってやる。

「分からねえよ。馬鹿の考えることなんか知るか」

「うるさい！ 黙れ！ お前なんか死んじゃえっ！」

「いや、誰が死ぬか」

「お姉ちゃんはねえっ！」

勢いよく椅子から立ち上がった春日の後ろで、理不尽に跳ね付けられた椅子がひっくり返って甲高い音を立てる。耳障りなその音を合図に破裂した春日の気持ちがそれで晴れるなら、掴みかかれようと俺は文句は言うまい。が、俺の前にとっさに割って入ってきた夏美に制止され、春日の手は虚空を掴むばかりだった。

「お姉ちゃんは私の憧れだった！ 勉強も、運動も、何やっても私は駄目なのっ！ 勝てないのっ！ そんな自分が嫌だったからっ！ だから、お姉ちゃんの優勝できなかったこの会で、私は優勝したかったっ！ 一個でもいいから、お姉ちゃんに勝てるものが……胸を張っていいんだって思えるものが欲しかったから！ それのどこが悪いのよおっ！」

ぼろぼろと大粒の涙をこぼしながら、それでも止まない感情を、春日は言葉に変えて俺に投げつけた。

春日の気持ちが分かるなどと、おこがましいことをいう気はない。ただ、それが無意味だと知りながら、わめくことしかできない苦しみも、目を背けることしかできない弱さも、俺にはよく分かる。今、夏美の胸で泣きながら「私だって、変わりたかったから」と訴えるその意思を叶えるのが、どんなに難しいことなのかも理解しているつもりだ。だが素直にその思いを後押ししてやれるほど、俺は優し

くはないのだ。

「……ほんと、お前って馬鹿だよな。この会に優勝したからって、本気で自分が変わるって信じてんのか。おめでたい奴だな」

「一輝……」

すがりついて泣く春日の肩を抱きながら、夏美が俺を見つめる。その目から逃れるように目を逸らしてまで、こうしている俺はただの意地っ張りか、ガキなのか。

「自分を変えたいってんなら、まず他人と自分を物差しで測るようなことから止める。それでも納得できないなら、この会で優勝すれば文句ないだろ」

そう言って、俺は頭を掻きながら席を立ち、メンバー全員に言うてやる。

「言っとくけど、俺は、優勝の特権が欲しいだけだからな」

「おーっしゃあ！ それでこそ、一輝だぜえ！」

もう復活して、やかましく叫ぶ重雄の声に続き、文庫本を閉じて、男子学級委員が呟く。

「ふっ。僕の策に抜かりはないさ」

そして――。

「知ってるよ」

夏美の声が俺の耳をくすぐった。

「一輝がそんなのに興味ないってこと」

「……うるせえよ」

「不器用」

からかうように笑う夏美に、俺は顔をしかめることしかできず、ふと逸らした視線の先で、井上と目が合った。

俺と目が合うと、井上はなぜか気まずそうに俺から目を逸らしたが、そんなことに気を留める暇もなく、俺達チームの出走を告げるチャイムはけたたましく鳴り響いた。

二十話「奥の手」

『さあ、さあ、さあ、皆さんお待ちかねえっ！　いよいよ、いよいよ、ムテキングの弟、綾瀬一輝が今あ！　固い檻の中から解き放たれてしまったああああ！　ヘルプ、ヘルプ、ミイイイイ！　デンジャーデンジャー、ブーブー！　これは神のいたずらか、はたまた、最強のDNAは最強の敵をおのずと引き寄せてしまうということなのかああ！　とにもかくにも、開始直後からまさに頂上決戦勃発だああああああ！！』

最強のガキの行く道の前に仁王立ち！　威風堂々たるその様は、まさに怪童！　逃げも隠れもせずこいつはずっと廊下の真ん中で40分も馬鹿みたいに微動だにせず待っていたああ！　律儀だ、律儀すぎるぞ怪童お！　その鋭い瞳は、語っているっ！　最強は俺だっ！　ナンバーワンは俺だっ！　正々堂々ここで白黒つけてやるっ！　邪魔しやがる奴は誰であろうとぶっ殺すっ！　無言で突き付ける宣戦布告！　こいつの眼にはもう、綾瀬一輝しか映ってねえええええええええ！　優勝候補ナンバー2！　如月一心ここに推参だああああおうああああああ！！』

とまあ、やかましい実況のおかげで現状は理解してもらえたと思うが。

「おい、男子学級委員……。この事態は想定内か？」

「待ち伏せは想定してたけど、まさか正面から堂々とお待ちかねとはね……」

「……おい」

「大丈夫。こちらには今、三人女子が揃ってる。飛んで火にいる夏の虫さ」

「……」

しかし、俺達の行く道をたった一人で塞ぐそいつは、男子学級委員の机上の空論などはねつけて、俺を睨んでいる。あくまで、俺一人をだ、ちくしょう。

……如月一心。男子学級委員の話では、こいつが参加メンバー中最強という話だが――。

『さあ、ここで如月一心のプロフィールがこちらに舞いこんでまいりましたああ！ 誰だよ、こんな奴知らねえよって世間知らずなそこのてめえら！ 耳いかっぱじってよく、聞けい！ 身長170センチ、体重五十三キロ、座高は、って、どうでもいいわそんなことっ！ とにかく、人生これ武道だと言わんばかりのこのクレイジー野郎に常識は一切通用しねえっ！ 入学直後のお約束、怖―い先輩方の洗礼を見事に返り打ち、連戦連勝！ ケンカに武術を容赦なく駆使するそいつは語る！ どこかに俺より強い奴はいないのかっ！』

あのムテキングすら対戦を拒むさすらいの一匹狼VSMテキングの弟！ 怪童対最強のガキ！ 夢のカードがここに実現だあああああああ！』

――ぐらい、やばい奴らしい。まあ、姉貴が対戦を拒むのはただやるのが面倒なだけだろうが、厄介な奴には違いないらしい。なんか「漢」と書いて「おとこ」と読みたいな面倒くさそうな面構えのそいつは、先ほどから俺を睨むばかりで動きを見せないのだ。が、その佇まいは確かにヤバイ感じではあるが、実況など信憑性の欠片

もないことは承知済みなので、鵜呑みにする気など毛頭ない。しかし、このままいつまでも黙ってお見合いをしているわけにもいかないが、おいそれとこちらから動くわけにもいかないのだ。言っても分からないだろうが、ウチのチームはまさに今、解散の瀬戸際に立たされている。

「おいおいおい、てめえ！　ちょっと有名だからって調子に乗ってんじゃねえぞ、そのツルピカハゲ！」

と、ここで空気の読めない重雄が、一人勇敢にずかずかと如月の元へと近寄って行った。俺も男子学級委員も春日も夏美も井上も、その行為を黙って見守るばかりだ。愛すべきこの馬鹿の犠牲一つで「その必要性」が測れるというのなら、俺達は断腸の思いで仲間を一人差し出そう。いや、早速ウザい奴が消えてラッキーとか思っていないから。如月は強そうだが、実は奇跡的に重雄より弱いかもしれないじゃないか。ちなみに、如月はスキンヘッドだ。

学制服。黒一色に身を包んだ如月は、腕組みをしたまま、未だ俺を見据えている。その少し切れ長な目の奥で光る鋭い眼光に、重雄の姿は映っていない。その見事な眼中にないっぷりは、どうやら、重雄の癪に障ったらしい。

「おい、こら！　どこ見てんだよ、てんめえ！」

おお、少々目立てるイベントだけに、気が昂ぶってるみたいだな、バカ。

「こう見えても、俺は空手三段だぞ、こら！　おまけに柔道六段に剣道七段に、合気道四段の武闘派なんだよ、舐めてっと死ぬぞ、こらあ！」

小学生にもバレそうな嘘を並び立て、重雄が如月の襟首を掴み上げる。実況も奴の嘘に食いつき、ここに、最強のガキの右腕VS怪童のドリームマッチが実現した。が――。

「天国か地獄好きな方に行ってこいやあ！」

陳腐な台詞とともに、重雄が如月の襟首を掴んだまま顔面に殴りかかろうとした時、初めて如月が動いた。

殴りかかるモーションに入った重雄の右腕を片手で制し、重雄の懷に入った如月は、足払いを決め、倒れかかってくる重雄に待ってましたの一本背負い。豪快に床に叩きつけられた重雄だったが、異常なタフネスに物を言わせ、技を決め終えて悠然とその場に立つ如月の背後から懲りもせず襲いかかり――俺達は全員息を呑むこととなった。

まるで、後ろに目がついてでもいるように、如月の瘦軀せうこが宙高く舞った。目標を見失い、つんのめる重雄。焦って辺りを見渡すところを見ると、目の前の重雄には如月の動きが全く見えていなかったらしいが、少し離れた場所から見ている俺達には、天井すれすれまで宙を舞う如月の姿が見えていた。

そして、俺達の集う視線に釣られて上を向いた重雄の顔面を右手で鷲掴み、如月は重雄の顔面を土台に片手で逆立ち状態で静止してのけた。並み外れたその身体能力を自負するかのよう、天に一直線に伸びる如月のその姿勢はまるで芸術といっても過言ではなかっただろう。下であわあわとなす術もない重雄はさすがに哀れだったが、時すでに遅し。如月はその状態から地に降り立つ重力と遠心力を利用して――あえなく、重雄轟沈。

最強のガキの右腕VS怪童のドリームマッチは、秒殺で幕を閉じ、やかましい実況担当も、この時ばかりは言葉が出てこないらしい。

静まり返った空気の中で、如月が足元で動かなくなった重雄を一瞥し、俺に視線を留めた。

「……かかってこい、綾瀬一輝」

……絶対に嫌だ。

厳かに放たれた如月の言葉に、言葉を失くしていた実況が復活。しかし、それを無視して、如月は言葉を投げかけた。……俺に。

「俺がこの会に参加したのは強い奴と闘いたいからだ。優勝など、元より眼中にない。俺が望むのは、最強の敵との試合のみ。——お前だ。綾瀬一輝」

なんて傍迷惑な買い被りだ……。

「と、とにかく、これで間違いなく必要だということは分かったな……」

「そうだね……」

男子学級委員と耳打ちしてから、俺はちらりと後ろに控える女子三人に視線を移す。俺と目が合うと、三人はお互いに目を見合わせ、気まずそうにもじもじするばかりだ。そして、振り返ると、殺る気満々の如月が臨戦態勢を整えている。その背後には、ビデオカメラを構えたカメラマン二人。これでやれというのはさすがに酷だ。レ

ンズの向こうじゃ全校生徒が見てるわけだしな……。

「し、仕方ねえ……。ここは——」

「ま、まさか、綾瀬君。君……」

俺の悲壮な決意を前に、男子学級委員が息を呑む。そんな男子学級委員に肯いて見せ、俺は微笑んでやった。

「お前が突撃して俺の逃げる時間稼いでくれ」

「……ほう」

俺のナイスアイデアに男子学級委員も口元を歪めて笑う。

「それは見事な愚策だね。その発想に辿り着くのはさしずめ救いようのない馬鹿といったところかな？」

「ははははは。まあ、てめえじゃ如月相手に一秒も持ちそうにないしな？ それにしても、のっけから大ピンチって、ただだけ抜かってんだって話だよな。教室でる前かっこつけてあの馬鹿なんつってたかな。ああ、そうだ。『ふっ。僕の策に抜かりはないさ』って、抜かりまくってるぞ、死ねっ。て本人がいたら言ってやりてえよ。まあ、俺がその馬鹿ならおこがましくてとてもこの場に顔なんて出せねえけどな？」

「黙りたまえっ！ そもそも、女子がやってくれれば——」

「やってくれるわけねえだろ！ あのレンズの向こう側で全校生徒が見てんだぞっ！」

と、如月を完全無視して俺と男子学級委員が取っ組み合いの喧嘩を始めようとした時だった。

「……私、やる」

その声に、俺と男子学級委員はお互いの襟首を掴み上げたまま固まる。そして、そんな俺達の横を素通りし、春日は俺と男子学級委員の数歩前で足を止めた。

「やるよ、私……。だって、優勝したいもん」

言葉とは裏腹に、春日の肩は小刻みに震えていた。

「お、おい、春日……。無理すんな」

「無理したいの」

「……言っとくけど、無理して優勝したってな——」

「分かってるよ。……ありがとね、綾瀬」

「え……。あ、おい——」

歩きだした春日を引き留めようと伸ばした俺の手は、横から男子学級委員に止められた。

「綾瀬君。彼女の覚悟は本物だ」

「で、でも……。！」

離れていく春日の後ろ姿を見守ることしかできない俺。真摯な顔をして、首を横に振って見せる男子学級委員。そして――、春日は如月と対峙した。

「いいのか、綾瀬一輝」

ずっとほったらかしにされていた如月が、厳かに声を出す。こいつは、案外いい奴なのかもしれない。

「相手が女だろうが、俺は容赦しないぞ」

……前言撤回。

しかし、引く気のない春日を前に、とうとう如月も意識を春日へと向けた。

「忠告しておく。女。こうなりたくなかったら、今すぐ道を開けろ」

こう、とは足元で転がる重雄の死体のことだ。

殺人的なオーラを体中から発する如月。しかし、春日は懸命に如月の前からどかず、その決意は揺るがなかった。

「……いやよ」

「……いいだろう」

臨戦態勢に入る如月。そして、春日は最終手段に打って出た。

『おおあーとおお！！　こ、こ、これは一体何事だあああああー
！！』

二十一話 「三十秒ルール」

ぶっちゃけるなら、まさに今、このタイミングなのだろう。それで、ずたずたに裂かれた春日の羞恥心が救われるとは思わないが、少なくとも、春日の名誉を守るという意味では、その行動に大義があつたことをリーダーである俺が責任を持って証明してやらねばなるまい。

『こ、これは一体どう解釈すればいいんだー!! 分からねあーい
血迷ったか、それとも挑発のつもりなのかっ!! とにかく、
実況の私が責任を持って全校生徒の代わりにツツコミましょう!
ん、んんっ! んっ! あー、ゴホン!』

それは如月一心の弱点に起因する。つまり、そう。

『——うおおい！ その女子いい！ お前はなんでっ！』

勘のいい奴はとくに気付いていることとは思うが――。

『なんでお前は脱いでんだー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

——如月一心は、超絶純情男……らしいのだ。

超絶純情Ⅱ女に弱い。そこで、男子学級委員が事前に女子に授けた策がこれだ。

「如月に出会ってしまったら、女子はみんな服を脱いでくれ」

あえなく、全会一致でその策は却下された。が、男子学級委員は

食い下がった。

「大丈夫だよ。下に水着を着れば何の問題もないだろう？」と人権無視のヒトラー発言をかまし、^{ひんしゅく}顰蹙を買う。が、言葉巧みに男子学級委員はこう説得。

「よく考えてみてくれ。一クラスにカメラマンは一人なんだ。そして僕達は三組に分かれて行動する。会は始まれば乱戦になるし、そうなれば死角もおのずと生まれる。特に、如月一心は腕に覚えがあるから、単独で行動するはずだ。つまり、如月と鉢合わせてしまっても、現場を見ている者はいない確率の高いのさ。カメラマンがいなければ、君達も大丈夫だろ？」

そして、とどめの口説き文句がこれだ。

「綾瀬君のためだと思って、ここは一つ協力してくれ」

しかし、その場にいた井上と夏美は最後まで悩んだ末、答えを当日に持ち越した。その後、不在だった春日を、男子学級委員がどう説得したのかは定かではない。

乱戦になる前に如月が俺達を待ち構えていた時点で、女子は身を切るかどうか、究極の選択に迫られたことだろう。だからこそ、本当にその必要性があるのか……つまり、如月の実力が前評判通りであるかを知る必要があったのだ。もし、間違っただけで如月が弱かったりしたら、それこそ、脱ぎ損だ。が、尊い重雄の犠牲でその心配もなくなった。と、その辺の心理面を踏まえてもう一度読み直してみた奴は、そうしてくれ。言っとくが、こっちは真剣そのものだ。

『しかもっ！！　なんでお前はスク水なんだー！！！！！！』

……それが精一杯の妥協点なのだと、分かってやれるのは、世界で俺達四人だけ。

「ば、馬鹿なっ！　なぜだっ！　なぜスクール水着なんだっ！　僕はビキニにしろと言っただろっ！」

……いや、間違えた。三人だった。

衣服を脱ぎ棄て、スクール水着姿になった春日に、この上文句をつける男子学級委員の頭を春日の代わりにはたいてやることしかできない俺は何と無力なことだろう。

心ない実況にもめげず、春日は精一杯の決意を胸に、少しもじもじしながらも、如月と向き合っていた。一方、如月は――。

「あ……うああ……」

……分かりやすくうろたえていた。スクール水着の女子一人に。

「……マジでか」

「っふ。どうだい？　僕の策の威力は。身に着けたのがビキニであれば、その瞬間勝負は着いていただろうがね」

「……ノーコメント」

コメントするのもアホらしいわ。まあ、春日の頑張りにだけは敬意を表するが……。しかし、春日。お前、変りたい一心で道を踏み外してはいないか。そんなことして明日から、大丈夫かお前。

『おああーと、これはどういうことだあ！ 圧倒的強さを見せた怪童が後ずさりをしているう！ 明らかに、ビビっているぞ、怪童！ どうした、怪童！ お前は一体何にビビって——っと、お待ちくださいっ！ ここで、衝撃的な情報が舞い込んでまいりましたあっ！ な、なんと、怪童はっ！ ——超純情野郎らしいぞ、なんじゃ、そりゃああああああっ！！』

ようやく事態に追いついた実況をよそに、如月はさっきまでの威圧感を霧散させ、今にも腰を抜かさんばかりの戦きようだ。哀れなほど目を泳がせる今の如月は、さっきまで「強い奴と闘いたい」と豪語していた奴とはまるで別人。そのリアクションは、恥ずかしいを飛び越え、もはや恐怖の領域だ——などと、視界の中心で変貌した如月に呑気に気を取られていた俺の意識を引き寄せたのは、春日の震える後ろ姿だった。それから、反射的にビデオカメラ二台のレンズが、春日に集中していたことに気付き、俺は心の中で舌打ちをした。馬鹿か、俺は。

瞬間、考える前に俺は思い切り地面を蹴った。

一度は極限まで張りつめた緊張の糸は、春日のおかげで切れていた。すでに戦意を失くした如月は、予想通り俺の奇襲にまともに抵抗もできず、あっさりと懷に侵入を許す。

中学時代に一度だけ習った柔道技に沈められる如月の屈辱が後に報復となって返ってくるのではないかと、脳裏によぎりながら仕掛けた大外刈りは、まるで生きた心地がしなかった。その躊躇を力任せに振り切り、俺は如月の足を払い様、タツクル同然に如月に突進し、床に激突した。

全身に鈍い痛みが走る。が、如月にかぶさって倒れた俺のダメージは浅く、一方、受け身も取れず仰向けに床に衝突した如月は――白目をむいて気を失っていた。

すぐさま、如月の学ランについたバッチを奪い、起き上がる。足元でピクリとも動かない如月に、つい捨て台詞などを吐いてしまったのは、アドレナリンが大量放出していたからに違いない。

「お前は優勝なんか眼中にないだろうけどな。俺は優勝しか眼中ねえよ」

「あ、綾瀬……」

ぽかんとして立ち尽くした春日は、俺と目が合うと気が抜けたのかその場にへたり込んだ。俺は小さく息をつき、その健闘を称え、身に着けたブレザーを脱ぎ、それを春日に羽織らせてやった。

「あ……」

まだうまく状況が飲み込めず、戸惑いがちに声を漏らす春日に、俺は。

「優勝へ、まずは第一歩だな」

そう言うってから、苦笑した。今更、自分の言動がなんか恥ずかしくなったわけだが、たまにはそういうのも悪くないなと思えるのは多分。

「――う、うんっ」

初めて、春日の笑顔を見ることができたからかもしれない。

春日の屈託のないその笑顔は、春日に植えつけられたこれまでの印象を覆すほど強力で——言い変えるなら、不覚にもドキッとしてしまうその笑顔を、更に言い変えるならギャップの威力は恐ろしく——……分かった、認める。ちよつと、可愛いと思っちゃったんだよ、畜生。

図らずも長く絡まってしまった視線を先に解いたのは春日だった。顔を赤らめ、織ったブレザーを胸に引き寄せて俯く春日。断っておくが、その傍には動かなくなった人間が二人白目をむいて転がり、何より、春日はスクール水着姿だ。俺は断じてまでもドキリとなどしていない。が、ばつが悪くて、逸らした視線の先で、夏美がジト目で俺を見ていた——が。

「か、一輝っ！」

表情を一変させた夏美が、不意に俺の名前を叫んだ。それが危険を知らせるシグナルであることに気付いたのは、背筋に走った悪寒に思わず振り返った後だった。

さっきまで白目をむいていた如月が、いきなり目の前に立っていた。まるで、悪い冗談だ。しかし、冗談にしては、そいつは悪魔が乗り移ったような凄まじい形相で俺を睨みつけていた。

金縛りとはまさにこのことなのだろう。如月を倒した時に危惧した報復は、思ったよりずっと早く俺の身に降りかかった。

シャツの襟首を掴まれたと感じた瞬間、抑えきれない圧力が真正面から俺に追突してくる。踏ん張ろうにも、宙に浮いた俺の足は虚

とはこのことだ。ああ、ハゲだから例えが悪いか。絶対絶命だし、意識がボーとするので、もう笑うしかない。なあ、如月。お前は何でハゲなんだ？

『おああーと！ 最強のガキ、絶体絶命っ！』

……お前のせいだな。

『怪童がっ！ 怪童があああああーとおあ！ な、なんということだー！！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6347c/>

ドリーム×リアリティ ファントムな君

2010年10月8日13時16分発行